

受贈  
広島大学

3.12.26

附属図書館

# 広島大学文学部紀要

第49巻 特輯号 3

行為と言語

サンスクリット意味論研究：動詞語根の意

小川英世

1990年4月

行為と言語

サンスクリット意味論研究：動詞語根の意味

小川英世

## はじめに

本稿は、サンスクリット意味論の基本文献 Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra (「文法家の装飾品—精要」) より Dhātvarthanirṇaya (「動詞語根の意味の確定」) の章を取り上げ、和訳解説を試みたものである。Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra は、バトージ・ディークシタ (Bhaṭṭoji Dīkṣita) の著した詩頌集成 Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā (Vaiyākaraṇamatonmajjana) に対してカウンダ・バッタ (Kaunḍabhaṭṭa) により著された大注釈書 Vaiyākaraṇabhūṣaṇa が彼自らによって要約版化されたものである。同詩頌集成の第1詩頌マンガラ部と、動詞語根 (dhātu) の意味に関する問題が扱われている第2詩頌から第22詩頌までの中で動詞語根の意味についての基本的な見解が表明されている第2詩頌に対する Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra が本稿の対象である。

バトージ・ディークシタが Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā を動詞語根に関する意味論の提示から開始していることは示唆的である。それはすべての言葉は動詞語根から派生しているというインドに古くからある言語の動詞語根起源説を思い起こさせる。しかしより本質的には、それは、文派生を目的とするパーニニ文法学の派生組織において動詞語根がその中核に位置しているということによっているのである。

「料理している」といった表現の意味するものは何か。この問題に対するパーニニ文法家の答えが本稿において扱われている。パーニニ文法家にとって動詞語根が意味するものは「行為」(kriyā) であり、それは<ハタラキ> (vyāpāra) とそれが生みだす<結果> (phala) の二つのアспектをもつ。そして「行為」に関して彼らはいくまでも言語的なレベルでの分析を試みており、存在論的な「行為」概念の記述に関心を寄せることはない。また言語的認識 (śābdabodha) の観点から彼らの理論は、その内容 (viśaya) の核を動詞語根が意味する「行為」とみなすことから「動詞語根が意味する【行為】を主被限定者とする認識」(dhātvarthakriyāmukhyaviśeṣyakabodha) の理論と特徴づけられるが、これはニヤーヤ学派の「<主格接辞>で終わる名詞項目の意味を主被限定者とする認識」(prathamāntārthamukhyaviśeṣyakabodha) の理論およびミーマーンサー

学派パーッタ派の、〈ハタラキ〉(bhāvanā) は定動詞接辞 (tiñ, ākhyāta) によって表示され、それが言語的認識内容の核に位置するとする「定動詞接辞が意味する〈ハタラキ〉(bhāvanā) を主被限定者とする認識」(ākhyātārthabhāvanāmukhyaviśeṣyakabodha) の理論との闘争を不可避なものとしている。

「意味論」に対応するサンスクリット語を強いて上げれば arthaprakriyā, arthānuśāsana であるが、当然「意味論」は言語の分析 (śabdaprakriyā, śabdānuśāsana) と不即不離の関係にある。その意味で本稿は関連のパーニニ文法規則に関して可能な限りの説明を与えている。

同じ著者による Vaiyākaraṇabhūṣaṇa の Dhātvarthanirṇaya の章については S.D. Joshi 博士の研究がある (Cardona [1976])。しかし未出版・非公開のため博士の研究を利用できなかったことは誠に残念である。

本稿は解説に多くの紙幅を費している。それは原典の意図を能う限り正確に表現する試みであった。単なる原典の「翻訳」からは何ものも得られない。当然のことながら「解説」は筆者の「解釈」の提示である。Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra を理解する上でのひとつの困難さは、それがナヴィヤ・ニヤーヤ的用語法あるいはその思考パターンの強い影響下にあるという点にあり、本来ならば解説においてはその点に関してより懇切丁寧な説明が与えられるべきであったかも知れないが、紙幅の都合上多くの場合参考文献を指示するに止めている。

本稿を著すに際し、桂紹隆教授より多大なる御配慮を頂いた。本稿をまとめように強く御勧め下さった上に、本稿を著す際の私の我儘をすべて御寛恕下さった教授に記して謝意を表する次第である。また私の敬愛してやまない学兄全翊秀氏からは貴重なる助言を頂いたと同時に、氏との議論をつうじて多くの啓発を受けた。心よりの感謝を捧げる次第である。

# 目 次

はじめに

原典・注釈・著者について ..... (1)

本文 (和訳および解説)

0. マンガラ ..... (7)

【註解0】 ..... (8)

1. マンガラ ..... (12)

1.0 導入

1.k kārīkā 1

1.1 k.1 注釈

【註解1】 ..... (13)

2. 定動詞形の意味 (dhatu の意味と tiṅ の意味, 文 (dhatu+tiṅ) の意味)

【dhatu の意味】 ..... (14)

2.0 導入

2.k kārīkā 2

2.1 {dhātuḥ} と {smṛtāḥ} の統語関係

2.2.1 <結果>とは何か

2.2.2.1 <ハタラキ>とは何か

2.2.2.2 <実現さるべきものであるという相>とは何か

2.2.2.3 <ハタラキ>指示と<指示対象性の局限者>

【註解2】

2.k ..... (16)

2.1 ..... (16)

2.2.1 ..... (17)

2.2.2.1 ..... (19)

2.2.2.2 ..... (21)

2.2.2.3 ..... (23)

【tiṅ の意味1】 ..... (32)

2.3.0 指示対象=基体, <指示対象性の局限者>=<基体性>

2.3.1 基体指示の根拠 (P3.4.69) 提示

【註解 3】

2.3.0 ..... (33)

2.3.1 ..... (46)

【tiÑの意味 2】 ..... (56)

2.3.2 ニヤーヤ学派のP3.4.69解釈 (指示対象=<努力><結果>とその批判)

2.3.3.1 ミーマンサー学派バーッタ派のP3.4.69解釈 (指示対象=<ハタラキ> (bhāvanā)) とその批判

2.3.3.2 ミーマンサー学派バーッタ派のパラフレーズによる指示対象確定とその批判

2.3.4.1 tiÑと共起項目の対象間の不異なるものとしての結合に基づく<行為主体>指示の確立

2.3.4.2 ミーマンサー学派バーッタ派の解釈 (tiÑと共起項目の同一指示対象性は<間接的指示関係>に基づいて成立する) とその批判

2.3.5 意味の担い手はL接辞ではなくtiÑである

【註解 4】

2.3.2 ..... (60)

2.3.3.1 ..... (62)

2.3.3.2 ..... (66)

2.3.4.1 ..... (71)

2.3.4.2 ..... (75)

【文 (dhatu + tiÑ) の意味】 ..... (80)

2.4.0 導入

2.4.1 <行為主体><目的>はそれぞれ<ハタラキ><結果>に対する限定者

2.4.2.1 <数>は<行為主体><目的>に対する限定者

2.4.2.2 ニヤーヤ学派<prathamāntamukhyaviśeṣyakabodha>論批判

- 2.4.3.1 <時間>は<ハタラキ>に対する限定者
- 2.4.3.2 <時間>が<行為主体><目的>に対する限定者とならない理由
- 2.4.3.3 <時間>は<結果>に対する限定者であるとする見解の提示とその批判
- 2.4.4.1 限定関係結論と主被限定者=<ハタラキ>の提示
- 2.4.4.2 Nirukta・Bhāṣya の権威に基づく主被限定者=<ハタラキ>論証
- 2.4.4.3 間接論証 (<主格接辞>で終わる項目の意味に主要性を仮定した場合 {paśya mrgo dhāvati} は正当化されない)
- 2.4.4.4 <ハタラキ>を PRAKĀRA とする認識と<想起>の因果関係の提示
- 2.4.5.1 {pacati} {pacyate} 一認識内容提示
- 2.4.5.2 {ghaṭo naśyati} 一認識内容提示
- 2.4.5.3 {devadatto jānāti} {devadatto icchatī} 一認識内容提示

**【註解5】**

2.4.1 .....	(86)
2.4.2.1 .....	(86)
2.4.2.2 .....	(89)
2.4.3.1 .....	(91)
2.4.3.2 .....	(92)
2.4.3.3 .....	(93)
2.4.4.1 .....	(94)
2.4.4.2 .....	(94)
2.4.4.3 .....	(99)
2.4.4.4 .....	(105)
2.4.5.1 .....	(106)
2.4.5.2 .....	(107)
2.4.5.3 .....	(109)
参考文献 .....	(111)

## 原典・注釈・著者について

### I. Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā / Vaiyākaraṇamatonmajjana

パーニニ文法学における prakriyā 文献と称される派生手続の教本類の中で最も完成度の高い、また最も有名な作品 Siddhāntakaumudī の作者として知られているバトージ・ディークシタは、サンスクリット意味論あるいは文法哲学の分野で、バルトリハリ (Bhartṛhari) の Vākyapadiya の詩頌、あるいはミーマーンサー学派のクマーリラ・バッタ (Kumārila Bhaṭṭa) の Bṛhaṭṭikā と思われる作品中の詩頌の部分的引用を含む74の詩頌からなる作品 (kārikāvali) を著している。その内容を簡単に示せば以下のとおりである。

- |           |   |
|-----------|---|
| k.1       | マンガラ  |
| kk.2-21   | 動詞語根の意味 (dhātv-artha)                         |
| kk.22-23  | 動詞接辞 L・その代置要素としての定動詞接辞 (tiṅ) の意味 (lakārārtha) |
| k.24      | 名詞接辞の意味 (sub-artha)                           |
| k.25-27   | 名詞語幹の意味 (nāmārtha)                            |
| k.28-36   | 複合語の〈直接的指示関係〉 (samāsaśakti)                   |
| k.37-39   | 言語項目と意味との関係 (〈直接的指示関係〉) (śakti)               |
| k.40-41   | 否定詞の意味 (nañārtha)                             |
| k.42-48   | 不変化詞の意味 (nipātārtha)                          |
| k.49-52ab | 属性接辞の意味 (bhāvapratyayārtha)                   |
| k.52cd-55 | 神格接辞の意味 (devatāpratyayārtha)                  |
| k.56      | 統合形における数概念 (abhedaiikatvasaṁkhyā)             |
| k.57-59   | 数接辞使用と話者の意図 (saṁkhyāvivakṣā)                  |
| k.60      | avyayakṛt の意味 (ktvādyārtha)                   |
| k.61-74   | スポータ (spoṭha)                                 |

[kk.14-5 = VPIII, kriyā, kk.47-8. k.19 = VP, ibid., k.88. k.35 = VPII, k.306. kk.37-9 = VPIII, sambandha, kk.29-31. k.68cd-69ab = VPI, k.74. k.72cd-73ab = VPI, k.96. k.73cd-74ab = VPIII, jāti, k.32. k.67cd = Bṛhaṭṭikā (?)]

この作品は、通例‘Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā’という名称で呼ばれているが (Abhyankar [1977: 371]), しかしこれには確たる根拠があるわけではない。カウ نداバ ッタの両注釈書の何れにおいても、この名の言及はない。M. Bhaṭṭachārya [Vaiyākaraṇabhūṣaṇa c): Rūpālī328-332] は、1) ナーゲーシャ・バ ッタ (Nāgeśa Bhaṭṭa) は彼の Vaiyākaraṇa(-siddhānta-)laghumañjūṣā においてバ ットージ・ディークシタの詩頌 (k. 36) を |... iti vaiyākaraṇamatonmajjane dīkṣitāḥ| というように引用しており、2) ハリ・ディークシタ (Hari Dīkṣita) の Bṛhacchabdaratna の一節に |iti pitāmahacaraṇakṛtavaiyākaraṇamatonmajjanādau| が見い出されるということから、通称の‘Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā’ではなく、‘Vaiyākaraṇamatonmajjana’をこの作品の正式書名とすべきであるとしている。筆者はまた、同じくナーゲーシャ・バ ッタが彼の Sphoṭavāda [1977: 15] においても上記の形式に倣ってバ ットージ・ディークシタの詩頌 (k. 66cd-67ab) を引用していることを付け加えたい。バ ットージ・ディークシタからナーゲーシャ・バ ッタに至る連綿とした師弟関係の系図を思い浮かべる時、彼ら文法家のサークルの中で、バ ットージ・ディークシタの74の詩頌からなる作品が‘Vaiyākaraṇamatonmajjana’と呼ばれていたことはほぼ確実であるように思われる。

因に‘vaiyākaraṇasiddhāntakārikā’とは、逐語的には、「文法家の定説を表明する詩頌」の意であり、一方‘vaiyākaraṇamatonmajjana’とは「浮かび上がった文法家の見解」の意である。後者の名称は同じ著者による Śabdakaustubha と同様「乳海攪拌」神話を連想させる (cf. 1. k)。

## II. Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā / Vaiyākaraṇamatonmajjana に対する注釈文献

- ① Vaiyākaraṇamatonmajjini by Vanamālimiśra (A. D. 1670)
- ② Vaiyākaraṇabhūṣaṇa (Bṛhadvaiyākaraṇabhūṣaṇa)
- ③ Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra

①は Trivedī [Vaiyākaraṇabhūṣaṇa 刊本 b: Notes] に断片引用されている (cf. Cardona [1976: n. 545])。カウ نداバ ッタはこの詩頌集成に対して②と③を

著した。②は大部・難解であり，③はそれの要約版である。②と③は共に14の‘nirṇaya’（「確定」）と呼ばれる章よりなり—彼は例えば名詞接辞の意味を議論する章は‘subartha-nirṇaya’というように呼ぶ—各章において，この詩頌集成において扱われている既述のような論題（マンガラを除く）のそれぞれが議論されている。

### III. Vaiyākaraṇabhūṣaṇa 刊本

a) \*Paṭavardhana, Rāmakrishṇa Śāstrī (alias Tātyā Śāstrī) (Ed.)

*(Bṛhad) Vaiyākaraṇa-bhūṣaṇa, a treatise on Sanskrit grammar by Pt.*

*Kauṇḍabhaṭṭa; also Padārtha-dīpikā by the same author. Benares Sanskrit Series work 14, nos.51-4. Benares: Braj. B. Das and Co., 1900. (筆者未見)*

b) Trivedī, Kamalāśaṅkara Prāṇasaṅkara (Ed.)

*The Vaiyākaraṇabhūṣaṇa of Kauṇḍabhaṭṭa with the Vaiyākaraṇa-bhūṣaṇasāra and the commentary Kāśikā of Harirāma surnamed Kāla and with a critical notice of manuscripts, introduction, and critical and explanatory notes. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 70. Bombay: Department of Public Instruction, 1915.*

c) Bhaṭṭachārya, Manudeva (Ed., commentator)

*Bṛhadvaiyākaraṇabhūṣaṇam of Śrī Kauṇḍa Bhaṭṭa [A Commentary of Bhaṭṭojidikshīta's Vaiyākaraṇamatonmajjanam], edited with 'RUPĀLĪ Notes and Appendix. Harjivandas Prachyavidya Granthamala 2. Varanasi: Chaukhamba Amarabharati Prakashan, 1985.*

d) Vidya Niwas Misra (Ed.)

*Kauṇḍa Bhaṭṭa's Vaiyākaraṇabhūṣaṇam (A Treatise on Philosophy of Grammar). Vol.1. Delhi: Bharatiya Vidya Prakashan, 1987.*

c本・d本は批判的校訂本ではなく，b本をそのまま利用している。

### IV. Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra 刊本

- a) \*Tarkavācaspati, Tāranātha & Tarkālaṅkāra, Madana Mohana (Ed.)  
*Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāraḥ śrīkaunḍabhaṭṭaviracitaḥ*. Calcutta: Samskrit Press, 1849. (筆者未見)
- b) ĀNANDĀŚRAMA  
 Bhaṭṭojidīkṣita's *Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā*, edited with the commentary *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* of Kaunḍabhaṭṭa. 2d ed. Ānandāśrama Sanskrit Series 43. Poona: Ānandāśrama, 1978. [1st ed., 1901.]
- c) See Trivedī.
- d) \*Phadke, Ananta Sastri (Ed.)  
*Vaiyakarana-bhushanasara* by MM. Kaunda Bhatta with a commentary called *Bhushana Sara Darpana* by Pandit Hari Ballabha. Kāśī Sanskrit Series 23. Benares: Chowkhamba, 1924. (筆者未見)
- e) Nandakiśoraśāstrī (Ed.)  
 With the *Kāśikā* of Hariśāstrī, Harivallabhparvatiya's *Darpaṇa*, and Guruprasādaśāstrī's *Tippaṇī*. Rajasthan Sanskrit College Granthamala 10. Benares: Bhārgavapustakālaya, 1935.
- f) Joshi, Sadāśiva Śāstrī (Ed.)  
*The Vaiyākaraṇa Bhūṣaṇasāra* by M. M. Śrī Kaunḍabhaṭṭa with the *Darpaṇa* commentary by Śrī Harivallabha, the *Parikṣā* commentary by Bhairavamiśra and a short commentary by Śrī Kṛṣṇa Mitra with *Tīnarthavādasāra* by Śrī Khuddī Jhā Śarmā; edited with notes, introduction etc. Kashi Sanskrit Series 133. Benares: Chowkhamba, 1939.
- g) Tārakeśvara Śāstrī Caturvedī (Tarkeshwar Chaturvedi Shastri) (Ed.)  
*Vaiyākaraṇ[a] Bhūṣaṇ[a] Sār[a] of Kaunḍ[a] Bhaṭṭa* with *Prabhā* and *Darpaṇ[a]* commentaries by Pt. Bal Krishna Pancholi and Pt. Hari Val-labha Shastri. Ādarśa-grantha-mālā 2. Varanasi: Tarkeshwar Chaturvedi Shastri, 1947. = Pañcholi
- h) Tripāṭhī, Rāmaprasāda (Ed.)  
 With the commentary *Saralā* by Gopālaśāstrī Nene and the notes Su-

*bodhinī* by Rāmaprasāda Tripāṭhī. Hari-kṛṣṇa-nibandha-maṇi-mālā 7. 5th ed. Varanasi: Chowkhamba, 1981. [1st ed., 1952.]

- i) Mārulkara, Śaṅkara Śāstrī (Ed., commentator)  
With the commentary *Śaṅkarī* of Śaṅkara Śāstrī Mārulkara. Ānandāśrama Sanskrit Series 135. Poona: Ānandāśrama, 1957.
- j) Pañcholi, Bālakṛṣṇa (Commentator)  
*Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra of Śrī Kauṇḍabhaṭṭa, edited with Prabhā Commentatry by PT. ŚRĪ BĀLAKṚṢṆA PAÑCHOLI, and with Darpaṇa Commentary by ŚRĪ HARIVALLABHA ŚĀSTRĪ.* Kashi Sanskrit Series 188. 2d ed. Varanasi: Chowkhamba, 1969.
- k) Bhīmasena Śāstrī (Ed., commentator)  
With the *Bhaimibhāṣya* of Bhīmasena, to the end of the dhātvartha-nirṇaya. Delhi: The author, 1969.
- l) Prabhākaramiśra (Ed., commentator)  
With the commentary *Prabhākari* [in Hindi as well as in Sanskrit]. Varanasi: Arabindamiśra & Makarandamiśra, 1982.

底本として利用したのは本書の代表的な注釈 Darpaṇa · Kāśikā を収めるe本である。

#### V. Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra に対する注釈文献

- a) *Bhūṣaṇasāravākhyā or Ratnaprabhā* (Durbalācārya alias Kṛṣṇamitra, c.1750)
- b) *Kānti (Laghubhūṣaṇakānti)* (Mannudeva alias Gopāladeva, c.1760)  
(Vaiyākaraṇabhūṣaṇa 刊本 b : Notes に断片引用)
- c) *Darpaṇa* (Harivallabha, c.1770-1790)
- d) *Parikṣā* (Bhairavamiśra, c.1780-1840)
- e) *Kāśikā* (Hariśāstrī, Harirāma Kāle, c.1797)
- f) \**Vivṛti* (Rudranātha) (筆者未見)
- g) *Prabhā* (Pañcholi, 1947)

- h) *Saralā* (Nene, 1952)
- i) *Śāṅkarī* (Mārulkara, 1957)
- j) *Bhaimibhāsyā* (Bhīmasena, 1969)
- k) *Prabhākārī* (Prabhākaramiśra, 1982)

これらの諸注釈の中筆者が主に参照したものは *Darpaṇa*・*Kāśikā* であるが努めて他の注釈にも目をとすようにした。原典自体についても言えることであるが、これらの注釈はナヴィヤ・ニヤーヤの術語・言回を多く用いている。特に *Prabhā* にはその傾向が著しい。

#### VI. バットージ・ディークシターカウンダ・バッターナーゲシャ・バッタ

Kane [1975:963-67] は、バットージ・ディークシタの年代を A.D. 1575-1645, ナーゲシャ・バッタの活躍年代を17世紀末から18世紀前半と推定している。Gode [1953-6:3:207-11] によれば、バットージ・ディークシタにとって甥にあたるカウンダ・バッタの年代は A.D. 1610-1660 と推定される。カウンダ・バッタはバットージ・ディークシタの弟であるランゴージ・バッタ (Raṅgojibhaṭṭa) の息子である。伝承によればバットージ・ディークシタは南インド出身の *Telugu Brāhmaṇa* であり、ベナレスにおいて学的活動をおこなった。バットージ・ディークシタの *Praṇḍamanoramā* に対して注釈書 *Bṛhacchabdaratna* を著したハリ・ディークシタはバットージ・ディークシタの孫にあたり、ナーゲシャ・バッタは彼の弟子である。

## 『文法家の装飾品 — 精要』 (Vaiyākaraṇabhūṣaṣāra)

### 和訳と解説

#### 0. マンガラ

「ガウリー女神 (パールヴァティー女神) の夫 [シヴァ神] の様相をとった優麗なるラクシュミー女神の夫 [であるヴィシュヌ神]<sup>1)</sup>を私は賞賛する。彼よりスポータ (sphoṭa) そのものであるこの世界のすべてが仮現している<sup>2)</sup>。」 (k.1)

「シェーシャ蛇 (Śeṣa) [の化身であるパタンジャリ (Patañjali) が著せる Mahābhāṣya 中] のすべての事柄が理解されるよう、あらゆる結果を賜わす、輪廻生存の大海を渡るための舟である、シェーシャ蛇を身につけた [シヴァ神] とシェーシャ蛇の上に安らう [ヴィシュヌ神]<sup>3)</sup>に私は懇願する。」 (k.2)

「[これから著さんと欲する書物が滞りなく] 完成するよう、彼の舌先でことばの女神 [サラスヴァティー女神] が絶えず喜びのゆえに踊り踊っている [我が] 伯父バットージ・ディークシタを私は讃える。」 (k.3)<sup>4)</sup>

「パーニニ (Pāṇini) を初めとする [三] 聖人<sup>5)</sup>に、さらには二元性 (dvaita) という暗黒の除去を主要目的とせる、ドンディ神 (ガネーシャ神) [の化身] である、人間の形態をとったことばの神 (サラスヴァティー女神) である、その名をランゴージ・バッタという [我が] 父に、最大級の敬礼をなし、ガウタマ (Gautama) やジャイミニ (Jaimini) の陳述 [せる Nyāyasūtra や Mīmāṃsāsūtra] を注解せる者たちによって論難された、[パーニニ文法学派の] 諸定説を、諸論理を通じて、私は実証し、[反対に] 彼らの所説を論難しよう。」<sup>6)</sup> (k.4)

「[あらゆる障害を蹴散らす] ガネーシャ神の蓮のごとき両足、師、そしてサラスヴァティー女神に敬礼し、理知的なる私カウダ・バッタは、[文法家の装飾品] (Vaiyākaraṇabhūṣaṣa) を著そう。」<sup>7)</sup> (k.5)

【註解 0】

1) 「ヴィシュヌ神と合体したシヴァ神」(Harihara)の神話については、Vāmanapurāṇaを見よ。

2) カウンダ・バッタはこの詩頌を著すにあたり、バルトリハリの次の詩頌を念頭に置いている。この詩頌はパーニニ文法学派の形而上学的立場「言語一元論」(śabdādvaitavāda)を端的に表明しているものとして著名である。

VP I, k.1: anādinidhanaṁ brahma śabdatattvaṁ yad akṣaram /  
vivartate 'rthabhāvena prakriyā jagato yataḥ //

「始まりも終わりもなきブラフマン (Brahman), それは言語 (śabda) を本質とし, [顕現した] 音素の因としての不滅なるものである。このブラフマンが諸事象として仮現する。それより世界の創造が起こる。」

スポータ (sphoṭa) とは, 言語を本質とする絶対者ブラフマンに他ならず, 「世界原因」(jagannidāna) とみなされる形而上学的原理である。Cf. VBhS on k.74: sphuṭaty artho 'smād iti sphoṭaḥ (「それより意味 (事象) が現出するものがスポータである」)。そしてそれは, 物理的現象としての音声 (dhvani) を超越した「言語の本質」「言語そのもの」(śabdatattva, śabdātman) である。

スポータは言語の本質でありしたがって絶対者ブラフマンそのものであるという言語哲学の原理と, この現象世界—名称と形態 (nāmarūpa) —はその絶対者ブラフマンからの仮現であるという「仮現説」(vivartavāda) が, 言い換えればパーニニ文法学派の哲学的立場のメルクマールがここに宣明されているのである。文法学派の「仮現説」は, P. Hacker [1953] が言うところの「幻影主義的多様—内—不異説」(illusionistischer Bhedābhedavāda) であり, 絶対者ブラフマンはその仮現である現象世界と真実には異なる。

また, 以上のような哲学的立場から, 特に「スポータ (sphoṭa) そのものである」と訳した {sphoṭarūpam} に関して, 以下のような解釈も可能である。

\* スポータ = ことば (śabda) ; 形相 (rūpa) = 意味 (artha) - 現象世界の構成要素である名称と形態 (nāmarūpa) [Darpaṇa, Parīkṣā]

「ガウリー女神 (パールヴァティー女神) の夫 [シヴァ神] の様相をとった優麗なるラクシュミー女神の夫 [であるヴィシュヌ神] を私は賞賛する。彼よりスポータ (sphoṭa) と [それにより開頭する] 形相の集合であるこの世界のすべてが仮現している。」

\* スポータ (sphoṭa) = 明らめるもの (samastārthaprakāśaka, svaparaprakāśa) = 絶対者ブラフマン [Darpaṇa 第2解釈] 「ガウリー女神 (パールヴァティー女神) の夫 [シヴァ神] の様相をとった, スポータ (sphoṭa) そのものである, 優麗なるラクシュミー女神の夫 [であるヴィシュヌ神] を私は賞賛する。彼よりこの世界のすべてが仮現している。」

3) śeṣabhūṣaṇa: 「シェーシャ蛇を装飾品 (bhūṣaṇa) とするもの」。ヴィシュヌ神はシェーシャ蛇を寝台とし, シヴァ神はシェーシャ蛇を祭紐 (yajñopavīta) のごとく肩からかけている。

4) この詩頌よりカウング・バッタの学問上の師 (guru) は, バットージ・ディークシタであることが知られる。

5) サンスクリット語の最古の体系的文典 Aṣṭādhyāyī の著者パーニニ (前5世紀), その補修を意図して Vārttika を著したカーティヤーヤナ (Kātyāyana) および大註解書 Mahābhāṣya の作者バタンジャリ (前2世紀中葉) の三者が, インドで古来文法の三聖 (munitraya) と仰がれた。パーニニ文法は「三聖文法」(trimuni vyākaraṇam) と呼ばれる。

6) (1) Pāṇiniya と Vedānta 哲学 - パーニニ文法学派の思想的立場は Vedānta 哲学である。言うまでもなくそれは言語哲学の大成者バルトリハリがパーニニ文法学の中に Vedānta 哲学を導入したことによっている。Das-

gupta [1922:II, 54-5] によれば、バットージ・ディークシタ、ランゴージ・バッタ、カウンダ・バッタは、孰れも不二元論(Advaitavāda)の思想的系譜の中で、表現活動を行っている。

(2) anubandhacatuṣṭaya — 作品 (grantha) の成立に不可欠な四要件 (anubandhacatuṣṭaya) が第 4 詩頌において宣明されている。1) 主題 (viśaya): パーニニ文法学派の諸定説。2) 目的 (prayojana) : その認識。3) 関係 (sambandha) : 理解関係 (pratipādyapratipādakabhāva)。4) 有資格者 (adhikārin) : パーニニ文法学派の諸定説を知らんと欲する者。

7) マンガラ部詩頌の数 — 第 1 詩頌から第 5 詩頌まで完備している刊本は b, c, e, i, k (b は第 4 詩頌と第 5 詩頌の順番が入れ替わっている。e は第 3 詩頌と第 5 詩頌を括弧で括っている), f, h には第 3 詩頌と第 5 詩頌がない。g = j, l には第 3 詩頌だけがない。今世紀に著された諸注釈文献における扱いは一応度外視して、比較的年代の古い注釈文献に限って第 1 詩頌から第 5 詩頌までの扱いを見てみると、Kṛṣṇamitra, Harivallabha, Bhairavamiśra は第 3 詩頌と第 5 詩頌に関してはまったく触れておらず、唯一 Harirāma だけが両詩頌に注釈を加えている。実は第 1 詩頌から第 5 詩頌は Vaiyākaraṇabhūṣaṇa にそのままの形で見いだされる。Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra は文字どおり Vaiyākaraṇabhūṣaṇa の「精要」(sāra) であり、両書にまったく同一のマンガラが用いられているとしても何等問題はないにしても、特に第 5 詩頌に関しては少しく問題となる点がある。

第 5 詩頌においては「理知的なる私カウンダバッタ (Kaunḍabhaṭṭa) は、『文法家の装飾品』(Vaiyākaraṇabhūṣaṇa) を著そう」(śrikaunḍabhaṭṭaḥ kurve 'haṁ vaiyākaraṇabhūṣaṇam) とある。Śāṅkarī 等は「名称の一部で名称全体が理解される」倣いで、{vaiyākaraṇabhūṣaṇam} という言及は Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra を意図しているものと解される、というように述べている。しかしながら、Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra においては次のような終結マンガラが与えられている。

aśeṣaphaladātāram api sarveśvaraṁ gurum /

śrīmadbhūṣaṇasāreṇa bhūṣaye śeṣabhūṣaṇam // (b, i, f, c, e, g = j, l)

[[あらゆる結果を賜わす、一切の主宰者でもある、シェーシャ蛇を身につけた [シヴァ神] とシェーシャ蛇の上に安らう [ヴィシュヌ神の化身である] 師を、私は聖なる [作品] 『装飾品 - 精要』 (Bhūṣaṇasāra) によって飾る。]]

このようにここにおいて自らの作品を‘bhūṣaṇasāra’と特定していることを考えるならば、第5詩頌において敢て当該作品の書名としては誤解をまねくような『文法家の装飾品』 (Vaiyākaraṇabhūṣaṇa) という名称を言及するであろうかという疑念を抱かざるを得ないのである。

## 1. マンガラ

[1.0] [導入] マンガラはこれから着手しようと欲する [作品] を\*阻害するものを抑止するために為される。[しかし、バットージ・ディークシタは] 聖パニン蛇 (Śrīphaṇin) [の化身であるパタンジャリ] の念想 (smaraṇa) という形のマンガラを, 学生たちの学習 [の障害なき遂行] のために [詩頌集成 (kārikāvalī) である本作品中に] 組入れ, 同時にこれから著わさんと欲する [作品] を宣言する。

[1.k] 「パニン蛇 [の化身であるパタンジャリ] によって言ぜられた [Maha-] Bhāṣya の大海から Śabdakaustubha (『<sup>シャブダ・カウストゥバ</sup>ことばの海宝』<sup>1)</sup>) が [私 (バットージ・ディークシタ) によって] 引き揚げられた<sup>2)</sup>。その [Śabdakaustubha] においてまさに説いた事柄を [今から私はバルトリハリ等によって著された詩頌を通じて<sup>3)</sup>] 簡潔に述べよう。」

phaṇibhāṣitabhāṣyābdheḥ śabdakaustubha uddhṛtaḥ /  
tatra nirṇīta evārthaḥ saṅkṣepeṇa kathyate //1//

[1.1] 「引き揚げられた」( {uddhṛtaḥ} ) という [語句] に「私 (バットージ・ディークシタ) によって」( {asmābhiḥ} ) という [語句] が補足されるべきである。「[Maha-] Bhāṣya の大海から Śabdakaustubha (『<sup>シャブダ・カウストゥバ</sup>ことばの海宝』) が [私 (バットージ・ディークシタ) によって] 引き揚げられた」( {bhāṣyābdheḥ śabdakaustubha uddhṛtaḥ} ) という表現は, Śabdakaustubha において述べられた事柄が, 現代人の構想になるものであるということ を否定するためになされている。なぜなら, もし現代人による構想性を否定しなければ, その [Śabdakaustubha] に基づく作品も, 現代人により構想された [作品の] 精要であるということになり, ひいてはパーニニ文法学徒達によって [その作品が] 取り上げられないということになるからである。「その [Śabdakaustubha] においてまさに説いた」( {tatra nirṇītaḥ} ) という表現は, さらに当該 [作品] 以上のことが知りたければ Śabdakaus-

tubha において知るべきである，ということを示唆するためである。

【註解 1】

\* h,k,l: prāripsitapratibandhakavyūhopaśamanāya. e: -pratibandhakopaśanāya [sic]. Darpaṇa, Parīkṣā: -pratibandhakopaśamanāya; Kāśikā: -pratibandhakavyūhopa-

1) 海宝 kaustubha は「乳海攪拌」神話において神々の乳海攪拌により大海より現われ，ヴィシュヌ神の胸に懸られることになる宝石。

2) Cf. ŚK, maṅgalakārikā 3cd: phaṇibhāṣitabhāṣyābdheḥ śabdakaustubham uddhare //

3) Darpaṇa: haryādinibaddhakārikābhir iti śeṣaḥ .

## 2. 動詞形の意味 (dhatu の意味と tiñ の意味, 文 (dhatu+tiñ) の意味)

### [dhatu の意味]

[2.0] [導入] [バットージ・ディークシタは]\*宣言したものを語る。

[2.k] 「dhatu は〈結果〉 (phala) と〈ハタラキ〉 (vyāpāra) の両者に対する [指示者として] 伝承されており<sup>1)</sup>, 一方 tiñ は [それらの] 基体に対する [指示者として] 伝承されている。〈結果〉 に対して 〈ハタラキ〉 は〈主要者〉 (pradhāna) であり, 一方 tiñ の意味は [〈ハタラキ〉 に対して] 〈限定者〉 (viśeṣaṇa) である。」

phalavyāpārayor dhātur āśraye tu tiñāḥ smṛtāḥ /  
phale pradhānaṁ vyāpāras tiñarthas tu viśeṣaṇam //2//

[2.1] 「dhatu は」 (|dhātuḥ|) というこの [語] に, 「伝承されている」 (|smṛtāḥ|) という [語] が数接辞変換 (vacanavipariṇāma) によって [|smṛtāḥ| と変換されて] 結びつく<sup>2)</sup>。

[2.2.1] 「〈結果〉 (phala)」とは, [例えば dhātu √pac 「料理する」に おける] 軟化 (viklitti) 等のことである<sup>3)</sup>。

[2.2.2.1] 一方「〈ハタラキ〉 (vyāpāra)」とは, [ミーマンサー学派パーッタ派が] 「生成力」と呼ぶところの (bhāvanābhidhā) <sup>4)</sup>, 実現さるべきもの (sādhyā) として [言語によって] 表示されるどころの〈行為〉 (kriyā) のことである。

そして Vākyapadīya に次のように言われている。

「実現されたものであろうと未だ実現されていないものであろうと, 実現さるべきものとして (sādhyatvena) [言語によって] 表示されるものは

すべて〈行為〉(kriyā)と呼ばれる。なぜなら、[〈行為〉とは]順序の相 (kramarūpa) を帯びるものだから。] (VPiII, kriyā, k.1) <sup>5)</sup>

[2.2.2.2] ところで、[〈ハタラキ〉が言語によって]実現さるべきものとして表示されるということに根拠がないことはない。|pacati| (「彼は料理している」) — |pākaḥ| (「料理」 <pāka> Nom. sg. m.), |karoti| (「彼は為している」) — |kṛtiḥ| (「行為」 <kṛti> Nom. sg. f.) 等において、dhātu [√pac, √kṛ] の意味の理解に区別はなくても [それぞれ前者においては] 他の〈行為〉に対する期待は起こらず、[後者においては] 他の〈行為〉に対する期待が起こるということが経験される。まさにこのことが根拠であるから<sup>6)</sup>。

このような場合、〈実現さるべきものであるという相〉(sādhyatva) は次のようなものである。

Xが実現さるべきものである時、そのXに存する他の〈行為〉に対する期待を引き起こさないという相をそのXに局限するもの、それがそのXの〈実現さるべきものであるという相〉である (kriyāntarākāṅkṣānutthāpakatvāvachedakarūpaṁ sādhyatvam)。

[要するに] その相をもつものであるということは、〈もの〉(sattva) ならざるものであるということである。Vākyapadiya に次のように言われているのはまさにこのことを捉えてであると理解すべきである。

[〈もの〉ならざる (asattvabhūta) 〈行為〉(bhāva) だけが定動詞接辞で終わる項目 (tiṅpada) によって表示される。] (VPiII, k.195cd) <sup>7)</sup>

[2.2.2.3] そしてこの[実現さるべきものとして表示される]〈ハタラキ〉は、火起こしの相・火入れの相・努力の相等のあれこれの相で表示される。なぜなら、|pacati| (「彼は料理している」) 等 [の表現] において、[√pac から] あれこれ [の相] を PRAKĀRA とする認識が起こることは経験より明らかであるから<sup>8)</sup>。

しかしながら、[このような場合  $\sqrt{\text{pac}}$  に] \*同音異義語性 (nānārthatā)<sup>9)</sup> が結果するということはない。なぜなら、「それ」(tad) 等 [の代名詞] と同じように、特定の認識 (buddhivīṣeṣa) 等といった、諸々の〈指示対象性の局限者〉(śakyatāvachedaka) に随伴するものが存在するからである。また\*定動詞形 (ākhyāta) によって [知らしめられる] 〈行為〉は、[〈指示対象性の局限者性〉(śakyatāvachedakatā) の] 〈局限者〉(avachedaka) である特定の認識<sup>10)</sup> の単一性をまさに捉えた上で、単一であると確定される<sup>11)</sup>。Vākyapadīya にも次のように言われている。

「順序に従って生ずる [諸々の部分的 〈ハタラキ〉] の集合 (samūha) が、〈行為〉と呼ばれる。この集合は、それに対して従属するものである諸部分を具え、[統合] 知によって [その諸部分間に] 不異性 (abheda) が仮構される。」(VP III, kriyā, k.4)<sup>12)</sup>

## 【註解 2】

\* i, k : pratijñātārtham. b, c, e, f, h, j, l : pratijñātam.

\* c, e, f, g = j, h, k, l : nānārthatā. b, i : nānārthakatā.

\* e : ākhyāta-. b, c, f, h, i, g = j, k, l : ākhyāte. Darpaṇa は前者を支持 (ākhyātetī nirvibhaktikaḥ pāṭhaḥ sādhuḥ)。

### [2. k]

1) 「伝承されている」(smṛta) とは、師資相承によって伝承されているパーニニ文法学の伝統の中でそのように知られている、ということである。Cf. BM on SK2258: . . . smṛtāḥ — pāṇinīśiṣyaparamparayā jñātā ity arthaḥ.

### [2. 1]

2) 数接辞変換はひとつの統語技術。k.2ab |phalavyāpārayor dhātur āśraye tu tiñāḥ smṛtāḥ| において、|smṛtāḥ| は |tiñāḥ| |dhātur| の両語を受けている。すなわち当該文は |dhātuḥ smṛtāḥ| [A] |tiñāḥ smṛtāḥ| [B] という二文に分割される。いずれの文においても 〈smṛta〉は限定詞 (viśeṣaṇa, viśeṣaṇa-

vācakapada) である。B 文においては被限定詞 (viśeṣya, viśeṣyavācakapada) 〈tiñ〉と限定詞 〈smṛta〉は同一の数接辞 (vacana) — 複数接辞をとっている。一般にはこのように同格関係にある被限定詞と限定詞は同一の数接辞をとる。したがって A 文においても限定詞 〈smṛta〉は被限定詞 〈dhātu〉と同一の単数接辞をとるべきである。よって A 文は {dhātuḥ smṛtaḥ} というように {smṛtāḥ} の複数接辞を単数接辞へ変換することによって 〈dhātu〉と 〈smṛta〉の統語が成立する。Cf. Vyutpattivāda, p.18: yatra viśeṣyavācakapadottara-vibhakti tātparyaviśayasamkhyāviruddhasamkhyāyā avivakṣitatvañ tatraiva samānavacanakatvaniyamaḥ.

## [2.2.1]

3) dhātu の意味である 〈行為〉 (kriyā) に関して「結果」(phala) を語る場合、その「結果」には二義ある。一つは 〈行為〉の行動論的な概念であり、いわば行為の目標あるいは誘因 (uddeśya) である。例えば、「ātmanepada」接辞選択規則 P1.3.72 svaritañiṭaḥ kartrabhiprāye kriyāphale における 〈結果〉がこれにあたる。√pac 「料理する」の場合、この料理行為の 〈結果〉は飲食 (bhojana) である。そしてもう一つはここにいわれるような軟化 (viklitti) といった 〈行為〉の内的な直接的所産である。Darpaṇa によれば後者は「結果」のテクニカルな意味 (pāribhāṣikārtha) である。

ところでバトージ・ディークシタは、「dhātu は 〈結果〉 (phala) と 〈ハタラキ〉 (vyāpara) の両者に対する ([指示者として] 伝承されおり)」(k.2a: {phalavyāpārayor dhātuḥ}) と語っている。この表現における「〈結果〉 (phala) と 〈ハタラキ〉 (vyāpara) の両者に対する」({phalavyāpārayoḥ}) という双数表現 ([両者に対する]) は、dhātu は 〈結果〉と 〈ハタラキ〉のそれぞれに対して別個の 〈直接的指示関係〉 (pṛthaksakti) を有するという見解において可能である。したがってこれより dhātu の対象指示の在り方に関して、バトージ・ディークシタは pṛthaksakti 論者であることが知られる。Cf. Kāśikā: phalavyāpārayor iti divacanāntanirdeśena phale vyāpāre ca pṛthaksaktir na tu phalaviśiṣṭavyāpāre prācīnatārkikābhimataikā śaktiḥ, tathā sati phalasya dvi-

tīyādīpadārthānvayo na syād iti sūcitam.

カウ ندا・バ ッ タ も ま た バ ッ ト ー ジ ・ デ ィ ー ク シ タ と 見 解 を 同 じ く す る 。 彼 は 次 の よ う に 述 べ て い る 。

「そして、〈結果〉に限定された〈ハタラキ〉(phalaviśiṣṭavyāpāra) に対して [もし dhātu が] 単一の〈直接的指示関係〉(ekaśakti) を有するとするならば、このことは後程述べるが、〈結果〉は [dhātu の〈指示対象〉(śakya) の] 一部であるから、それに対して他の語の意味は結合し得ないことになろう。ところで、〈結果〉と〈ハタラキ〉の間の実現関係 (sādhyasādhanabhāva) は関係 (saṁsarga) である。したがって〈能産者性〉(janakatva) [という関係 (saṁsarga)] の部分に対する〈直接的指示関係〉(śakti) はなくても、〈結果〉に対する〈能産者性〉 [という関係が] 〈ハタラキ〉に関して容易に得られる。」

(VBh on k.2: phalaviśiṣṭavyāpāre ekaśaktau caikadeśatvāt phalasya tatrapadārthāntarānvayo na syād ityādi vakṣyate. phalavyāpārayoḥ sādhyasādhanabhāvas tu saṁsargaḥ, ato janakatvāimśe śaktīm vināpi phalajanakatvaīm vyāpāre sulabham.)

dhātu は 〈結果〉 と 〈ハタラキ〉 のそれぞれに対して別個の〈直接的指示関係〉を有し、〈結果〉 と 〈ハタラキ〉 間の関係 (saṁsarga) は所謂 saṁsargamaryādā によって認識上に現われるのである。Cf. Vyutpattivāda, p.2: śābdabodhe caikapadārthe aparapadārthasya saṁsargaḥ saṁsargamaryādayā bhāstate 「さて言語的な認識 (文の意味の認識) には、形態素 (あるいは語) x の意味に対する形態素 (あるいは語) y の関係は saṁsargamaryādā によって顕現する」 (Śivadattamiśra: saṁsargamaryādā nāma ākāṅkṣā, saṁsargasya maryādā bhānaīm yata iti vyutpatteḥ)。

バ ッ ト ー ジ ・ デ ィ ー ク シ タ , カ ウ ン ダ ・ バ ッ タ に 対 し て ナ ー ゲ ー シ ャ ・ バ ッ タ は dhātu が 〈結果〉 と 〈ハタラキ〉 のそれぞれに対して別個の〈直接的指示関係〉を有するということを批判し、dhātu は 〈結果〉 に限定された〈ハタラキ〉 (phalaviśiṣṭavyāpāra) あるいは 〈ハタラキ〉 に限定された〈結果〉

(vyāpāraviśiṣṭaphala) に対して単独の〈直接的指示関係〉を有すると主張している (viśiṣṭaśakti 論)。

「それゆえ〈結果〉に局限された〈ハタラキ〉、および〈ハタラキ〉に局限された〈結果〉に対して dhātu は〈直接的指示関係〉を有する。そして〈行為主体〉〈目的〉を意味するそれぞれの接辞との共表現がそれぞれの認識に関する支配的決定要因である。」 (VSLM543: tasmāt phalāvachchinne vyāpāre vyāpārāvachinne phale ca dhātūnām śaktiḥ, kartṛkarmārthakatattatpratya-yasambhivyāhāraś ca tattatbodhe niyāmakam.) Cf. Kāśikā: atra bhavanto mañjūśākāras tu phalaviśiṣṭavyāpāre, vyāpāraviśiṣṭaphale ca śaktiḥ.

### [2.2.2.1]

4) 〈bhāvanā〉とは「生ぜしめるハタラキ」であり、ミーマーンサー学派パーッタ派の儀軌解釈理論の中核をなす動詞論において、これは定動詞接辞 (ākhyāta) によって表示される対象とされる。ミーマーンサー学派パーッタ派の動詞論は、Bhāvārthādhikaraṇa (JS2.1.1-4) に展開されている。詳細は黒田 [1979, 1980] 参照。

Kāśikā においては〈abhidhā〉もまた〈vyāpāra〉の同義語とみなされている。それによれば、〈abhidhā〉とは「〈結果〉を生ずるもの」 (janayati phalam ity abhidhā) あるいは「dhātu によって実現さるべきものとして表示される対象」 (sādhyatvena dhātunābhidhīyata iti vābhidhā) のことである。

パーニニ文法家にとって〈bhāvanā〉〈vyāpāra〉〈utpādanā〉〈kriyā〉はすべて同義語であり (VM (VSK), k.5), ニヤーヤ学派が〈行為〉の因として措定するような〈努力〉 (kṛti, yatna) も〈行為〉範疇に入る (VSLM531: tatra phalānukūlo yatnasahito vyāpāro dhātvarthaḥ iti siddhāntaḥ)。

5) yāvat siddham asiddham vā sādhyatvenābhidhīyate /

āśritakramarūpatvāt sā kriyety abhidhīyate //

料理行為に関して言えば、「彼は料理した」 (lapākṣitī - √pac, 3.sg.aor.P.)

という表現が成立する時、料理行為は「実現された」(siddha) のであり、「彼は料理している」(pacati - 3.sg.pres.P.) 「彼は料理するであろう」(pakṣyati - 3.sg.fut.P.) という表現が成立する時、料理行為は「未だ実現されていない」(asiddha)。

バルトリハリはここにおいて〈行為〉(kriyā) を定義し、さらにその定義に対する理由を述べている。

〈行為〉定義:Def. (x = 〈行為〉): x は実現さるべきものとして [言語によって] 表示される (sādhyatvenābhidhiyate)。

理由: 順序の相を帯びるものが〈行為〉と呼ばれる (āsritakramarūpatvāt)。

この定義を、ヘーラーラージャ (Helārāja) は当該詩頌の導入的な注釈において「文法上の定義」(śāstrīyaṁ lakṣaṇam) と呼んでいる。それは、パタンジャリにより「我々は言語を権威とする者である。言語が表示するところのもの、それが我々にとっての権威である」(Mbh (Paspāsa) on vt.11: śabdapramāṇakā vayam. yac chabda āha tad asmākaṁ pramāṇam.) というように宣明されている「唯言語論者」(śabdapramāṇaka) としてのパーニニ文法学派の側面をよくあらわしている。すなわち、文法学派にとっての関心事は言語から理解される意味であって存在論的な事象ではなく、存在論的な〈行為〉定義は関心の埒外にある。(Helājāja on VP III, kriyā, passim: śabdārtho 'rtho na vastvarthaḥ)。Cf. Iyer [1969: 284-5]. また自己の対象を実現さるべきものとして表示する言語項目は、dhātu 以外にないことも後程明らかになるであろう (op.cit., k.2: śabdaś ca svārthe yathābhidhānaṁ pramāṇam)。

Darpaṇa によれば、「実現さるべきものとして [言語によって] 表示されるものが〈行為〉と呼ばれる」という〈行為〉定義は、〈kriyā〉という語の慣用的な意味 (rūḍhi) を示しており、定義に対する「順序の相を帯びるものが〈行為〉と呼ばれる」という理由は〈kriyā〉という語の語源的な意味 (yaugika) を示している。Cf. Darpaṇa: etena kriyāśabdasya rūḍhiḥ pradarsītā. yaugikavtam apy āha - āsriteti. 後論するように (2-註12), 例えば「料理行為」といったものは複合的な概念であり、それを構成する部分的〈行為〉の過程的連続性

において構想されるものにすぎないのであるが、その部分的〈行為〉が順々に (krameṇa) 生起する (utpatti) ようなものを語源的には〈kriyā〉と呼ぶのである。Cf. VSLM545: āśriteti yogadarśanaṃ[,] kriyate[,] avayayānām krameṇotpattiyā: ata evāśritakramarūpā kriyā … (「[順序の相に] 依存する」) というのは語源的意味の提示である。産出されつつあるもの [が〈行為〉と呼ばれる]。なぜなら、部分 [的行為] が順々に生起するから。まさにこの故に、順序の相を帯びるものが〈行為〉である。「順々に生起する」とはある〈結果〉産出に向けての過程に在るということであり、とりもなおさずそれが「実現さるべきもの」の状態に在るということである。

Darpaṇa に従えば、ここでバルトリハリは〈kriyā〉という語の語源的な意味を慣用的な意味に対する理由づけに用いているということになる。すなわち、言語によって表示されるものを〈行為〉と呼ぶが、しかしそれはその表示対象が〈実現さるべきもの〉として表示されるものである限りである。なぜなら〈行為〉とは、順序の相を帯びるもの、すなわちその部分的〈行為〉が時間的に連続的な継起をなすものであるから、というのが当該詩頌の意図するところである。

## [2.2.2.2]

### 6) DUpacāṢ (Dhātupāṭha)

√pac	P1.3.1 (連鎖 /p-a-c/ に対する術語「dhātu」の適用)
+ L	P3.4.69 (L 接辞導入)
LAṬ	P3.2.123 (現在接辞選択)
tiṆ	P3.4.78 (定動詞接辞 tiṆ 代置)
tip-tas-jhi-sip-thas-tha-mip-vas-mas	P1.3.78 (「parasmaipada」選択)
tip-tas-jhi	P1.4.108 (人称系列「prathama」(3人称) 選択)
tip (= tiP)	P1.4.22 (数系列「ekavacana」(単数接辞) 選択)
+ ŚaP +	P3.1.68 (vikaraṇa (class-marker) ŚaP 導入)
∴ pacati	

$\sqrt{\text{pac}}$	P1.3.1 (連鎖 /p-a-c/ に対する術語「dhātu」の適用)
+ GHaÑ	P3.3.18 (「kṛt」接辞 GHaÑ 導入)
ā	P7.2.116 (「vṛddhi」代置)
k	P7.3.52 (/k/ 代置)
∴ pāka	P1.2.46 (連鎖 /p-ā-k-a/ に対する術語「prātipadika」の適用)
+ sUP	P4.1.2 (名詞接辞 sUP の導入)
su-au-jas	P2.3.46 (主格接辞 (prathamā-vibhakti) 選択)
su (=sU)	P1.4.22 (数系列「ekavacana」(単数接辞) 選択)
rU	P8.2.66 (/r/ 代置)
ḥ	P8.3.15 (/ḥ/ 代置)
∴ pākaḥ	

DUkṛÑ (Dhātupāṭha)

$\sqrt{\text{kṛ}}$	P1.3.1 (連鎖 /k-r/ に対する術語 dhātu の適用)
+ L	P3.4.69 (L 接辞導入)
∴	
tip (=tiP)	
u	P3.1.79 (vikarṇa (class-marker) u 導入)
a-r	P7.3.84 (「guṇa」代置) [P1.1.51 (/r/ 共起)]
o	P7.3.84 (「guṇa」代置)
∴ karoti	

$\sqrt{\text{kṛ}}$	P1.3.1 (連鎖 /k-r/ に対する術語 dhātu の適用)
+ KtiN	P3.3.94 (「kṛt」接辞 KtiN 導入)
∴ kṛti	
+sUP	

∴  
h  
∴ kṛtiḥ

定動詞接辞で終わる項目 (tiñanta) {pacati} {karoti}, 「kṛt」接辞で終わる項目 (kṛdanta) <pāka> <kṛti> の派生において, L接辞導入規則 (P3.4.69) ・ 「kṛt」接辞導入規則 (P3.3.18・3.3.94) は P3.1.91 dhātoḥ の支配下にあり, それらの接辞は共に dhātu の後に導入される。

{devadatto gacchati} (「デーヴァダッタが行きつある」) と同じように「kṛt」接辞で終わる項目 <pāka> に関して例えば {pāko vartate} (「料理が起こっている」) というように表現することができる。この場合 <devadatta> と同様 <pāka> も <行為主体> (kartṛ) として機能しているものを指示している。

7) <もの> (sattva) は, ここでは存在論的な概念ではなく, まったく文法的な概念である。ナーゲーシャ・バッタ [Uddyota on Mbh ad P1.4.57] によれば, この <もの> とは, 性・数と結びつき kāraka として機能する能力をもつものであり (liṅgasamkhyākārakānvayitva), あるいは「sarvanāman」(代名詞) によって指示されうるものである (sarvanāmaparāmarśayogyatva)。なお術語「sarvanāman」は P1.1.27 sarvādīni sarvanāmāni の規定により gaṇapāṭha 中の <sarva> で始まる一群の項目に付与される。

当該詩頌 VP11, k.195cd: asattvabhūto bhāvaś ca tiñpadair abhidhīyate は, Nirukta I,1: bhāvapradhānam ākhyātam を説明している。バタンジャリ [Mbh ad vt.2 on P5.3.66] がこの Nirukta の言明を {kriyāpradhānam ākhyātam} というように言い換えていることから, <bhāva> は <kriyā> と同義である。Cf. Cardona [1974e] .

### [2.2.2.3]

8) 料理という <行為> は様々な部分的行為 (x<sub>1</sub>, x<sub>2</sub>, x<sub>3</sub>, x<sub>4</sub>, x<sub>5</sub> . . .) の複合体である。これらの部分的行為は時間的な推移に応じて連続的に継起する。こ

これらの部分的行為が単一の〈結果〉を志向して生起していると捉えられる時、 $x_1, x_2, x_3, x_4, x_5 \dots$  のどの部分的行為を対象としても |pacati| (「彼は料理している」) という表現が可能である。 $x_1$  が火起こしという行為 (phūtkāra) であるならば、その  $x_1$  を指示しての |pacati| における  $\sqrt{\text{pac}}$  (「料理している」) という語の適用根拠 (pravṛttinimitta) は、すべての火起こしという行為に内在する〈火起こしの相〉 (phūtkāratva) である。同じように火入れ (adhaṣantāpana) である  $x_2$  についても  $\sqrt{\text{pac}}$  という語が適用されるが、その場合の適用根拠はすべての火入れという行為に共通する〈火入れの相〉 (adhaṣantāpanatva) である。

PRAKĀRA については小川 [1986a] を参照されたい。

9)  $x$  に対する〈直接的指示関係〉を有する言語項目  $X$  と  $y$  に対する〈直接的指示関係〉を有する言語項目  $Y$  が同一の音連鎖をもつとき、その両言語項目  $X$  と  $Y$  は同音異義語 (nānārthakaśabda) と呼ばれる。例えばヴィシュヌ神・インドラ神・シヴァ神・ライオン・馬・太陽等の様々なものを意味する (nānārtha) 〈hari〉 という語は、同音異義語とみなされる。Cf. Darpaṇa: nānādharmāvaccinnaśaktinirūpakatāvaccchedakaikadharmavattvaṁ nānārthatvam.

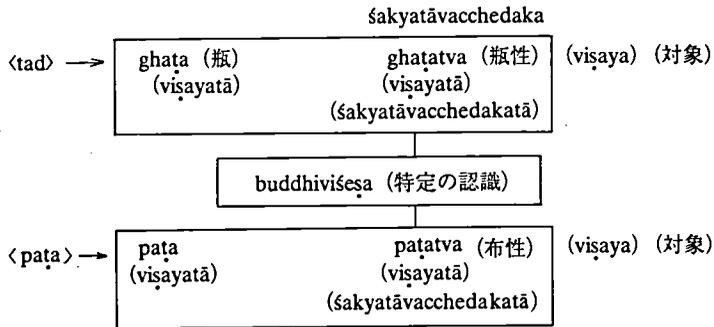
10) 例えば「瓶」(〈ghaṭa〉) という語はすべての個別的な瓶に対して適用される。この場合、「瓶」という語には瓶に対する〈指示者性〉 (śaktatā) があり、その語によって指示される個々の瓶にはその〈指示者性〉に相関的に制約された (nirūpita) 〈指示対象性〉 (śakyatā) が存する。瓶ならざるものには適用されず、どの瓶に関しても逸脱なく「瓶」という語が適用されるように、すべての個別的な瓶に上記の〈指示対象性〉を局限するもの (avacchedaka) が存在しなければならない。それが〈指示対象性の局限者〉 (śakyatāvaccchedaka) である。これは言うなれば、言語の適用根拠 (pravṛttinimitta) に他ならない (小川 [1986a] 参照)。同音異義語の場合には、複数の〈直接的指示関係〉 (śakti) が想定される訳であるから、〈指示対象性の局限者〉も複数 (nānā) 想定される。

「それ」(〈tad〉)という指示代名詞は、〈hari〉という語と同じように複数の多様な事象を指示する。それは瓶にも布にも人にも適用される。したがってこの点で「それ」という語も〈hari〉という語と同様同音異義語とみなされる。しかしながら、「それ」という語には、〈hari〉という語と違っていかなる事象を対象としようともその語の使用において共通に見いだされるもの、すなわち多様な〈指示対象性の局限者〉に統一的に随伴するもの (anugamaka) が存在するために、それは同音異義語とはみなされない。

ある文脈において「それは瓶である」(sa ghataḥ) というように、ある事象に「それ」という語が適用される時、その事象は常に我々の認識の対象 (buddhiviṣaya) となっており、我々の心によって把持されている (buddhistha)。

カウнда・パッタは「それ」(〈tad〉)等の「sarvanāman」(2-註7)の〈直接的指示関係把握〉(śaktigraha)について次のように述べている。

「経験されるところに従えば、「sarvanāman」が[対象を]特定して想起せしめる、ということはすべての者にとって明らかである。そしてもし以下のように言うならば、このように [[sarvanāman] は [対象を] 特定して想起せしめる、と] 言うことができる。



〈認識対象性〉の相で想起せしめられる瓶性 (ghaṭatva) ・布性 (paṭatva) を所有するものに関して, 「[それ] (tad) という語は認識対象 [であるそのような瓶性・布性] を有するものに対する 〈直接的指示関係〉 を有する」という形でのみ 〈直接的指示関係把握〉 がなされる。」 (VBh ad k.51-52ab: anubhāvānurodhāt sarvanāmnām viśiṣyopasthāpakatvam iti sarvasiddham, tac ca yadī buddhiviśayatvarūpeṇa upasthāpitaghaṭatvapaṭatvasāliṣu buddhiviśayatvaṭi śaktam tātpadam ity eva śaktigrahaḥ.)

瓶性 (ghaṭatva) とか布性 (paṭatva) といった 〈指示対象性の局限者〉 には齊しく 〈認識対象性〉 (buddhiviśayatva) あるいは 〈心的把持性〉 (buddhisthatva) が存する。したがって瓶性や布性に存する 〈指示対象性の局限者性〉 (śakyatāvaccchedakatā) を瓶性や布性に局限するものは, 瓶性, 布性のいずれの場合にもこの 〈認識対象性〉 あるいは 〈心的把持性〉 である。こうして「それ」等の代名詞の場合, 〈認識対象性〉 あるいは 〈心的把持性〉 を多様な 〈指示対象性の局限者〉 を統べるものと考えることができる。

ところでカウンダ・パッタは, Vaiyākaraṇabhūṣaṇa においては同様の文脈で多様な 〈指示対象性の局限者〉 の統括属性を「心的把持性等」 (buddhisthatvādi) としている。Cf. VBh on k.2: buddhisthatvādeḥ śakyatāvaccchedakādīnām tadādāv ivānugamakasya sattvāt. しかしながら彼はここではそれにかえて「特定の認識等」 (buddhiviśeṣādi) を挙げている。

Kāśikā によれば, 〈対象性の関係〉 (viśayatāsāmbandha) が「所依たることを決定する関係」 (vṛttiniyāmaka) とみなされる場合には, カウンダ・パッタがここで述べているような, 瓶を対象とする認識, 布を対象とする認識といった, 認識そのものとしては共通な「特定の認識」 (buddhiviśeṣa) そのものが 〈指示対象性の局限者〉 「に存在する」から, それが 〈指示対象性の局限者性〉 を瓶性や布性に局限するものであり, 多様な 〈指示対象性の局限者〉 の統括属性とみなされる。しかし 〈対象性の関係〉 (viśayatāsāmbandha) が「所依たることを決定する関係」とはみなされない (vṛtṭyanīyāmaka) 場合には, 上記のように 〈認識対象性〉 あるいは 〈心的把持性〉 がそれにかわる。またこの場合には, 瓶や木に存する 〈認識対象性〉 を瓶や布に局限している属性である瓶性や

布性に存する〈認識対象性の局限性〉(viṣayatāvacchedakatva)も多様な〈指示対象性の局限者〉の統括属性とみなされうる。Kāśikāはカウンダ・パッタが「特定の認識等」と述べて「等」(ādi)の語によって含みをもたせているのは、このような事情を考慮してであると解釈している。Cf. Kāśikā: buddheḥ śakyatāvacchedakatāvachedakatvaṁ viṣayatāsāmbandhena, tasya vṛtṭyaniyāmakatayāvacchedakatvānaṅgikāre tv āha — āder iti. ādinā buddhiviśeṣaviṣayatvatadavacchedakatvayoḥ parigrahaḥ. 「所依たることを決定する関係」(vṛtṭiniyāmaka)については、宇野[1977:104-5, 1978: 89]を参照せよ。

dhātu  $\sqrt{\text{pac}}$  の場合、その〈指示対象〉は「それ」(〈tad〉)と同様多様である。同一の語  $\sqrt{\text{pac}}$  が火起こしにも火入れにも適用される。 $\sqrt{\text{pac}}$  が火起こしを指示する場合、その語に相関した〈指示対象性〉の〈局限属性〉(avacchedakadharmā)は〈火起こしの相〉(phūtkāratva)であり、また火入れを指示する場合にはそれは〈火入れの相〉(adhaṣantāpanatva)である。しかしながら dhātu  $\sqrt{\text{pac}}$  は「それ」(〈tad〉)の場合と同様、同音異義語とはみなされない。なぜなら dhātu  $\sqrt{\text{pac}}$  の場合もこれらの多様な〈指示対象性の局限者〉の統括属性として、「特定の認識」あるいは〈認識対象性〉(〈心的把持性〉)、〈認識対象性の局限性〉が存在するからである。これは次のような事情によっている。

料理という〈行為〉を分析すると、それが多様な部分的〈行為〉から構成されていることがわかる。しかも〈行為〉は時間的な存在であるから、現在するのはある特定の部分的〈行為〉であり、料理という〈行為〉は全体的には決して知覚されない。この意味で全体としての料理という〈行為〉は概念的な構造物に他ならない。したがって料理という〈行為〉を対象とする認識は、単一の〈結果〉への志向性の観点から概念的に構想された全体の中に位置づけられた個別的な部分的〈行為〉を対象とする〈集合対象認識〉(samūhālambanabuddhi)である。火起こしを対象とする認識、火入れを対象とする認識といった特定の認識は、実はこれらの個別的な認識をひとつにまとめた〈集合対象認識〉なのである。Cf. Darpaṇa: buddhiviśeṣaikyam iti. samūharūpabuddhiviśeṣātmakāvachchedakaikyam ādāyety arthaḥ. Kāśikā: sā ca buddhiḥ samūhālambanarūpā

ekaiva.

この〈集合対象認識〉の対象となるものが dhātu  $\sqrt{\text{pac}}$  により表示される〈行為〉なのである。カウンダ・バッタは簡勁な表現でこのことを次のようにまとめている。

「ある局面でXがYにより〔〈集合対象認識〉によって〕心的に把持されている時、その局面でXが〔dhātuにより〕表示される」(VBh ad k.2: yadā yo yasya buddhisthas tadā so 'bhidhīyate)

尚、〈集合対象認識〉(samūhālambanabuddhi)については、宇野[1978:44-45]参照。

ところで「それ」(tad)や dhātu における「特定の認識」あるいは〈認識対象性〉(〈心的把持性〉)、〈認識対象性の局限性〉といった多様な〈指示対象性の局限者〉の統括属性は、瓶性や〈火起こしの相〉を本質的に限定する属性(viśeṣaṇa)ではなく、指示対象の想起に単にまといつくものにすぎない偶有的属性(upalakṣaṇa)である。カウンダ・バッタは次のように述べている。

「しかし、[この]〈認識対象性〉は[瓶・布といった対象]の想起における随伴者(anugamaka)にすぎず、〈指示対象〉(śakya)ではない。したがってその[〈認識対象性〉]は〈言語的認識〉(śābdabodha)に顕現せず、[顕現するのは]瓶性等だけである。」(VBh ad k.51-52ab: buddhiviṣayatvan tu upasthitau anugamakamātram, na tu śakyam iti na tac chābdabodhe bhāsate kiṃ tu ghaṭa tvādikam eva . . .)

11) 定動詞形によって知らしめられる〈行為〉は単一であるという確定は、パタンジャリにより「定動詞形は〈行為〉を主要素とする。そして〈行為〉は単一である」(Mbh ad vt.2 on P5.3.66: kriyāpradhānam ākhyātām bhavati, ekā ca kriyā)という言明によってなされている。

12) guṇabhūtair avayavaḥ samūhaḥ kramajanmanām /

buddhyā prakalpitābhedah kriyeti vyapadiśyate //

なお、この詩頌の第3 pāda |buddhyā prakalpitābhedah| は、Vaiyākara-nabhūṣaṇa においては Trivedī 本、Bhaṭṭachārya 本、Vidya Niwas Misra 本のいずれにおいても、|buddhyā prakalpito 'bhedah| となっている。カウンダ・バッタはこの読みに従って当該詩頌を次のように解釈している。

「順序に従って生ずる [部分的 <ハタラキ>] の集合が統合作用 (saṅkalanā) を本質とする単一性の知によって仮構される。そしてこの集合は本質的に [その集合に対して] 従属するものである部分 [的 <ハタラキ>] を具えている、という意味である。」(VBh ad k.2: kramajanmanām eṣām vyāpārāṇām samūha ekatvabuddhyā saṅkalanātmikayā prakalpitaḥ, sa ca samūhaḥ svabhāvato guṇabhūtair avayavair yukta ity arthaḥ) .

したがって第4 pāda は、「[この] 差異のない [集合] が <行為> と呼ばれる」 |abhedah [samūhaḥ] kriyeti vyapadiśyate| というように読むことができる。

なお、ヘーラーラージャは注釈 (Prakāśa) において当該詩頌を次のように導入し・解説している。

「[導入] それゆえ、このように、言語によって実現さるべきものとして表示される、<順序> [の相] を帯びて、連続態を成す <事象> が <行為> である、と [k.1=2.2.2 において] 定義された。

[そこで次に] 連続態を成している瞬間存在の [<行為>] の流れ (kṣaṇapravāha) は、同時的には現在しないから、[この連続態を成しているものに] 単一なる <行為> という相は妥当しない、という疑問に対して [バルトリハリは] 次のように [k.4 を] 述べる。」(Helārāja on VP III, kriyā, k.4: tad evaṁ śabdena sādhyatayābhidhiyamānaḥ samāśritakramaḥ paurvāparyavān arthaḥ kriyeti lakṣitam. pūrvāparībhūtasya kṣaṇapravāhasya yugapadasannidhānād ekakriyā-lakṣaṇānupapattir ity āśaṅkyāha.)

「[解説] 順々に [生じてくる] 諸刹那 [的 <ハタラキ>] は、単一の <結果> を志向して機能している。[これらの諸刹那的 <ハタラキ>] は] 統合知 (saṅ-

kalanābuddhi) によって単一性を獲得せしめられた時、〈行為〉と表現される。その場合、部分的〔〈ハタラキ〉〕には全体 (samudāya) に対する従属性 (guṇabhāva) が得られるから、〔そして主要性を有する全体は〕言語の差異をもたらすものではないから、単一の dhātu から得られる〔その表示者を単一の dhātu とする〕〈行為〉は、全体であることを本質とする単一なるものとして在る。そして、この〔〈行為〉〕に対して、部分に依拠する〈順序〉と連続性 (paurvāparya) が表現されるのである。

さらに、全体に依拠する単一性は仮構されたものである。なぜなら、生起の直後に滅する部分的〔〈ハタラキ〉〕は実在としての全体を構成し得ないから。それゆえ、鍋を火にかける (adhiśrayaṇa) 等の〔部分的〕〈ハタラキ〉の全体が知によって単一なるものとして把握された時、この全体が  $\sqrt{\text{pac}}$  等の表示対象である。なぜなら、全体だけから〈結果〉が実現するからである。しかし単なる〔諸部分の〕分離からは〔〈結果〉は実現しない〕。なぜなら、鍋を火にかける等の〔他の〈ハタラキ〉の〕無用性が帰謬するから。したがって、所期の〈結果〉に相応しい鍋を火にかける等〔の〈ハタラキ〉〕は〔〈結果〉に対して他の〈ハタラキ〉に〕介在されているとしても、それぞれに〔〈目的〉 (karman) に〈結果〉という〕特殊性を付与しうる。

こうして、結果が多数のものを期待するものである時、〈無介在性〉だけにに基づき、〔この結果が〕ある特定の〔〈ハタラキ〉の〕特殊性である、ということはない。したがって、 $\sqrt{\text{pac}}$  等の〈意味〉は、それが特定の〈結果〉を実現せしめるものとして理解される時、〈結果〉の単一性に基づき単一なるものとして決定されるから、〔どの部分的〈ハタラキ〉も〕〈行為〉と呼ばれる。」

(Helājāja, ibid.: kramavatām kṣaṇānām ekaphaloddesena pravṛttānām saṅkalanābuddhyā samāpāditaikyānām kriyātvavyavahāraḥ. tatrāvayavānām samudāye guṇabhāvāpatteḥ śabdabhedaprayojakatvābhāvād ekadhātūpādāna-kriyāikā samudāyasvabhāvavatiṣṭhate. tasyās cāvayavāśrayaḥ kramaḥ paurvāparyam ca vyavahriyate.

samudāyāśrayam caikatvam adhyāropitam, utpattisamanantarāniruddhānām avayavānām vastubhūtasamudāyābhāvāt. tatas cādhiśrayaṇādīnām vyāpārāṇām

yaḥ samudāyo buddhyaikatvena gr̥hītaḥ sa pacatyādīnām vācyāḥ. samudāyād  
eva hi phalaīm niṣpadyate, na vicaṭanamātrād, adhiśrayaṇādivaiyarthya-pra-  
saṅgād iti vyavahitair apy adhiśrayaṇādibhiḥ samīhitaphalānuguṇair yathāsvaṁ  
viśeṣa ādhātavyaḥ ity anekāpekṣe kārye nānantaryamātreṇa kasyacid viśeṣa iti  
phalaviśeṣasampādakatvena pacādīnām arthaḥ pratiyamānaḥ phalaikyād  
ekatvenāvasiyamānaḥ kriyā.)

一連の時間的に継起する〈ハタラキ〉(部分的〈ハタラキ〉)がある特定の〈結  
果〉を生ぜしめる時、その〈結果〉の単一性に基づいて一連の〈ハタラキ〉は  
全体に統合される。ヘーラーラージャにとって部分的〈ハタラキ〉の全体統合  
の契機は〈結果〉の単一性である。カウンダ・バッタにおいては一連の部分的  
〈ハタラキ〉はそれらを対象としている知識の単一性から「一つの行為」とし  
て捉えられる。

## 【tiÑの意味1】

[2.3.0] [このように] dhātu の意味を確定して, [次に] tiÑ の意味を「一方 [tiÑ はそれらの] 基体に対する」(āśraye tu) というように [バトタージ・ディークシタは] 述べる。[これは] 〈結果〉の基体 (phalāśraya) および 〈ハタラキ〉の基体 (vyāpārāśraya) に対して, という意味である。

〈結果〉の基体が 〈目的〉(karman) であり, 〈ハタラキ〉の基体が 〈行為主体〉(kartṛ) である<sup>13)</sup>。これら [〈目的〉と 〈行為主体〉を構成するもの] のうち 〈結果〉と 〈ハタラキ〉は dhātu から得られるから, tiÑ はその [〈結果〉と 〈ハタラキ〉の] 部分に対する 〈直接的指示関係〉(śakti) をもたない。[両者は] 他の [言語項目] から得られるものだから (anyalabhyatvāt)<sup>14)</sup>。[したがって tiÑ は基体に対してだけ 〈直接的指示関係〉を有する。] そして 〈指示対象性の局限者〉は 〈基体性〉(āśrayatva) である。[この 〈基体性〉が] それぞれの特定の 〈能力〉そのもの (tattacchaktiviśeṣarūpa) であることは【名詞接辞の意味の確定】(Subarthanirṇaya) において述べよう<sup>15)</sup>。

[2.3.1] [反論] これら [〈結果〉の基体と 〈ハタラキ〉の基体] が定動詞接辞 (ākhyāta) の意味であるということに対してどんな根拠があろう。なぜなら, [〈結果〉の基体と 〈ハタラキ〉の基体の両者は] 〈間接的指示関係〉(lakṣaṇā), あるいは 〈含意〉(ākṣepa), あるいは 〈主格接辞で終わる名詞項目〉(prathamāntapada) から認識され得るから<sup>16)</sup>。

[答え] これに対して答えよう。P3.4.69 laḥ karmaṇi ca bhāve cākarmakebhyaḥ という規則そのものが根拠である。実に, この [規則] における「そして」(ca) という語に基づき, P3.4.67 kartari kṛt という規則において言及されている {kartari} が [この規則に] 牽引される。[そしてパーニニは,] tiP 等 [の定動詞接辞] に存する 〈能知性〉(bodhakatā) という 〈直接的指示関係〉を, その [tiP 等の定動詞接辞の] 原要素 (sthānin) として概念的に設定した L (lakāra) に仮構して, L が 〈目的〉と 〈行為

主体〉の意味で導入されることをこの [規則] によって規定しているのである<sup>17)</sup>。[これは] 例えば, Śas 等の規定が [ |rāmān| ← rāma + Śas, Ac.pl.m.: |ghaṭaiḥ| ← ghaṭa + bhis, Inst.pl.m. における] /n/ 音, visarga /h/ 音等に存する〈目的〉, 〈作具〉(karaṇa) 等に対する〈能知性〉(bodhakatā) という〈直接的指示関係〉を捉えた上でなされているのと同様である<sup>18)</sup>。

### 【註解 3】

#### [2.3.0]

13) 〈目的〉(karman) や〈行為主体〉(kartṛ) — 〈行為参与者〉(kāraḥ) — は, パーニニ文法の派生組織において, 例えば, P2.3.2 karmaṇi dviṭiyā といった接辞導入規則と連関している。

パーニニによるそれらの術語の一般的規定は次のとおりである。

P1.4.23 kāraḥ 「kāraḥ (〈行為参与者〉) の領域で」[支配規則]

P1.4.49 kartur īpsitatamaṁ karma 「〈行為主体〉が [彼が参与している 〈行為〉を通じて] 最も得ようと欲している kāraḥ が〈目的〉と呼ばれる。」

P1.4.54 svatantraḥ kartṛ 「[他の 〈行為参与者〉 に比して] 自主的なもの (svatantra) として [意図される] kāraḥ が〈行為主体〉と呼ばれる。」

これらの規定からバトージ・ディークシタ等の後代の文法学者は、「〈結果〉の基体が〈目的〉と呼ばれる」「〈ハタラキ〉の基体が〈行為主体〉と呼ばれる」といった, より意味論的な規定を導きだそうとする。以下にバトージ・ディークシタによる P1.4.49・P1.4.54 解釈を示す。

[P1.4.49] 「〈行為主体〉が最も得ようと欲するものが〈目的〉と呼ばれるべきである。〈ハタラキ〉 X の基体であるということに基づいてこの者が〈行為主体〉である時, [その〈行為主体〉は] まさにその〈ハタラキ〉 X を通じて得ようと欲する, ということが [〈行為主体〉と〈ハタラキ〉の] 近接から得られる。それゆえ [〈目的〉とは] 〈行為〉の〈結果〉の所有者 (kriyāphalaśālin) であると結論される。なぜなら, 〈行為〉とは〈結果〉の欲求に基づいて起こ

る欲求の対象であり、一方最も欲求されるものは〈結果〉に他ならないからである。そしてこの〔〈結果〉〕は dhātu から得られるものであるから、その〔〈結果〉〕に限定されているものとしての欲求の対象がこの〔規則〕における被定義項 (samjñin) である。」(ŚK on P1.4.49: kartrā yad āptum iṣyatetamām tat karmasamjñān syāt. yadvyāpārāśrayatvād asau kartā tenaiva vyāpāreṇāptum iṣṭam iti sannidhānāl labhyate. tenakriyāphal aśālitvaṁ paryavasyati. kriyā hi phalecchāpūrvakecchāviṣayaḥ, phalam eva tv iṣṭatamam. tac ca dhātunopāttam iti tadviśiṣṭatvenecchāviṣayo 'tra samjñī.)

[P1.4.54] 「〈行為〉に対して自主的なものとして意図されるものが〈行為主体〉であるべきである。自主的であるとは dhātu から得られる〈ハタラキ〉の基体であるということである。」(Ibid. on P1.4.54: kriyāyām svātantryeṇa vivakṣito 'rthaḥ kartā syāt. dhātupāttavyāpārāśrayatvaṁ svātantryam.)

14) Darpaṇa: ananyalabhyo hi śabdārtha iti nyāyād iti bhāvaḥ. ミーマンサー学派において定式化されている意味配当の原則 ananyalabhya-śabdārthanyāya — 「他の言語項目によっては得られないものだけが自己の意味とみなされる」 — に基づく。この原則については、金沢[1982]参照。

15) VBhS ad k.24: tathāca kriyāyāḥ phalasya ca dhātunaiva lābhād ananyalabhya āśraya evārthaḥ, tattvaṁ cākhaṇḍaśaktirūpam avacchedakam (「このように〔〈行為〉より生ずる〈結果〉の〈基体〉が〈目的〉であるという場合、〕〈行為〉と〈結果〉は dhātu そのものから得られるから、〔その自己〕以外〔の dhātu という言語項目〕からは得られない〈基体〉だけが〔〈目的格接辞〉(dvitīyā) の〕意味である。そして不可分なる〈能力〉という相 (akhaṇḍaśaktirūpa) の〈基体性〉が〔〈指示対象性〉の〕局限者である)。

tiñあるいは〈目的格接辞〉の直接的指示対象は〈基体〉である。この場合カウンダ・バッタは〈指示対象性の局限者〉を〈基体性〉(āśrayatva, āśraytā) に求め、さらにこの〈基体性〉を「それぞれの特定の〈能力〉そのもの」(tattacchaktiviśeṣarūpa) あるいは「不可分なる〈能力〉という相」

(akhaṇḍasaktirūpa) というように言い換える。この背景にあるものは、1) 〈基体性〉という属性の存在論的問題と 2) パーニニ文法学派の存在論的 kāraka 観である。

### 1) 〈基体性〉の存在論的問題

上記の〈目的格接辞〉の意味に関するカウ ندا・バッタの見解はナーゲシャ・バッタにより取り上げられて説明を加えられており、その説明が〈基体性〉に関する問題の所在を明確にするのに役だつと思われる。

「〔目的格接辞が〈基体〉を意味するとした場合、〈指示対象性の局限者〉は〈基体性〉である。〕そして、〈基体性〉は「不可分添性」(akhaṇḍopādhi) であるから、〔それは単一なるものとして多数の〈指示対象性の局限者〉を想定する場合に比べ〕〈指示対象性の局限者〉に〈重さ〉はない。さらに〔〈基体性〉は「普遍」(jāti) ではなく「添性」(upādhi) であるという点で重い属性であるが、〕重い〔属性〕も〈指示対象性の局限者〉となり得ることはすでに確定しているから [Cf. VBhS on k.5: śakyatāvachedakatvasyāpi lakṣyatāvachedakavat guruṇi sambhavāt]。

〔反論〕〈基体性〉は〈制約項〉(nirūpaka) が異なるに応じて、さらに関係項 (sambandhin) が異なるに応じて異なる。さもなくば、瓶に〔制約された〕〈基体性〉の把捉の時に、布に〔制約された〕〈基体性〉が把捉されることになろう。したがってこの場合には〔〈指示対象性の局限者〉の多様性により〕複数の〈直接的指示関係〉が〔想定されなければならない〕。

〔答〕否である。〔瓶とならんで〕布の把捉がある時には〔瓶に〔制約された〕〈基体性〉の把捉の時に、布に〔制約された〕〈基体性〉が把捉されるという〕その帰結は望ましい。また反対にその〔布の〕把捉がない時には、そのような誤謬は懸念されない。

そしてまさにこのような立場は〈和合〉(samavāya) は単一であると語る論者達および白等の〈徳〉(guṇa) は単一であると語る論者達のものである。

〔別解釈〕あるいはむしろ〈基体性〉は多様であるとしよう。多様であって

も、[代名詞]「それ」(〈tad〉)等において〈認識対象性〉に〈局限性〉が認められるように、また「虚空」(〈ākāśa〉)という語の〈直接的指示関係〉の場合の〈音声性〉(śabdatva) [← 〈ākāśatva〉 = 〈śabdāśryatva〉 : 〈指示対象性の局限者〉 = 音声 (śabda)] のように、〈基体性性〉(āśrayatātva) が〈指示対象性の局限者性〉の局限者 (śakyatāvachedakatāvachedaka) と認められ、そしてまさにこれは単一であるから、複数の〈直接的指示関係〉が [想定される必要は] ない。」(VSM-2),122-3: āśrayatvañ ca akhaṇḍopādhiḥ iti na śakyatāvachedakagauravam. guruṇy api śakyatāvachedakatvasya nirūpitatvāc ca. na ca āśrayatā nirūpakabhedena sambandhibhedena ca bhinnā, anyathā ghaṭāśrayatādigrāhe paṭāśrayatādigrāhāpattiḥ iti śaktyānantyam iti vācyam, paṭagraha iṣṭāpattiḥ, tadagrahe ca na doṣaśāṅkā. iyam eva ca samavāyasyaikatvavādināṃ śuklādiguṇānām ekatvavādināṃ ca gatiḥ. astu vā āśrayatvañ nānā, tathāpi tadādau buddhiviśayatāvachedakatvavad ākāśapadaśaktau śabdatvavac cāśrayatātvasya śakyatāvachedakatāvachedakasyaiva ekatvān na śaktyānantyam.)

Cf. VSLM 1305-6: (yat tu) phalāśrayaḥ karma tatra phalasya dhātunā lābhād āśrayo dvitīyārthas tatra prakṛtyartho viśeṣaṇam ādheyatayā phalaṃ viśeṣyam, āśrayatvañ śakyatāvachedakam, *akhaṇḍopādhirūpam āśrayatātvañ* vā tadanugamakam —ここでの〈基体性性〉に対する「不可分添性」(akhaṇḍopādhi) という限定から、〈基体性性〉にまで統括属性を遡らせる第2解釈は〈基体性〉を「可分添性」(sakhaṇḍopādhi) とみなす見地に立っている (Kalā: evam api nirūpakabhedena sambandhibhedena ca sā bhinnā[, ] anyathā ghaṭāśrayatādigrāhe paṭāśrayatādigrāhāpattiḥ iti śaktigrāhāsaukaryāt. ata eva tasya nākhaṇḍopādhitvam[, ] ata āhākhaṇḍopeti[, ] tadādinīyāneti bhāvaḥ.)。

「添性」(upādhi) とは広義には属性 (dharma) 一般のことであり、狭義には「普遍」(jāti) たる資格に欠ける限定的属性のことである。Prabhā は次のように「添性」を説明し鋭くその本質を突いている。「Def. (x = 「添性」)

：xは限定者であり且つ「普遍」とは異なる」(Prabhā on VBhS ad k.24: up-ādhitvañ ca viśeṣaṇatve sati jātibhinnatvam)。さらに「添性」には、存在論的に基体 (dharmin) 以外の自己内在的属性により限定されないもの (Śāṅkarī on VBhS ad k.24: dharmāntaraniravacchinna, Darpaṇa on ibid.: itarapadārthāghaṭitamūrttikadharmarūpa), すなわち「不可分添性」とそうではなく存在論的に基体以外の自己内在的属性により限定されるもの (Śāṅkarī on ibid.: dharmāntarāvacchinna), すなわち「可分添性」とがある。〈基体性〉に即して言えば、それが「普遍」〈瓶性〉(ghaṭatva) のように無限定である時、それは「不可分添性」とみなされ、一方〈基体性性〉といったさらなる自己内在的属性により限定されるものとみなされる時、それは「可分添性」とみなされる。Cf. 宇野 [1977:100] 「[語で] 示されていない jāti と不可分添性以外の対象については、無限定的な認識は承認されない」(宇野 [1979:9]: anullikhyamānājātyakhaṇḍopādhyatiriktapadārthānām niravacchinnabhānānabhūpagamaḥ)。

〈基体性〉は、X・Yの二項に関して「XのなかにYが在る」という表現がなりたつ時 — この時、Xは〈基体〉(「能依」(ādihāra, adhikarāṇa, āsraya)), Yは「所依」(ādheya, āśrita, tadvr̥tti) と呼ばれ、X・Yの二項間には「能依・所依関係」(ādheya-ādiharatā) があると言われる —, その〈基体〉Xに存する属性である。そしてそれは父子関係における父性・子性のように相関的 (sāpekṣa) であるから、それを条件付け、特定する〈制約者〉(nirūpaka) を期待する。こうして上記の文は「Yに制約された (Y-nirūpita) 〈基体性〉がXに存する」と翻訳できる。勿論、Yに存する〈所依性〉(ādheyatā) に視点を移せば、同文は「Xに制約された (X-nirūpita) 〈所依性〉がYに存する」と翻訳できる。Cf. 宇野 [1978:94-96]。

さらに〈基体性〉のような相関的属性 (sāpekṣadharmā) は、「自性関係」(svarūpasambandha) というひとつの特殊な関係 (sambandha) である。そしてこの関係は、存在論的にそれ自身関係項自体 (XからYへの関係の方向性においてXは pratiyogin と呼ばれYは anuyogin と呼ばれる) と異なるものとはみなされないという点に特異性がある (Matilal [1968:40-42])。関係の観点

から「XのなかにYが在る」という文を翻訳するならば、「Yは〈基体性〉という関係でXに関係している」となる（XからYへ関係の方向性をとれば、「Xは〈所依性〉という関係でYに関係している」と言うことができる）。

ところで〈基体性〉は相関的属性としては〈制約者〉あるいはその属性の基体によって特殊化され（Matilal [1968:33]）、「自性関係」としては関係項との存在論的不異性から、関係項の差異に応じて差別化される（Matilal [1968:43]）。また「自性関係」としても、関係は関係項（pratiyogin, anuyogin）に相関するという意味では、〈制約者〉によって特殊化されると考えることもできる。何れにしてもこのように〈基体性〉には常に無数性（ānanta）の欠陥が付きまとうことになり（Matilal [1968:43]）、ここに〈指示対象性の局限者〉は多数の事象に随伴するもの（anugamaka）でなければ〈直接的指示関係〉の単一性は確保されないという原則との悖理が生ずることになるのである。

これは Darpaṇa [on VBhS ad k.24]が明示しているように新ニヤーヤ学派によって当然提起されることが予想される問題指摘である。

〈基体性〉に関してその単一性は如何にして確立されるのであろうか。〈基体性〉はそれが「不可分添性」であることによってはその単一性を何等保障されない。そのことは Darpaṇa や Parikṣā が〈基体性〉についてその単一性を「基体」（āśraya）という語そのものの適用根拠の観点から確立しようとしていることから示唆される。Cf. Darpaṇa on VBhS ad k.24: āśraya ity anugata-vyavahārād āśrayapadaśakyatāvachchedakatvāc ca tatsiddhir dravyatvādivat. しかし明らかにこれは言わば対象言語とメタ言語の意識的混同であり、相関的關係属性としての〈基体性〉の差別化の問題に答えることにはならない。一方 Śāṅkarī や Prabhā 等は、「不可分性」（akhaṇḍatva）から直接単一性を導こうとする論理を展開している。しかしこれもまた十分に説得力のあるものとは思えない（Śāṅkarī on ibid.: akhaṇḍatvaṁ ca nirūpakabhede 'pi tadbhedaprayuktabhedarahitatvam. bhedarāhityāc caikaḥ, . . .）。相関的關係属性としての〈基体性〉の単一性は、相関的關係属性としての〈基体性〉の差別化に答えるものとして論証されなければならない。ナーゲシャ・バッタが〈指示対象性の局限者〉を〈基体性〉に求めるこの見解を、「和合」（samavāya）は単一であると

語る論者達および白等の〈徳〉(guṇa)は単一であると語る論者達」に帰すことによって意図していることこそが、たとえそれは新ニャーヤ学派によっては到底受け容れ難いものであっても、この場合の論理展開上妥当な解答である。これは次のように考えることができよう。

一般的に言えば、ニャーヤ学派において、〈和合〉(samavāya)は個々の場において関係項が異なっても単一であるとみなされるが、既に述べたように「自性関係」は存在論的に関係項そのものであるから個々の場において関係項が異なれば、それに応じて差異するものとみなされる(Matilal [1968:43])。しかし両関係のこのような違いの根拠である存在論的在り方の違いは不問に附し、関係としてのレベルでのみ両者を見て、〈和合〉と同様相関的關係属性としての〈基体性〉にも関係項の差別化に基づくその差別化を認めなければ、そのような〈基体性〉にも単一性が確立される。Cf. Parīkṣā on VBhS ad k.24: samavāyasya pratiyogyanuyogibhede 'py ekatvavan nirūpakabhede 'pi tad[= āśrayatva]bhedākalanāt.

また、白色等の〈徳〉(guṇa)を単一なものともみえず見地では — このような考えは〈徳〉もまた「普遍」の基体であるニャーヤ学派の存在論においては成立しない —、白色等の〈徳〉はそれの基体が異なっても自己同一性を保持する。これと同様に〈基体性〉という相関的属性は自己の基体が異なっても差異することがないと考えられる。

しかしながら、このような説明は一見もっともらしいこじつけの詭弁である。そこでナーゲシャ・バッタは第2解釈を提示する。これは、新ニャーヤ学派と同じように〈基体性〉などの相関的属性にその個別性を認めた上で、さらにそれを「可分添性」とみなし、それらの個々の〈基体性〉を統括する属性 — 〈基体性性〉(それ自体は「不可分添性」) — を求めるものである[Guha [1979:19]における個別的pratiyogitāとそれらすべてに内在するpratiyogitā-tva参照]。その論理は、「それ」(tad)等の「sarvanāman」(2-註10参照)や「虚空」(ākāśa)という語に関して〈指示対象性の局限者性の局限者〉(śakyatāvachedakatāvachedaka)を求める場合と同様である。

## 2) パーニニ文法学派の存在論的 kāraka 観

カウンダ・バクタにとっては〈基体性〉は「それぞれの特定の〈能力〉そのもの」(tattacchaktiviśeṣarūpa)あるいは「不可分なる〈能力〉という相」(akhaṇḍaśaktirūpa)に他ならない。この〈能力〉(śakti)は Kāśikā [on VBhS ad k.2]によれば「〈行為主体性〉等の〈能力〉」(kartṛtvādiśakti)である。

〈行為主体〉とか〈目的〉といった kāraka が〈行為〉を生ぜしめる〈能力〉(VSLM1193: kriyājanakatvaśakti)であることは、バルトリハリの次の詩頌に表明されている。

「自己の基体に内属している〈行為〉,そしてまた[自己の基体]以外の基体に内属している〈行為〉の実現に対する〈能力〉(sāmarthya)を[Bhāṣyaの作者バタンジャリ等は]〈能成者〉(sādhana)と呼んでいる。」(VPiII, sādhana,k.1: svāśraye samavetānām tadvad evāśrayāntare / kriyāṇām abhiniṣpattau sāmarthyaṁ sādhanam viduḥ //)

kāraka は〈行為〉に対する〈実現せしめるもの〉と〈実現さるべきもの〉との関係(sādhyasāadhanabhāva)のアスペクトから、〈能成者〉(sādhana)と呼ばれる。Cf. Mbh on vt.2 ad P1.4.23: kārakaṁ nirvartakaṁ kārakasāñjñāṁ bhavati.そしてこの〈能成者〉は〈能力〉とされる。

ところで、〈能力〉とその基体は不異(abheda)であるという存在論から、kāraka は〈行為〉実現の〈能力〉であると同時にそのような〈能力〉の基体でもある。これは、「基体を持たない〈能力〉はありえない」(Helārāja on ibid.: śaktaṁ hi dravyaṁ sādhanam, na tu nirādhārā śaktiḥ saṁbhavati)という存在論的原理から導きだされるものである。Cf. Pradīpa (Mbh on vt.3 ad P5.2.94): na guṇa [Mbh: na guṇo guṇinaṁ vyabhicarati] iti. guṇaguṇinor jāti-tadvator iva yutasiddhyabhāvāt so 'yam ity abhedāt sambandha ity arthaḥ. 因にバタンジャリは能力とその基体を〈徳〉(guṇa) — 〈実体〉(darvya)の構制の下に捉えている(Mbh on vt.9 ad P2.3.1: kiṁ punar dravyaṁ sādhanam āhosvid gu ṇaḥ, ibid. ad P3.2.115: guṇasamudāyaḥ sādhanam . . . anyad

guṇebhyaḥ sādhanam ... )。こうしてナーゲーシャ・バッタによると〈能力〉とその基体のこの不異性を踏まえて、パタンジャリの kāraka-vibhakti (kāraka を意味する名詞接辞) の意味論は次のように総括される。

「P2.3.7 saptamīpañcamyau kārakamadhye における〈kāraka〉という語は〈能力〉を意図しており、さらに〈能力〉と〈能力保持者〉は不異であるから、〈能力保持者〉こそが目的格接辞等の意味である。そしてこのことは Bhāṣya 等において承認されている。」(VSLM1306: saptamīpañcamyau kārakamadhye ityatra kārakaśabdasya śaktiparatvena śaktiśaktimatoś cābhedena śaktimata eva dvitīyādyarthatāyā bhāṣyādisaṁmatatvāt.)

P2.3.7 は、「kāraka 間に時間的経過 (kāla) ・空間的距離 (adhvan) がある場合、それらを表す項目の後に於格接辞 (saptamī) あるいは奪格接辞 (pañcamī) が導入される」というものであり、例えば文 [adya bhuktvyāyaṁ dvyahē (dvyahād) bhoktā] (「彼は今日食べて二日後食べるであろう」) における時間的経過を表す〈dvyaha〉(「二日」 dvi + ahan + ṬaC → dvi + ah-ϕ + a: ṬaC ← P5.4.91; ϕ ← P6.4.144) という項目への於格接辞あるいは奪格接辞の導入を説明する。ところで同文において  $\sqrt{\text{bhuj}}$  の後への絶対分詞接辞 tvā (Ktvā) の導入は P3.4.21 によって規定されるが、この規則は同分詞接辞導入に関して時間的に前後する二〈行為〉の〈行為主体〉という kāraka の同一性 (samānakartṛka) を条件としている。一方 P2.3.7 は「kāraka 間」(kārakamadhye) と述べて、kāraka の差異を前提している訳であるから、ここにこの kāraka の同一性と kāraka の差異をどのように調整するのかという問題が生ずる。この問題に関して、以上のように P2.3.7 の〈kāraka〉は〈能力〉を意味しているものと解し、今日の飲食行為に対する〈能力〉と二日後の飲食行為に対する〈能力〉とは相互に異なるものの、「彼」という語によって指示される〈行為主体〉は両〈能力〉の基体としては同一である、というようにパーニニ文法家は説明して、同文における絶対分詞接辞 Ktvā 導入と時間的経過を表す項目への於格接辞あるいは奪格接辞の導入を正当化するのである。

バトージ・ディークシタは Vaiyākaraṇamatonmajjana (Vaiyākaraṇa-siddhāntakārikā) 第24詩頌で、名詞接辞の意味について次のように述べている。

[[名詞接辞(sUP)にとって<目的>[等もその意味である]] (Mbh ad P1.4.21) というように Bhāṣya において述べられているから、基体、基点、志向対象 (uddeśya)、関係が相応の名詞接辞の意味である。あるいは [kāraka を意味する名詞接辞にとっては] <能力>こそがその意味である。] (āśrayo 'vadhīr uddeśyaḥ sambandhaḥ śaktir eva vā / yathāyathāṁ vibhaktyarthāḥ supāṁ kar-meti bhāṣyataḥ //)

kāraka-vibhakti の意味に関して、この詩頌は kāraka-vibhakti が意味するものは基体、基点、志向対象 (uddeśya) であるという見解と、それが意味するものは <能力> であるという見解の両者を紹介している。カウンダ・バッタによれば、これら両見解は kāraka-vibhakti は属性 (dharma) を表示するのかそれともその基体 (dharmin) を表示するのかという問題構制を表象している。属性保持者の立場を採れば前者の見解になり、属性の立場を採れば後者の見解になる。<能力> は属性であり、その保持者はここにいう基体等に他ならないから、基体等は存在論的に <能力保持者> (śaktimat) であることになる (āśraya = śaktimat)。そしてこの場合には、基体を本質的に限定するものであり、したがって <āśrayatva> という語によって表示されるものである <基体性> (āśrayatva) と、<能力> の基体を本質的に限定するものであり、それは言うまでもなく <能力> であるが、<śaktimattva> という語によって表示されるものである <能力> とは同一である。換言すれば <āśrayatva> と <śaktimattva> の両語は等価である (この点については小川 [1986a] 参照)。カウンダ・バッタが <基体性> を <能力> に同定し得る理由はこのような事情によっているのである。しかしここに <基体性> と <能力> との同定によってもなお解決されなければならない問題がある。それは、相関的關係属性としての <基体性> において見たように、<能力> に関してそれが <指示対象性の局限者> であるとみなされる場合、如何にその単一性が保障されるのかという問題である。

カウ ندا・バ ッ タ は、Vaiyākaraṇabhūṣaṇa において、属性 — 〈能力〉 表示の見地から問題の 〈基体性〉 を 〈能力〉 に同定し、その 〈能力〉 についてはバルトリハリを引用して説明している。これは属性保持者 — 〈能力〉 の基体 (śaktimat) = 基体 (āśraya) 表示の立場とは異なる見地に立って展開されている議論であるとしても、これよりカウ ندا・バ ッ タ の 〈能力〉 観を窺い知ることができる。

「このように [属性保持者としての基体ではなく属性としての] 〈基体性〉 等こそが [kāraka-vibhakti の] 表示対象であるということが確定的である場合に、[バ ッ トー ジ ・ デ ィ ー ク シ タ は] 「あるいは 〈能力〉 こそが」 (śaktir eva vā) というように [述べている]。「能力」 (śakti) という語は他ならぬこの不可分なる [〈基体性〉] を意味するということを念頭に置いて、P2.3.7 sap-tamīpañcamyau kārakamadhye 等 [の規則] に関する Bhāṣya 等においては、[〈能力〉 が [kāraka-] vibhakti の意味である] という表現がなされている、というまさにこのことを意図して彼はこのように述べているのである。

「あるいは 〈能力〉 こそが」 に対して、「6 種の kāraka-vibhakti にとって」という補足がなさるべきである。一方、P2.3.50 にその導入が規定される属格接辞 (śeṣaṣaṣṭhī) にとっては、既述の関係一般がその意味である。

「能力」という [語の] 適用根拠 (pravṛttinimitta) はまさにその「能力」という語 [そのものである]。なぜなら\*「能力」という語は名称語 (sainjñāśabda) であるから。

さらに [〈能力〉 について] バルトリハリは次のように述べている。

【他の者達の [見解] では、〈行為〉 の実現をもたらす常住なる 6 種の 〈能力〉 が、[普遍] の如く、諸事象に [それとのある点での] 差異性と [ある点での] 不異性をもって定在している。】 (k.35)

【そしてこれらの [〈能力〉] は、[自己の基体である] 〈実体〉 ・ [その] 形態等 (時間・空間) の差異に応じてあたかも無限であるかのように思われる。しかしながら、これら [多様な 〈能力〉] の [〈能力〉 としての在り方 (tattva) は 6 種の 〈能力〉 を超えない。】 (k.36)

『さらに』まったく単一の〈能力〉が根拠の差異に応じて差別化され六様に認識される。その『多様な〈能力〉に基づいて』起こる『多様な kāraka表現』の基礎にあるものは〈行為主体性〉 (kartṛtva) 『という〈能力〉』であると言われる。』 (k.37)

この見解では、[kāraka-vibhakti 導入諸規則に対する支配規則である] P2.3.1 anabhihite (「他の項目によって表示されていない時」という規則に関して、それは「[6種の〈能力〉の]それぞれが他の項目によって表示されていない時」という意味となる。\* \*定動詞接辞 (ākhyāta) の意味にも [〈指示対象性〉の] 局限者として〈能力〉が必ず存在するから、文法操作の区別 [が正当化される。]。』 (VBh ad k.24: evaṁ cāśrayatvāder eva vācyatve dhruve tad evākhaṇḍaṁ śaktiśabdenocyata iti manasi nidhāya śaktir vibhaktyartha iti saptamīpañcamyau kārakamadhye ityādau bhāṣyādau vyavahriyata iti tad evābhipretyāha — śaktir eva veti. ṣaṇṇām kārakavibhaktīnām iti ṣeṣaḥ. ṣeṣaśaṣṭhyās tu prāguktaṁ sambandhasāmānyam arthaḥ. śaktīnām pravṛttinimittāṁ sa śabda eva, saṁjñāśabdātvaṭ. uktaṁ ca hariṇā —

nityāḥ ṣaḍ \*vyaktayo 'nyeṣām bhedābhedasamanvitāḥ /

kriyāsaṁsiddhye 'rtheṣu jātivat samavasthitāḥ //

dravyākārādibhedena tās cāparimitā iva /

dr̥ṣyante tattvam āsām tu ṣaḍ śaktīr nātivartate //

nimittabhedād ekaiva bhinnā śaktiḥ pratīyate /

ṣoḍhā kartṛtvam evāhus \*tatpravṛttīnibandhanam // [VP III, sādhana,

kk. 35-37. Iyer, Rau: śaktayo; tatpravṛtter.]

etanmate 'nabhihita ityatra tattacchaktyanabhidhāna ity arthaḥ. ākhyātārthe 'py avacchedakatvena śaktir asty eveti kāryavyavasthā.)

[\*ある言語項目が「普遍」あるいは「不可分添性」を指示する場合、その適用根拠 (pravṛttinimitta) が言語 (śabda) そのものに求められる場合があるということに関しては、小川 [1986a] 参照。\* \*kāraka-vibhakti の場合は〈能力〉が、そして定動詞接辞 (ākhyāta) の場合は〈能力保持者〉がそれぞれの意味であると考えられている。]

すべての事象には6種の〈行為〉を実現する〈能力〉－〈行為主体〉(kartṛ)・〈目的〉(karman)・作具(karaṇa)・間接的目標(sainpradāna)・出発点(apādāna)・場(adhikaraṇa)－が内在している。だからこそ同一事象とみなされるものが、〈行為主体〉となったり〈目的〉となったりすることが可能なのである。そして言うまでもなく言語表現における〈能力〉の特定は話者の意図(vivakṣā)による(cf. VP III, sādhana, k.90)。これらの〈能力〉は、自己の基体である〈実体〉(dravya)・その〈実体〉の形態(ākāra)・空間(deśa)・時間(kāla)の差異に応じて、無限に差別化・個別化されるように思われるが、実際には、具体的な場に現出する〈能力〉はどれをとっても6種の〈能力〉のいずれかの範疇に属する。例えば、小刀の切断〈能力〉と剣のそれとは異なるにもかかわらず、両〈能力〉はともに〈行為主体〉としての〈能力〉あるいは〈作具〉としての〈能力〉の範疇を出ない。しかしながら、これらの〈行為〉を実現する6種の〈能力〉も、究極的には、さらにそれらの上位概念としての〈行為主体性〉(kartṛtva)という単一の〈能力〉に還元されるのである。これは、「kārakaはすべてそれぞれに固有な中間的〈行為〉(avāntarakriyā)を通じて主要な〈行為〉を実現する」(VSLM1195: sarveṣāṃ ca kārakāṇāṃ svasvāvāntarakriyādvārā pradhānakriyāniṣpādakatvam)からであり、どのkārakaも〈行為〉－たとえそれは中間的(avāntara)であるとしても－の基体であるから、〈行為主体〉とはそれに〈行為〉が存する基体であるという意味で、kārakaはすべて〈行為主体〉とみなされ得るからである。そして反対に、〈行為主体性〉という単一の〈能力〉からの6種の〈行為実現能力〉への差別化は、この中間的〈行為〉を捉えることから得られる。Cf. Helārāja on VP III, sādhana, k.37: kartṛtvam avāntaravyāpāravivakṣayā karaṇādivyapadeśaupatām bhajate.

以上のような個別的な〈能力〉から最上位の〈行為主体性〉という〈能力〉に至る〈能力〉のヒエラルキーをバルトリハリは描いており、これに基づいてカウンダ・バッタは、〈能力〉は単一であり、それぞれの個別的な場で〈能力〉は〈実体〉・〈実体〉の形態・空間・時間といった〈制約者〉を異にし、多様

なものとして現出するとしても、〈能力〉自体は自己同一的である、と主張したいのである。こうして〈能力〉の単一性が保障されることにより、tiŃが基体を意味するとした場合、「不可分添性」としての〈基体性〉に等価な〈行為〉を実現する〈能力〉を〈指示対象性の局限者〉とみなすことができるのである。

「それぞれの特定の〈能力〉そのもの」(tattacchaktiviśeṣarūpa)とは、〈行為主体性〉・〈目的性〉といった〈能力〉の自体－最上位の〈能力〉のことであると考えられる。尚、Kāśikā [on VBhS ad k.2] は、〈能力〉は〈実体〉・時間等の〈制約者〉によって異なるという立場から、ナーゲーシャ・バッタの〈基体性〉の議論に見られるように、〈基体性〉を「可分添性」とみなし、統括属性として、すなわち〈指示対象性の局限者性の局限者〉として〈基体性性〉を求めるべきであるとしている。

### [2.3.1]

16) ミーマーンサー学派において定式化されている意味配当の原則(2－註14) [ananyalabhyo hi śabdārthaḥ] により、ある事象が〈直接的指示関係〉以外の他の様式により知られるものである場合、その事象はその〈直接的指示関係〉の担い手とみなされる項目の直接的意味とはみなされない。このように〈ananyalabhya〉は〈ananyathālabhya〉(他の様式により知られないもの)でもある。Cf. MNP (ākhyātārthanirūpaṇa): sa eva hi śabdasyārtho yaḥ prakā-rāntareṇa na labhyate, ananyalabhyaśabdārtha iti nyāyāt. この点に関しても金沢 [1982] 参照。

〈含意〉とは〈想定〉(arthāpatti)あるいは推理(anumāna)のことである。Kāśikā [on VBhS ad k.2]: ākṣepo nāmārthāpattir mīmāṃsakamate, tārki-kamate 'numānaṃ, yena vinā yad anupapannaṃ tena tat kalpyate . . .

ここで挙げられている、〈直接的指示関係〉以外の方法による定動詞接辞からの〈ハタラキ〉の基体あるいは〈結果〉の基体の認識の方法は、それぞれ簡単に説明すれば次のとおりである。

#### (1) 〈間接的指示関係〉(lakṣaṇā)

[gaṅgāyām ghoṣaḥ] (「ガンジス河に牛飼部落がある」) という表現において

〈gaṅgā〉(「ガンジス河」)という語がガンジス河の川岸(gaṅgātīra)を間接的に指示するように、〈ハタラキ〉を直接的に指示する定動詞接辞は、その基体を間接的に指示する。

しかしながら、この解釈は、単一の言語項目に同時に二つの指示関係を想定してはならないという原理に背馳する(yugapadvṛttidvayavirodha)。

(2) 〈含意〉(ākṣepa)

〈想定〉：〈ハタラキ〉は〈行為主体〉なくしては説明が付かないから、〈ハタラキ〉は〈行為主体〉というその基体を想定せしめる(Kāśikā: bhāvanāyāḥ kartāraīm vinānupapattyā karṭṛrūpāśrayaīm sā kalpayati)。ミーマーンサー学派のアーパデーヴァはこの立場である。

「定動詞接辞が表示する〈ハタラキ〉は〈行為主体〉なくしては説明が付かないから、その〔〈行為主体〉〕を含意する、というようにまさに〈含意〉によって〈行為主体〉の認識が可能な場合、一体どうして定動詞接辞にその〔〈行為主体〉〕に対する表示性を想定する必要がある。」(MNP34: ākhyātavācy-abhāvanā kartāraīm vinānupapannā tam ākṣipatīty ākṣepād eva kartuḥ pratipat-tisambhave kimiti tadvācakatvam ākhyātasya kalpanīyam.)

推理：Kāśikāによれば次のような推理形式となる。

(宗) 〈ハタラキ〉は何者かに依存する(bhāvanā kvacid āśritā)

(因) 〈徳〉であるから(guṇatvāt)

(喩) 瓶性のように(ghaṭatvavat)

あるいは、

(宗) 〈ハタラキ〉は〈行為主体〉を有する(bhāvanā sakarṭṛkā)

(因) 結果であるから(kāryatvāt)

(喩) [瓶性のように(ghaṭatvāt)] (この部分はŚāṅkarīによる補足)

この〈含意〉理論に関して、パーニニ文法学派の立場からは様々な難点を指摘し得るが、この理論の最大の難点は、言語的認識(sābdabodha)すなわち文の意味の認識の原因は語のもつ指示関係に基づく語の意味の想起(vṛtṭyā padārthopasthitih)であるという原理に徴し、〈含意〉から得られるものは言語的認識の対象(sābdabodhaviṣaya)とはみなされないという点に存する。

Cf. Kāśikā: vṛtṭyā padajanya padārthopasthiteḥ śābdabodhahetutvenākṣepa-  
labhyasya śābdabodhaviṣayatvaṁ na saṁbhavati.

(3) 〈主格接辞〉で終わる名詞項目 (prathamāntapada)

{devadattaḥ pacati} (「デーヴァダッタが料理している」) という表現において、{devadattaḥ} という 〈主格接辞〉 で終わる名詞項目が指示する対象は、料理行為の基体である。したがって定動詞形 {pacati} と一緒に共表現されているこの主格接辞で終わる名詞項目から、基体についてその認識が得られる。Cf. Darpaṇa: samabhivyāhṛtaprathamāntacairādīpadād evāśrayapratītyupapatterity arthaḥ. このような考えは周知のようにニヤーヤ学派の意味論の徴表である (Matilal [1968:145-7], Guha [1979:241-54])。〈主格接辞〉で終わる名詞項目における 〈主格接辞〉 は、〈もの〉表示において積極的な役割をもたず文法的形式性の観点から添加されているにすぎない。主格接辞で終わる名詞項目が指示する対象とはその語基そのものの指示する対象と異ならない (P2.3.46 prātipadikārthamātre prathamā)。

17) P3.4.69 は次のように解釈される。

P3.1.91 dhātoḥ 「[dhātu] の後に」 (支配規則)

P3.4.67 kartari kṛt 「[kṛt] 接辞は〈行為主体〉が表示さるべきとき、[[dhātu] の後に] 導入される。」

P3.4.69 laḥ karmaṇi ca<sup>1</sup> bhāve cākarmakebhyaḥ (ca<sup>2</sup> akarmakebhyaḥ)

ca<sup>1</sup> ca<sup>2</sup> は、先行規則 P3.4.67 から {kartari} が同規則に牽引され、しかも同規則において二度現われることを示している。すなわち、この規則は、{laḥ [kartari] karmaṇi ca [kartari] bhāve ca akarmakebhyaḥ} と読まれるべきである。さらに P3.1.91 の支配下にあるからこの規則は次のように解釈される。

「L接辞は [〈行為主体〉] そして 〈目的〉 が表示さるべきとき、[[dhātu] の後に] 導入される。L接辞は [〈動作主体〉] そして 〈行為〉 (bhāva) が表示さるべきとき、〈目的〉 を持たない [[dhātu] の後に] 導入される。」

したがってこの規則から、L接辞は〈行為主体〉〈目的〉、そして dhātu の意味に他ならない〈行為〉(bhāva)を意味することが知られる。

L接辞は時制と法によって LAṬ (Present) LIṬ (Perfect) LUT (Periphrastic future) LRṬ (Future) LET (Vedic Subjunctive) LOT (Imperative) (ṭiṭah); LAN (Imperfect) LIN (Optative or Potential) LUN (Aorist) LRN (Conditional) (ṇiṭah) の10種に区別される。例えば P3.2.123 vartamāne laṭ は「現在 (vartamāna) の事象を表示する [[dhātu] の後に] LAṬ が導入される」というように特定のL接辞が時制の観点から選択されることを述べている。

ところで、当該規則 P3.4.69 から〈行為主体〉・〈目的〉・〈行為〉(bhāva) に対して〈直接的指示関係〉を有するものとして理解される項目はL接辞であって、{pacati} 等における定動詞接辞 tiP 等ではない。したがってここで、この規則はL接辞の〈行為主体〉等に対する〈直接的指示関係〉を把握する手だて (śaktigrāhaka) ではあっても、定動詞接辞 tiP 等のそれらに対する〈直接的指示関係〉を把握する手だてとはみなされないのではないかという問題が当然提起されることになる (śaktigrāhaka については2-註25参照)。

パーニニ文法の派生組織においては、一般的にはこれらのL接辞は定動詞接辞によって代置される。

P3.4.77 lasya (支配規則)

P3.4.78 tiptasjhisiphthasthamibvasmastātātāñjathāsāthāndhvamiḍvahimahiñ

P3.4.77 {lasya} は〈la〉の〈属格接辞〉で終わる語形 (ṣaṭhyanta) であり、この語形における〈属格接辞〉は、特定の関係 (yoga) を示すものとは解されないで、解釈規則 P1.1.49 ṣaṣṭhī sthāneyogā 「[文法規則中の]〈属格接辞〉は『xの代りに』(sthāne) という関係を示す」によって、代置関係を表す〈属格接辞〉(sthānaṣaṣṭhī) である。したがって P3.4.78 は {{lasya sthāne} tiptas . . .} と読まれるべきであり、「[Lの代りに] tiP 等が生起する」と解釈される。このことからLとtiP等の定動詞接辞との間には原要素と代置要素の関係 (sthānyādeśabhāva) がある。Lは原要素 (sthānin) であり、tiP等の定動詞接辞はそれに対する代置要素 (ādeśa) である。こうしてL接辞導入規則 P3.4.69 は代置要素としての tiP 等の定動詞接辞に対する原要素としてのLに

関する意味規定であることになる。

パーニニが当該規則の定式化に至る過程をここで考えてみよう。その過程にはパーニニ文法学派の文法哲学と呼ぶべきものが端的に表れている。

パーニニ文法学派の文法哲学によれば、意味の担い手 (sphoṭa) として文 (vākya), 名詞接辞・定動詞接辞で終わる項目 (pada), 語基 (prakṛti) ・接辞 (pratyaya) という言語項目が考えられる。このうち、情報伝達の場において真に情報伝達の機能を発揮し得るのは文だけである。

「その [文, 名詞接辞・定動詞接辞で終わる項目, 「形態素」(varṇa) の 3 種の意味の担い手の] うち文という意味の担い手 (vākyasphoṭa) が第一次的である。世間ではまさにその [文]こそが意味を伝達するものであり、さらにその [文] によってのみ意味の完結があるからである。」(VSLM1: tatra vākyasphoṭo mukhyaḥ. loke tasyaivārthabodhakatvāt, tenaivārthasamāpṭeś ca.)

言語運用の場において唯一実在する意味の担い手は、それ自体としては不可分 (akhaṇḍa) ・単一なる文である。しかし言語を反省的に対象化する文法学においては、究極の実在である文の派生手続の簡潔な記述のために、文は名詞接辞・定動詞接辞で終わる項目、さらには語基・接辞へと anvaya・vyatireka に基づく推理によって分解され、同時にこれらの下位単位が措定される (言語項目の分析と意味配当の手段としての anvaya・vyatireka に基づく推理については、Cardona [1967-68] 参照)。

「そこで [パーニニ等の文法学の] 先師達は、文ごとに [この文はこの意味をもつ、といった] 言語協約 (saṅketa) を把握することは不可能であり、さらにその [文の] 説明は簡単な方法では不可能であるから、概念的構想によって [文を] 名詞接辞・定動詞接辞で終わる項目に区分し、名詞接辞・定動詞接辞で終わる項目に関して語基と接辞の区分を概念的に構想することによって、概念的に構想された anvaya・vyatireka に基づき、文法学だけの領域に存立す

るそれら [語基と接辞] の意味の区分を構想した。」(VSLM5: tatra prativākyam saṅketagrahāsambhavāt tadanvākhyānasya laghūpāyenāśakyatvāc ca kalpanayā padāni pravibhajya pade prakṛtipratyayabhāgakalpanena kalpitābhyām anvayavyatirekābhyām tattadarthavibhāgaṁ śāstramātraviṣayaṁ parikalpayanti smācāryāḥ.)

このように、文の名詞接辞・定動詞接辞で終わる項目、さらには語基と接辞への階層的分化は概念的である。さらに文のこのような階層的分化の最下位の単位である語基と接辞の概念的設定は、文法規則による派生手続の簡潔な記述の手段 (śāstraprakriyānirvāhaka) である。

「その [3種の意味の担い手の] うち、文法規則による派生手続を記述する手段が「形態素」という意味の担い手 (varṇasphoṭa) である。語基と接辞はそれぞれの意味を表示するというのが、その意味である。upasarga・nipāta・dhātu 等の [品詞] 区分もまたまったく同じように [派生手続を記述する手段として] 概念的に構想されたものである。」(VSLM8: tatra śāstraprakriyānirvāhako varṇasphoṭaḥ. prakṛtipratyayās tattadarthavācakā iti tadārthaḥ. upasarganipātadhātvaḍivibhāgo 'py evam eva kālpanikaḥ.)

文法規則による派生手続の簡潔な記述のためにパーニニが採った手段は、以上のような言語の階層化・品詞区分ばかりではない。彼はそのために〈代置〉(ādeśa) という文法操作も考案している。

「まさにその [文の] 説明 (anvākhyāna) を簡潔に記述するために、L等の原要素および〈tip〉等の代置要素がまさに概念的に構想される。それら [原要素および代置要素] の意味もまたまさに概念的な構想に他ならない。それら [原要素と代置要素] のうち、原要素についてその意味が [パーニニ等の] 聖仙達によって [P3.4.69 におけるように] 言語的に定式化されている。そして代置要素は [原要素の意味を表示し得るものだけが代置要素である] という原理

によってその [意味] を有する。(中略) そしてこのような場合 [意味を] 表示するものは原要素なのかそれとも代置要素なのかといった考察はまったく無益である。なぜなら、概念的に構想された表示者性 (kalpitavācakatva) は [原要素と代置要素の] 何れにも存在するからである。」 (VSLM8: tasyai-vānvākhyānasya lāghavena nirvāhāya sthānino lādaya ādeśās tibādayaś ca kalpitā eva. teṣām arthā api kalpitā eva. tatra sthāninām arthā ṛṣibhiḥ kaṅṭhata uktāḥ. ādeśānāñ ca sthānyarthābhīdhānasamarthasyaivādeśateti nyāyena te . . . evañ ca sthāninām vācakatvam ādeśānām vetyādivicāro niṣphala eva kalpitavācakatvasyobhayatrāpi sattvāt.)

原要素としての L 接辞, それに対する代置要素としての <tip> は, <代置> 操作のために, 有機的な諸文法規則の連関を念頭において, 作業装置として概念的に構想されたものなのである。因に <tip> の /p/ は指標辞 (anubandha) と呼ばれるものであり, 特定の文法操作の適用を示唆する。そして文法規則においては原要素に意味が配当され, 代置要素は原要素と代置要素の意味間の同等性の原理によってのみその意味が確保される。これは言うまでもなく規則適用の観点からであって, 規則の定式化においては原要素と代置要素の立場は逆転する。しかしながら, 原要素・代置要素ともに概念的構想であり, さらにそれらの意味も概念的構想であるという点は何等変るところがない。作業装置としての L 接辞や <tip> は実際の言語運用においては決して使用されることはない。

当該規則 P3.4.69 の定式化において, パーニニによって取られた手続は次のようなものであると考えられる。① {gamyate grāmo devadattena} {gacchati grāmañ devadattaḥ} (「デーヴァダッタは村に行きつつある」); {āsyate devadattena} {āste devadattaḥ} (デーヴァダッタが座っている) 等の文から {grāmaḥ} {grāmam} {devadattena} {devadattaḥ}; {gamyate} {gacchati} {āsyate} {āste} といった名詞接辞で終わる項目 (subantapada) と定動詞接辞で終わる項目 (tiñantapada) が抽出 (apoddhāra) される。②特に定動詞接辞で終わる項目に関してのみ言えば, anvaya・vyatireka に基づく推理によってさらにそ

れらから語基 {gam} ( {gacchati} の場合, P7.3.77 により /m/ → /ch/) と接辞 {te| |ti} が抽出され, 語基としての {gam} に対しては「行く」という意味が配当され, 接辞としての {te| |ti} には〈行為主体〉と〈目的〉と〈行為〉(bhāva) という意味が, {ti|} には〈行為主体〉という意味が配当される(この場合, 勿論 vikarāṇa yaK (P3.1.67) ŚaP (P3.1.68) の扱いが問題となるが, ここではそれには触れない。また {te| |ti} の意味として想定されるのは〈行為主体〉等ばかりではない。数や時制・法等もそれらの意味とみなされる。定動詞形に関する語基・接辞区分およびそれらに対する意味配当の実際については, Mbh on vt.6 ad P1.3.1 を参照せよ)。さらに, ③これら {te|} や {ti|} といった接辞としての項目は〈代置〉操作の対象とされ, 作業装置としての〈ta〉(P3.4.79 により /a/ → /e/) や〈tip〉(P1.3.3 により /p/ → φ) にシンボル化され, これらに配当された意味は文法操作上その原要素とみなされる作業装置としてのLに付託される。こうしてこのような規則定式化の手続きは, 当該規則が実際の言語運用の場に見いだされるとみなされる tiP 等の項目の意味がLに付託された形で定式化されているということを示している。したがって, Lに関する意味規定は文法操作上はそれの代置要素とみなされる tiP 等の定動詞接辞の意味規定に他ならない。

それでは規則定式化に際して, 何故パーニニはLの代りに〈tip〉等を直接使用しなかったのかと言えば, その答えはあくまでもパーニニの派生組織の構成に見いだされるべきものなのである。簡単な例を挙げれば, Lを使用しなければ, P3.4.79 ṭita ātmanepadānām ṭer e 「IT-Ṭを有する [Lに代置される] ātmanepada の ṭi に /e/ が代置される」といった帯指標辞Lの存在を前提し指標辞によって文法操作を特定するような規則は定式化し難いことになるのである。

以上のようなパーニニ文法学派の派生組織の構成に係わる文法哲学については, 小川 [1984a] に詳しい。

18) {rāmān}

- 〈1〉 rāma + am-auṭ-Śas P2.3.2 karmaṇi dviṭiyā 「[他の項目によって表示されていない (P2.3.1 anabhihite)] 〈目的〉が表示さるべき時, 〈目的格接辞〉が導入される。」
- 〈2〉 rāma + Śas P1.4.21 bahuṣu bahuvacanam 「複数性が表示さるべき時, 複数接辞 ([bahuvacana]) が導入される。」
- 〈3〉 rām ā s P6.1.102 prathamayoḥ pūrvasavarṇaḥ 「[aK に (P6.1.101) 〈主格接辞〉 〈目的格接辞〉 の [aC が後続する時 (P6.1.77)] [前後の両要素の代りに唯一 (P6.1.84)] 前要素と同類の [長音 (P6.1.101)] が代置される。」
- 〈4〉 rāmān P6.1.103 tasmāc chaso naḥ puṁsi 「その [前要素と同類の長音] に後続する Śas の /s/ に, 男性形で, /n/ が代置される。」

{ghaṭaiḥ}

- 〈1〉 ghaṭa + ṭā-bhyām-bhis P2.3.18 kartṛkaraṇayos tṛṭiyā 「[他の項目によって表示されていない] 〈行為主体〉 〈作具〉が表示さるべき時, 〈具格接辞〉が導入される。」
- 〈2〉 ghaṭa + bhis P1.4.21
- 〈3〉 ghaṭa + ais P7.1.9 ato bhisa ais 「短音 /a/ で終わる [[aṅga] に後続する (P6.4.1)] bhis に ais が代置される。」
- 〈4〉 ghaṭais P6.1.88 vṛddhir eci 「[/a/ に (P6.1.87)] eC が後続する時 [前後の両要素の代りに唯一 (P6.1.84)] 「vṛddhi」が代置される。」
- 〈5〉 ghaṭai rU P8.2.66 sasajuṣo ruḥ 「/s/ で終わる [[pada] (P8.1.16)] 〈sajuṣ〉に rU が代置される。」
- 〈6〉 ghaṭaiḥ P8.3.15 kharavasānayor visarjanīyaḥ 「[/r/ で終わる (P8.3.14)] [[pada] (P8.1.16) に] khAR · avasāna (休止) が後続する時, visarjanīya (= visarga) が代置される。」

名詞接辞の一般的導入規則は次のとおりである。

P4.1.1 nyāprātipadikāt (支配規則)

P4.1.2 svaujasamautḥaṣṭābhyāmbhisṅbhyāmbhyasṅasibhyāmbhyasṅas-

osāmyossup 「[Ñi で終わる項目・āP で終わる項目・「prātipadika」の後に] su 等の名詞接辞が導入される。」

〈目的格接辞〉(〈dvtīyā〉) というのは am-auṭ-śas の名称であり、〈具格接辞〉(〈trīyā〉) は tā-bhyām-bhis に対する名称である。さらに 〈śas〉 〈bhis〉 は「bahuvacana」(P3.4.103) と呼ばれる。

実際の文表現から {rāmān} {ghaṭaiḥ} といった名詞接辞で終わる項目 (subanta) が抽出され、さらにそれらは、ここでは「〈目的〉、〈作具〉等に対する〈能知性〉(bodhakatā) という〈直接的指示関係〉が「/n/ 音, visarga /ḥ/ 音等に存する」と言われていることから、{rāmā} {ghaṭai} という語基部分と {n} {ḥ} という接辞部分に分析され、これらの接辞部分には〈目的〉、〈作具〉・〈行為主体〉という意味(さらには複数性という意味)が配当される。尚、名詞形におけるこのような語基・接辞区分およびそれらに対する意味配当の実際は Mbh on vt.9 ad P1.2.45 に提示されているが、しかし実際問題として、そのような語基・接辞区分は例えば {ghaṭena} (〈ghaṭa〉 Inst.sg.) において {ghaṭ} - {ena} ; {ghaṭe} - {na} のいずれにも確定し得るように、一義的には決定し難いことを文法家自身も認めているので (cf. VM (VSK), k.65), 当該事例における {n} {ḥ} の接辞としての定立はあくまでも様々な可能性のうちの一つであると考えられる。文法的には {rāmān} {ghaṭaiḥ} における /n/ /ḥ/ の直前にある /ā/ /ai/ は二つの原要素に対する唯一代置 (ekādeśa) であるから、解釈規則 P6.1.84 antādivac ca により先行項目 {rāmā} {ghaṭa} の最終要素 /a/, 後続要素 {śas} {ais} の第一要素 /a/ /ai/ と同様なものとみなされる。

パーニニは P4.1.2 によって作業装置として指定した {śas} {bhis} という項目にそれぞれ {n} {ḥ} の意味とみなされる〈目的〉、〈作具〉・〈行為主体〉を付託して P2.3.2 karmaṇi dvtīyā, P2.3.18 kartṛkaraṇayos trīyā を定式化しているのである。また複数性という意味の付託によっては P1.4.21 bahuṣu bahuvacanam が定式化されることは言うまでもない。そして派生の観点からは、{śas} {bhis} に付託された意味は〈代置〉の操作によって実現形における {n} {ḥ} に継承されることになる。

## 【tiÑの意味2】

[2.3.2] [反論:ニヤーヤ学派] 規則 [P3.4.69] 中の <kartṛ> (「行為主体」) <karman> (「目的」) という語は [それぞれ] <行為主体性> (kartṛtva) <目的性> (karmatva) [という属性] を意図する。そのような場合、<行為主体性> [という属性] は <努力> (kṛti) に他ならず、<目的性> は <結果> に他ならない。これらの <努力> あるいは <結果> が [L] の意味であるべきである<sup>19)</sup>。

[答え] このように疑ってはならない。なぜなら、<結果> と <ハタラキ> は dhātu より得られ、したがってLに再びそれらに対する <直接的指示関係> を想定することは不合理であるから。

[2.3.3.1] [反論] 他学派 [ミーマーンサー学派バーッタ派] の論法では <ハタラキ> は dhātu の意味ではないから、[[自己以外の項目によって得られないものが自己の直接的指示対象である] (ananyalabhyaśabdārtha) の原理に基づき、P3.4.69 は] その [<ハタラキ> の] 意味でのLの導入規定であるべきである<sup>20)</sup>。

[答え] その場合には、「kṛt」接辞にも <行為主体> <目的> 等に対する表示性が確立されないことになろう。そして P3.4.67 kartari kṛt と P3.4.69 laḥ karmaṇi [ca bhāve cākarmakebhyaḥ] は得失を同じくする (tulyayogakṣema)<sup>21)</sup>。

さらにミーマーンサー学派 [バーッタ派の見解] では、「kṛt」接辞と同様定動詞接辞もまた <行為主体> を表示するものであるべきである。[また] <ハタラキ> (bhāvanā) が「kṛt」接辞等<sup>22)</sup>の場合におけるように <含意> によって認識可能ならば、[定動詞接辞は <ハタラキ> (bhāvanā) を] 表示するものであってはならない。

[ミーマーンサー学派バーッタ派からの反論] [定動詞接辞において] そのように [<ハタラキ> (bhāvanā) が <含意> によって得られるもの] であるとするならば、その [<ハタラキ> (bhāvanā)] には [<行為主体>

に対する] 主要性 (prādhānya) がないことになろう<sup>23)</sup>。

[答え] 否である。なぜなら, |ghaṭam ānaya| (「瓶を持って来い」) 等の [表現] において [名詞語幹 <ghaṭa> (「瓶」) の指示対象である瓶性 という「普遍」によって] 含意された個物 (vyakti) に主要性が認められるように, [定動詞接辞の指示対象である <行為主体> によって含意される <ハタラキ> (bhāvanā) にも主要性が] 妥当するからである<sup>24)</sup>。

[2.3.3.2] [反論] |pacati| 等 [の定動詞形] に関して [それが] |pākam karoti| というように [<ハタラキ> (bhāvanā) を意味する  $\sqrt{kṛ}$  によって] パラフレーズ (vivarāṇa) されるのが見られるから, <ハタラキ> (bhāvanā) は [定動詞接辞の] 表示対象である。

[答え] 否である。なぜなら, 料理をもたらす <ハタラキ> を有する <行為主体> (pākānulūlavypāravat-karṭṛ) も [|pākam karoti| という] パラフレーズの対象である点では区別されないから<sup>25)</sup>。

[反論] <行為主体> の [|karoti| の <ti> による] パラフレーズは, [|pacati| の <ti> という言語項目が表示する意味のパラフレーズではなく, <含意> から理解されるところの] 話者によって意図される意味 (tātparyārtha) のパラフレーズである。[実にこのように言語の意味ではないもの (aśabdārtha) もパラフレーズ文には現われるのである。] 例えば, |pākam karoti| の [<目的格接辞> <am> によって] 言語の意味ではない <目的性> (karmatva) がパラフレーズされるように<sup>26)</sup>。あるいは, [|dhavakhadiraū| (「ダヴァ樹とカディラ樹」) といった] 相互結合 Dvandva において [それが |dhavaḥ ca khadirāḥ ca| というように成分分析される時, この二つの <ca> によって言語の意味ではない, すなわち複合語 (samāsa) <dhavakhadira> を構成する |dhavaḥ| |khadirāḥ| の意味ではない] <併存> (samuccaya) の部分がパラフレーズされるように<sup>27)</sup>。[したがって <行為主体> の |karoti| の <ti> によるパラフレーズは |pacati| の定動詞接辞 <ti> が] その [<行為主体>] を意味するということを決定する根拠とはならない。

[答え] このように言うことはできない。なぜなら、〈ハタラキ〉(bhāvanā) の場合も、[それが言語の意味ではなくてもパラフレーズ文に現われ得るという点では] 事情は同じであるから。[したがってパラフレーズによっては定動詞接辞が〈ハタラキ〉(bhāvanā) を直接的に指示するということは確立されない。]

[2.3.4.1] さらに、{paktā devadattaḥ} (料理人であるデーヴァダッタ) において [[kṛt] 接辞 tṛC の指示対象である〈行為主体〉が〈devadatta〉の指示対象に不異なるものとして (abhedā) 結合するの] と同じように、{devadattaḥ pacati} において [定動詞接辞の指示対象が〈devadatta〉の指示対象に] 不異なるものとして結合することが経験上明らかであるから、この [不異なるものとしての結合 (abhedānvaya)] に随順すれば、〈行為主体〉が [定動詞接辞の] 表示対象であることは必然である。

[反論] [指示対象間の] 不異性の認識 (abhedabodha) に対しては〈同一種接辞後続性〉(samānavibhaktikatva) が支配的決定要因 (niyāmaka) である。しかしそれはこの [{devadattaḥ pacati}] においては見いだされない<sup>28)</sup>。

[答え] 否である。なぜなら、[不異性の認識に対して〈同一種接辞後続性〉が支配的決定要因であるとすると] {somena yajeta} (「ソーマによって供儀をなすべし」) {stokaṁ pacati} (「彼は十分に料理していない」) {rājapuruṣaḥ} (「王の家臣」) 等においても不異性の認識が結果しないことになるからである<sup>29)</sup>。

[2.3.4.2] [反論] [{devadattaḥ pacati} 等において〈ハタラキ〉が定動詞接辞の直接的指示対象であるべきである。しかし定動詞接辞は] 〈間接的指示関係〉に基づいて〈行為主体〉を表示するから、[定動詞接辞と〈devadatta〉の間に] 同一対象指示性 (sāmānādhikaraṇya) が成立する。

[答え] 否である。[〈間接的指示関係〉に基づいて同一対象指示性が正当化されるとするならば、ミーマーンサー学派パーッタ派にとって] 〈pi-

ṅgākṣī) (「その両目の赤き」) 等の〈語源形〉 (yauḡika, 語源上の意味を保持する語形) にも、同様に〈vaiśvadevī〉 (「その神格がヴィシュヴァ・デーヴァ群神 (viśvadevāḥ) である」) 等の「taddhita」接辞で終わる語形にも〈実体〉 (dravya) に対する直接的表示性が結果しないことになるからである<sup>30)</sup>。なぜなら、[両語形には、それぞれ] P2.2.24 anekam anyapadārthe, P4.2.24 sāsya devatā という文法規則 (anuśāsana) に基づき、{|piṅge akṣṇī yasyāḥ| |viśve devā devatā asyāḥ| という成分分析 (vighraha) が明示されるから、したがって [両語形は] まさしく [yasyāḥ| |asyāḥ| という〈属格接辞〉で終わる項目の語基の意味に対して] 主要なる〈属格接辞〉の意味 (śaṣṭhyartha) [を表示する限り] でのみ正語としての説明 (anuśāsana) が得られるからである。[両語形は〈属格接辞〉の意味である関係 (saṁbandha) を直接的な表示対象とすべきである]<sup>31)</sup>。そしてさらにそのような場合、{|aruṇayā piṅgākṣyaikahāyanyā somaṁ kriṇāti| (「赤い赤目の一歳 [牛] によってソーマを購うべし」) という文において〈実体〉は言及されていないから、赤さ (āruṇya) [という〈徳〉 (guṇa)] は、まさに [購買行為] 自身 [を理解せしめるこの] 文 [の〈piṅgākṣī〉〈ekahāyani〉 (「一歳の」) という語] から得られるところの〈実体〉に結合する、ということを理解せしめる Aruṇādihikaraṇa の破壊が結果する<sup>32)</sup>。なぜなら、[〈piṅgākṣī〉等の〈語源形〉・〈vaiśvadevī〉等の「taddhita」接辞で終わる語形が] 〈実体〉を直接表示するということを立証せしめる原理 (mūlayukti) である [{|piṅgākṣī gauḥ| (「赤目の牛」) |vaiśvadevy āmikṣā| (「ヴィシュヴァ・デーヴァ群神に献上される凝乳」) において明らかな] 同一対象指示性が上述の [〈間接的指示関係〉といった] 方法により説明され得るからである。そして以上のようなことは Vaiyākaraṇabhūṣaṇa [Dhātvarthanirṇaya・Samāsaśaktinirṇaya] において詳論されている。

[2.3.5] [バットージ・ディークシタは] 「tiṅは [それらの基体に対する] (tiṅaḥ) というように述べている。〈能知性〉 (bodhakatā) という〈直接的指示関係〉 (śakti) は [L接辞ではなくその代置要素である] tiṅ

だけに存するということを意図して、このように彼は述べているのである。

#### 【註解 4】

##### [2.3.2]

19) ニヤーヤ学派は、一般に、「能動表現」(kartariprayoga) に関しては、アートマン (ātman) に内在する〈徳〉としての〈努力〉(kṛti, prayatna) を動詞接辞の意味とみなし、また「受動表現」(karmaṇiprayoga) に関しては〈結果〉を動詞接辞の意味とみなす。例えば {devadattaḥ pacati} (「デーヴァダッタは料理している」) という文の意味の認識内容は {pākānukūlakṛtimān devadattaḥ} (「料理をもたらず〈努力〉を有するデーヴァダッタ」) というようにパラフレーズされ、{odanaḥ pacyate} (「飯が料理されている」) という文の意味の認識内容は {pākajanyaphalavān odanaḥ} (「料理より生ずる〈結果〉を有する飯」) というようにパラフレーズされる。

ところで同派は、L 接辞導入規則 P3.4.69 の権威を認め、〈代置〉操作において意味表示性 (vācakatva) をもつのは原要素 (L) であって代置要素 (tiP 等) はその原要素の想起を通じて間接的に意味表示性を獲得すると考える。Cf. Darpaṇa on VBhS ad k.61: tair (naiyāyikair) laḥ karmaṇi (P3.4.69), svaujasamaud (P4.1.2) ityādivihitapratyayānām eva vācakatvam, tibvisargādīnām tv ādeśismṛtidvārā bodhakatvam eva lipivad ity upagamāt.

それでは、L 接辞導入規則 P3.4.69 から、L に関して如何に〈努力〉あるいは〈結果〉に対する表示性が確立されるのであろうか。

この〈努力〉あるいは〈結果〉に対する表示性の確立の過程には二段階が認められる。すなわち、①先ず同規則中の〈karṭṛ〉〈karman〉という語はそれぞれの指示対象に内在し、その指示対象を本質的に限定している属性 (dharma) を意図していると解釈される。この解釈は Darpaṇa によれば、「形相指示理論」(ākṛtisaktivāda), あるいは両語を bhāvapradhānanirdeśa と解することによって成立する (ākṛtisaktivādām abhipretya, bhāvapradhānanirdeśād vā)。ニヤーヤ学派が一般にミーマーンサー学派パーッタ派に帰せられる「形相指示理論」に訴えることは不自然であるから、その解釈は一般的な表現解釈技法である

bhāvapradhānanirdeśa に依拠していると考えべきである。bhāvapradhāna-  
 nirdeśa とはそれより bhāva (=dharma, 属性) が主要なもの (pradhāna) と  
 して認識されるような表現であり、それに対して〈属性接辞〉(bhāvapratyaya)  
 が添加された語形と意味的に等価であるような表現を指すのである (小川  
 [1988b])。すなわちこの解釈技法によれば、規則中の〈kartṛ〉〈karman〉と  
 いう語は、それぞれ〈kartṛtva〉〈karmatva〉という語に等価であり、それら  
 の指示対象は、〈kartṛtva〉〈karmatva〉という語の派生において語基〈kartṛ〉  
 〈karman〉の指示対象に内在してそれを本質的に限定する属性 — 両語基の適  
 用根拠 (pravṛttinimitta) あるいは〈指示対象性の局限者〉(śakyatāvachchedaka)  
 — である〈行為主体性〉(kartṛtva)〈目的性〉(karmatva)である (小川 [1986a])。

さらに、②この〈行為主体性〉(kartṛtva)あるいは〈目的性〉(karmatva)  
 という属性は、それぞれ〈努力〉あるいは〈結果〉に他ならない。上記のよう  
 に〈属性接辞〉はその導入規則 P5.1.119 tasya bhāvas tvatalau により、それ  
 が添加される語基の指示対象に内在してそれを本質的に限定する属性 (語基の  
 適用根拠あるいは指示対象性の局限者) を指示する。ところで、ニヤーヤ学派  
 にとっては、〈行為主体〉(kartṛ)とは〈努力〉の基体 (krṭyāśraya) であり、  
 〈目的〉(karman)とは〈結果〉の基体 (phalāśraya) である。したがって〈努  
 力〉の基体あるいは〈結果〉の基体である x を本質的に限定する属性であり、  
 その x に対して〈kartṛ〉あるいは〈karman〉という語を適用する際の根拠で  
 あるものは〈努力〉あるいは〈結果〉であることになるから、〈kartṛtva〉  
 〈karmatva〉という語の指示対象とみなされる〈行為主体性〉あるいは〈目  
 的性〉という属性は、〈努力〉あるいは〈結果〉に他ならない、ということが  
 できる。こうして〈kartṛtva〉〈karmatva〉という語と等価な表現とみなされ  
 る規則中の〈kartṛ〉〈karman〉という語は、〈努力〉あるいは〈結果〉という  
 属性を指示する、と解釈されるのである。

L の意味として〈努力〉の基体、〈結果〉の基体ではなく、〈努力〉そのもの、  
 〈結果〉そのものを指定する根拠は、言うまでもなく〈指示対象性の局限者〉  
 に係わる〈重さ〉〈軽さ〉の考量にかかっている。〈努力〉の基体あるいは〈結  
 果〉の基体を L が指示するとすれば、無数の〈努力〉あるいは〈結果〉を〈指

示対象性の局限者」とみなさなければならず、一方、〈努力〉あるいは〈結果〉を〈指示対象〉とみなせば「普遍」(jāti)としての〈努力性〉(kṛitva)あるいは具体的な〈結果〉を統べるような属性の存在に基づき、〈指示対象性の局限者〉の単一性という〈軽さ〉が得られるのである。Cf. Kāśikā: dharmiparatve gurubhūta dharmadharṁṇor ubhayatra śaktiḥ kalpyā, anantānām kṛtīnām, phalānām ca śakyatāvachedakatvam upeyaṁ, tathātigauravam. kṛteḥ śakyatvetu, kṛtivyasya jātirūpasya śakyatāvachedakatayā lāghavam iti bhāvaḥ.

[2.3.3.1]

20) ミーマンサー学派バーツタ派によれば、dhātu の意味は〈結果〉である。Cf. Darpaṇa: pacatīty asya pākam karotīti vivaraṇāt phalam pacyādyarthaḥ, tīn tu vyāpāravacana iti mīmāṁsakaḥ manyante, . . . Bhāṭṭacintāmaṇi によれば dhātu の意味を〈結果〉、動詞接辞の意味を〈ハタラキ〉とするのはマンガナ・ミシュラ (Maṇḍana Mīśra) である。Cf. BC76: atra maṇḍanaḥ, phalam eva dhātvarthaḥ. pacigamityajipatatyādīnām viklityuttaradeśasāmyogapūrvadeśavibhāgādhodeśasāmyogādaya evārthāḥ. anukūlavypāras tu pratyayārthaḥ.

L 接辞導入規則 P3.4.69 中の〈karṭṛ〉〈karman〉という語は、それらが bhāvapradhānanirdeśa であり、さらに〈行為主体〉(karṭṛ) は〈ハタラキ〉の基体 (vyāpārāśraya) であり、〈目的〉(karman) は〈結果〉の基体 (phalāśraya) であるとするならば、ニヤヤ学派の L 接辞に関する〈努力〉表示性の確立におけると同様、それぞれ〈ハタラキ〉〈結果〉という属性を指示し得る。そしてここで ananyalabhyaśabdārtha の原理に徴し、ミーマンサー学派バーツタ派の定動詞形の分析 - dhātu の意味は〈結果〉 - に従えば〈ハタラキ〉に関しては、それをこの規則によって L の意味とみなすことが可能となるのである。

一方、〈結果〉については ananyalabhyaśabdārtha の原理に徴し、L に関してこの規則から〈結果〉に対する表示性が確立されるということは勿論できない。Kāśikā はこの点に関して、P3.4.69 の〈karman〉という語が指示する属性である〈目的性〉は〈結果の基体性〉であり、同規則はその〈結果の基体性〉

という意味でのLの導入規定でもありうるという (Kāśikā: phalasya dhātulābhyatve 'pi tadāśrayatvarūpe karmatve eva lakāravidhiḥ syāt)。

基本的にミーマーンサー学派パーッタ派は、文法規則を言語項目の〈直接的指示関係〉の把握の手段 (śaktigrāhaka) とはみなさない (2-註25参照)。そして当該規則は、「動詞接辞 - 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) 表示理論」の観点から、数接辞選択規則P1.4.21, P1.4.22と単一文 (ekavākya) を構成することによって〈行為主体〉〈目的〉に属する〈数〉の意味でのL接辞導入を規定している、と解釈される。アーパデーヴァは次のように述べている。

「[反論] 文法規則 (vyākaraṇasmṛti) P3.4.69 laḥ kartari . . . の力によって、定動詞接辞の表示対象は〈行為主体〉である。

[答え] 否である。実に言語項目とその表示対象間の表示関係 (vācyavācakabhāva) は文法規則には依存しない。その[表示関係]は[ananyalabhyaśabdārtha]の原理 (nyāya) と関係した anvaya・vyatirekaによって理解されるものだから。

あるいは[表示関係は文法]規則 (smṛti) によって理解されるものであるとしよう。それでもなお当該規則は〈行為主体〉が定動詞接辞の表示対象であるということに対する根拠たりえない。むしろ当該規則は、〈行為主体〉の単一性が[表示さるべき時]「ekavācana」というLが導入される、〈行為主体〉の双数性が[表示さるべき時]「divācana」というLが導入される、〈行為主体〉の複数性が[表示さるべき時]「bahuvācana」というLが導入される、というこのような意味に対する根拠である。なぜなら、この規則は P1.4.22, P1.4.21と単一文を構成するから。」(MNP36: na ca laḥ kartarīti vyākaraṇasmṛtibalād ākhyātavācyāḥ karteti vācyam. na hi vācyavācakabhāvo vyākaraṇasmṛtyadhinaḥ. tasya nyāyasahitānvayavyatirekagamyatvāt. bhavatu vā smṛtigamyāḥ, tathāpi neyaṁ smṛtiḥ kartur ākhyātavācyatve pramāṇam, kintu kartur ekatve ekavācanātmako lakāraḥ, dvitve divācanātmakaḥ, bahutve bahuvācanātmaka ity asminn arthe pramāṇam, dvyekayor divācanaikavācane (P1.4.22), bahuṣu bahuvācanam (P1.4.21) ity anenāsyāḥ smṛter ekavākyatvāt.)

単一文 (ekavākya) に関しては 2 - 註45参照。

21) 〈karṭ〉 〈karman〉 等の kāraka 術語は「kṛt」接辞 (P3.1.93) の導入規則においても言及されている。例えば以下の規則を見よ。

P3.4.67 kartari kṛt

P3.4.70 tayor eva kṛtyaktakhalarthāḥ 「[kṛtya] 接辞 (P3.1.96), Kta, KHaL の意味をもつ接辞は、それら両者 [〈目的〉と〈行為〉 (bhāva) (← P3.4.69)] だけが [表示されるべき時「dhātu」の後に (P3.1.91)] 導入される。」

L接辞導入規則 P3.4.69 における 〈karṭ〉 〈karman〉 という語が、〈行為主体性〉 = 〈ハタラキ〉, 〈目的性〉 = 〈結果〉 (あるいは 〈結果の基体性〉) という属性を指示するのであるならば、これらの規則においても、L接辞導入規則 P3.4.69 の場合と同様、〈karṭ〉 〈karman〉 という語は 〈行為主体性〉 = 〈ハタラキ〉, 〈目的性〉 = 〈結果〉 (あるいは 〈結果の基体性〉) という属性を指示すると解釈しなければならず、その場合には「kṛt」接辞は 〈ハタラキ〉 の基体としての 〈行為主体〉, 〈結果〉 の基体としての 〈目的〉 を表示し得ないことになるのである。

しかしながらここで、P3.4.69 における 〈karṭ〉 〈karman〉 という語は属性を表示するが、上記のような「kṛt」接辞導入規則におけるそれらは属性保持者としての 〈ハタラキ〉 の基体あるいは 〈結果〉 の基体を指示すると言うことはできない。なぜなら、P3.4.69 と上記のような「kṛt」接辞導入規則は「得失を同じくする」(tulyayogakṣema) からである。すなわち、P3.4.69 が自己以外の項目からは得られない 〈ハタラキ〉 が定動詞接辞の意味であるということを理解せしめるものであると認められるならば、同じ論理で、「kṛt」接辞導入規則 P3.4.67 も「kṛt」接辞が 〈ハタラキ〉 を意味するということを理解せしめるものである。もし、〈ハタラキ〉 は 〈含意〉 によって得られるから、P3.4.67 は「kṛt」接辞が 〈ハタラキ〉 を意味するということを理解せしめるものではないと言うならば、P3.4.69 もまた定動詞接辞が 〈ハタラキ〉 を意味するということを理解せしめるものではない、というように両規則の状況は同

じなのである。

22) 定動詞接辞 (tiñ) ・ 「kṛt」接辞ばかりでなく, 「taddhita」接辞 (P4.1.76), samāsa (複合語) にも kāraka を表示するものがある。Cf. vt.5 ad P2.3.1: tiñkṛttaddhitasamāsaḥ parisamkhyānam.

23) ミーマーンサー学派バーツタ派の見解では, 定動詞接辞は 〈ハタラキ〉を直接的に指示し, その基体としての 〈行為主体〉は 〈含意〉から得られるもの (ākṣepalabhya) である。一方 「kṛt」接辞の場合は 〈行為主体〉がその直接的指示対象 (śakya, vācya) であり, 〈ハタラキ〉は 〈含意〉から得られる。

ところでこのように, ある言語項目に関して x がそれによって直接的に指示され, その直接的指示対象である x に基づき 〈含意〉によって y が理解されるという構造が認められる時, ミーマーンサー学派バーツタ派は 〈含意〉によって理解される y に比して直接的指示対象である x の方が認識枠の中で主要なもの (pradhāna) [Darpaṇa: prādhānyaṁ mukhyaviśeṣyatvam] であると考える。

Kartradhikaraṇa (JS3.4.12-13) でクマーリラ・バツタは次のように述べている。

「もし 〈行為主体〉あるいは dhātu の意味に基づいて 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) が理解されるとするならば, 〈pācaka〉 (「料理人」) [ $\sqrt{\text{pac}}$  + ṆUL (P3.1.133)] 等の 「kṛt」接辞で終わる] 語の場合と同様, [その 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) は] その本質が隠されたものとして理解されるはずである。[ある言語項目から理解される x についてそれが] 主要なものと認識されるならば, [その x はその] 言語項目の意味であると決定される。(中略) この [ṣpacati] といった表現] においては従属するものである 〈行為主体〉がある形態で理解される。この場合この 〈行為主体〉は, 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) はその形態の [〈行為主体〉] なくしては説明が付かないから, 〈想定〉あるいは推理によって理解され得る。」 (TV (Tṛtīyo 'dhyāya) 368-9: yadi kartrā dhātvarthena ca bhāvanā gamyeta tataḥ pācakādīśabdeṣv iva tirohitasvarūpā gamyeta. prā-

dhānyapratyayāt śabdārthatvādhyavasānam. . . . yādṛśaś ca guṇabhūtaḥ kar-  
tātrāvagamya na tādṛśena vinā bhāvanopapadyata ityarthāpattyanumāna  
vā śaktā[sic] gamayitum.)

24) ミーマーンサー学派バーツタ派の「形相指示理論」によれば、言語の直接的指示対象は「普遍」(jāti, ākṛti)である。しかし |ghaṭam ānaya| といった表現において持ち来る行為 (ānayana) の対象となるのは瓶性という「普遍」ではなく具体的、個別的な瓶であるという日常経験を説明するために、直接的指示対象である「普遍」から個物は〈含意〉によって理解されると主張する。そしてこの場合は〈含意〉によって理解される個物に主要性が認められるのである。したがって言語項目から理解されるもののうち〈含意〉によって得られるものより〈直接的指示関係〉に基づいて得られるものの方が主要である、という法則は普遍妥当するものではない。

尚、直接的指示対象としての「普遍」に基づき個物が〈含意〉によって理解されるという場合のこの〈含意〉の内実についてはミーマーンサー学派内でも種々の見解がある。 Cf. BC90: jātir eva nāmārthaḥ, uktayukyā ākṣepāc ca vyaktiābhāḥ. arthāpattiḥ samānavittivedyatvaṁ vākṣepaḥ. nirūḍhalakṣaṇā vā.

### [2.3.3.2]

25) 〈直接的指示関係〉を認識する手段には、今まで議論してきた文法規則も含め、一般に次のようなものがあると言われる。

śaktigrahaṁ vyākaraṇopamāna-  
kośāptavākyaḥ vyavahārataś ca /  
vākyaśya śeṣād vivṛter vadanti  
sāṁmidhyataḥ siddhapadasya vṛddhāḥ // (NSM on k.81)

「学識者達は以下の手段によって〈直接的指示関係〉が把握されると語る。その手段とは、文法学 (vyākaraṇa) ・ 〈類比〉 (upamāna) ・ 辞書 (kośa) ・ 信頼できる人の言明 (āptavākya) ・ 表現活動 (vyavahāra) ・ 補足文 (vākya-śeṣa) ・ 〈パラフレーズ〉 (vivṛti) ・ 既知なる語の近接 (siddhapada-

sāmnidhya) である。]

ここで、定動詞接辞が〈ハタラキ〉を直接的に指示することを認識する手段として〈パラフレーズ〉(vivṛti, vivaraṇa) が取り上げられる。

なお、〈パラフレーズ〉とは、ある言語項目の意味を同義語を用いて説明することであると言われる。Cf. NSM on.k.81: vivaraṇaṁ tu tatsamānārthakapadāntareṇa tadarthakathanam; Darpaṇa: tatsamānārthakapadāntareṇa tadarthakathanasya vivaraṇatayā (「〈パラフレーズ〉とは、xの意味をxと同じ意味を持つx以外の語yによって述べることである。)]。

ところで〈パラフレーズ〉による〈直接的指示関係〉の認識には、パラフレーズ文の解釈にそれぞれの意味論が直接反映し、学派的恣意性を免れないという問題がある (Darpaṇa: vivaraṇasya svasvabodhānusāritayā)。例えば定動詞形 {pacati} は {pākaṁ karoti} というようにパラフレーズされる。このパラフレーズ文は {pāka-am  $\sqrt{kṛ}$ -ti} というように4つの要素 — 〈pāka〉 〈am〉 〈kṛ〉 〈ti〉 — に分析され得るが、これらのパラフレーズ文における要素と被パラフレーズ文 {pacati} の構成要素 — 〈pac〉 〈(a)ti〉 との対応をどのように見るかは、まさしく各学派の意味論によって異なるのである。

dhātu の意味は〈結果〉であり、定動詞接辞の意味は〈ハタラキ〉(bhāvanā) であるとするミーマーンサー学派パーッタ派によれば、{pacati} の意味は pāka-viśiṣṭa-bhāvanā (料理に限定された〈ハタラキ〉(bhāvanā)) である。したがって同派の意味論よりすれば、この意味の説明としてのパラフレーズ文におけるその構成要素 〈pāka〉は〈結果〉としての  $\sqrt{pac}$  の意味に対応し、 $\sqrt{kṛ}$  は定動詞接辞 〈ti〉の意味である〈ハタラキ〉(bhāvanā) に対応し、〈目的格接辞〉 〈am〉は語基  $\sqrt{pac}$  と接辞 〈ti〉の意味間の、それ自身語基と接辞のいずれの意味ともみなされず、むしろ両者から構成される文そのものの意味 (vākyaṛha) とみなされる限定関係 (vaiśiṣṭya, saṁsarga) に対応する。しかし {karoti} の定動詞接辞 〈ti〉は、それに対応するものが {pacati} に想定されないから特定の意味を持たず、ただ文法性の観点から形式的に使用されるもの (sādhutvārtha) とみなされる。

一方、パーニニ文法学派によれば {pacati} の意味は phala-viśiṣṭa-vyāpāra-

viśiṣṭa-āśraya (〈結果〉に限定された〈ハタラキ〉, それに限定された基体) であるから, パラフレーズ文中の〈pāka〉は $\sqrt{\text{pac}}$ の意味としての〈結果〉に対応し,  $\sqrt{k_1}$ は同じく $\sqrt{\text{pac}}$ の意味としての〈ハタラキ〉に対応し, {karoti}の定動詞接辞〈ti〉は {pacati}の定動詞接辞〈ti〉の意味とみなされる〈ハタラキ〉の基体に対応する。〈目的格接辞〉〈am〉は, カウンダ・バッタのような pṛthakśakti 論者にとっては, ミーマーンサー学派バーッタ派と同じように文の意味としての限定関係に対応し (2-註3), ナーゲーシャ・バッタのような viśiṣṭaśakti 論者にとっては, 「普遍限定個物指示理論」(jātivīśiṣṭavyaktivāda) における〈和合〉(samavāya)と同様の項目内意味関係に対応する。存在論的には, 〈結果〉は〈ハタラキ〉に〈能産者性〉(janakatā)の関係で関係する。

このようにたとえミーマーンサー学派バーッタ派が, {pacati}の定動詞接辞〈ti〉は〈ハタラキ〉(bhāvanā)を意味する $\sqrt{k_1}$ によってパラフレーズされるから, 定動詞接辞は〈ハタラキ〉を直接的に指示すると主張しても, それは異なる意味論の枠組の中では妥当性を持ち得ないのである。

なお, このような〈パラフレーズ〉の意味論における機能とその問題点は, Cardona [1975] に詳しく議論されている。

26) パラフレーズ文に上る要素はすべて有意味であるとしても, パラフレーズ文から理解される意味のすべてが被パラフレーズ項目の構成要素にそれらの意味として配当される訳ではない。すなわち, パラフレーズ文から理解される意味のすべてが被パラフレーズ項目の意味 (śabdārtha) であるということではできない。換言すれば, 言語の意味でないものもパラフレーズ文には現われ得るのである。すでに見たようにパラフレーズ文中の〈目的格接辞〉が意味するところの〈目的性〉(karmatva) —当該事例においてはそれは関係 (saṃsarga) に他ならない—は, それを配当すべき項目が被パラフレーズ項目には存しない。Cf. Kāśikā: dvitīyayāśabdārthakarmatvādivivaraṇād aśabdārthasyāpi saṃsargasya vivaraṇadarśane . . .

ミーマーンサー学派バーッタ派は, パラフレーズ文中の {karoti}の定動詞接辞〈ti〉はバーニニ文法学派が主張するように〈ハタラキ〉の基体としての

〈行為主体〉を意味するということを認めた上で、この [karoti] の定動詞接辞 <ti> によってパラフレーズされるのは [pacati] の定動詞接辞 <ti> の意味ではなく、その定動詞接辞の意味から 〈含意〉によって理解されるところの — そのようなものとしてそれは言語の意味ではない (śabdārtha) — 〈行為主体〉であると言うのである。

27) ここで複合語 (samāsa) 一般の意味論について議論することはしない。ただ複合語等の 〈統合形〉 (vṛtti) に独自の自立した 〈直接的指示関係〉 を認めるパーニニ文法学派の 〈意味統合〉 (ekārthibhāva) の立場 (小川 [1984b;1986b;1987a]) では、このような複合語における言語の意味でないもののパラフレーズといった問題は本来的に起こり得ない。したがってここでの複合語による例証は 〈統合形〉 の構成要素にそれぞれ自立した 〈指示関係〉 を認める 〈期待〉 (vyapekṣā) の立場 (小川 [1986b]) よりなされている。

Dvandava 複合語の派生は次の規則によって説明される。

P2.2.29 cārthe dvandve 「[ca] (「そして」) の意味が表示さるべき時、[意味的に結合している (P2.1.1) 二つ以上の (P2.2.24) 名詞接辞 (sUP) で終わる項目 ([pada], P2.1.4) は任意に (P2.1.11) 複合語を構成し (P2.1.3), そしてその複合語は] dvandva と呼ばれる。」

Dvandava 複合語には、<ca> の意味に応じて [sāmjñāparibhāṣam] (「術語と解釈規則」) といった集合 (samāhāra-) Dvandava と [dhavakhdirau] (「ダヴァ樹とカディラ樹」) といった相互結合 (itaretarayoga-) Dvandava の二種類がある。そして集合 Dvandava の場合、それから得られる認識の内容は [sāmjñāparibhāṣa-samāhāraḥ] (術語と解釈規則の集合) — sāmjñāparibhāṣa-viśiṣṭa-samāhāra (術語と解釈規則に限定された集合) — であり、一方相互結合 Dvandava の場合は [sahitau dhavakhdirau] (相伴しているダヴァ樹とカディラ樹) — sāhitya-viśiṣṭa-dhavakhdira (相伴に限定されたダヴァ樹とカディラ樹) — である [Cf. VSM(b)224 (Samāsaśaktinirūpaṇa)]。

ところで Darpaṇa によれば、ここにおける想定対論者の Dvandava に関する意味論は、集合 Dvandava の場合は複合語の第2構成要素 (例えば

〈paribhāṣā〉が集合を間接的に指示し (uttarapadalakṣyārthasamāhāra), 相互結合 Dvandava の場合は、複合語に添加される〈双数接辞〉が意味する双数性 (dvitva) と各構成要素の意味であるダヴァ樹とカディラ樹双方との結合に際しての、その結合の適合化 (dvitvānvayaprayojaka) という言語外の要因によって相伴 (sāhitya) が認識上に現われる、というものである。これによれば、集合 Dvandava の場合、集合は言語の意味に他ならないから、集合 Dvandava は言語の意味でない要素のパラフレーズの例にはなり得ない。

さて今相互結合 Dvandava の派生手続を示せば以下のとおりである。

{dhava-sU khadira-sU} P1.2.46 (術語「prātipadika」の適用)

dhava-ϕ khadira-ϕ P2.4.71 (名詞接辞で終わる各項目の名詞接辞の  
ゼロ代置)

〈dhavakhadira〉 + su-au-jas P2.3.46 (〈主格接辞〉導入)

+ au P1.4.22 (〈双数接辞〉「divacana」選択)

dhavakhadir-au P6.1.88 (「vṛddhi」代置)

∴ dhavakhadirau

厳密な意味での Dvandava 複合語 〈dhavakhadira〉 - 術語「samāsa」が適用される項目 - は、文 {dhavaś ca khadirś ca} に等価であり、この文は複合語 〈dhavakhadira〉の成分分析文 (vighrahavākya) ともみなし得る。そしてこの文中の二つの〈ca〉が意味するところの (vācya) あるいは標示するところの (dyotyā) 相伴 (sāhitya) あるいは〈併存〉 (samuccaya) は、それを意味する項目を複合語 〈dhavakhadira〉に持たない。なぜならその複合語の構成要素である〈dhava〉〈khadira〉の何れもそれに対する指示関係を持たないからである。こうして成分分析文中の二つの〈ca〉は言語の意味でないもののパラフレーズであるということになる。

なお上記の Darpaṇa によって提示された想定対論者の Dvandava に関する意味論をミーマーンサー学派バーッタ派に帰することはできないように思われる。同派は複合語そのものに指示関係を認めない。複合語の意味は、複合語か

ら想起される、それと意味的に等価なものともみなされる成分分析文から理解される。Cf. BC112: ahañ tu bruve — samāseṣu na śaktir na vā lakṣaṇā, kiñ tu samāsoṣṭhitavigrahavākyād eva bodhaḥ.

[2.3.4.1]

28) 二つの言語項目の対象間に不異性の関係での結合 (abhedānvaya) が成立するのは、両言語項目間に同一対象指示性 (sāmānādhikaraṇya) がある場合である。

文 |paktā devadattaḥ| 「料理人であるデーヴァダッタ」の構成要素を分析すればそれは | $\langle\sqrt{\text{pac}} + \text{tr}C\rangle + \text{sU devadatta} + \text{sU}$ | となる。すなわちこの文は、〈行為主体〉を指示する (P3.4.67) 「 $\text{kr}t$ 」接辞  $\text{tr}C$  (P3.1.133) で終わる項目 ( $\text{k}r\text{danta}$ ) に名詞接辞  $\text{sU}$  (主格・単数) が後続する項目 (subanta) と、非派生形とみなされる 〈devadatta〉 に名詞接辞  $\text{sU}$  (主格・単数) が後続する項目 (subanta) とから構成されている。

今上記の文と 〈主格接辞〉の同格表現という点で類似した文 |vīraḥ puruṣaḥ| (「勇敢なるひと」:  $\langle\text{vīra} + \text{sU puruṣa} + \text{sU}\rangle$ ) を見よ。この文の派生は Vārttika 1-2 ad P2.3.46 に従って次のように説明される (Cardona [1974: 248-9])。

この文においては限定関係 (viśeṣaṇaviśeṣyabhāva) が表現されている。しかしこの限定関係は文の意味 (vākyārtha) であるから、P2.3.46 「prātipadika」の意味だけが表示さるべき時 〈主格接辞〉が導入される」(prātipadikārthamātre prathamā) によって「prātipadika」〈vīra〉〈devadatta〉それぞれに 〈主格接辞〉が導入される。Cf. LŚ on SK ad P2.3.46: yady api viśeṣyaviśeṣaṇabhāvo 'py adhiko bhāṣate tathāpi tasya vākyārthatvena bahiraṅgatayā na svārthamātranimitaka *prathamapravṛttasaṁskārabādhakatvam iti bodhyam.*

[prathamapravṛttasaṁskāra (最初に起こる派生手続) とは 〈主格接辞〉導入を指す。]

しかし当該文 |paktā devadattaḥ| の場合は、〈paktṛ〉〈devadatta〉に P2.3.46によって直接的に 〈主格接辞〉導入をはかることはできない。|paktā|

は「kr̥t」接辞で終わる項目であり、被限定者 (viśeṣya) を供給する <devadatta> の後の名詞接辞は、<行為主体> は trC により abhihita であるから、P2.3.46 により <主格接辞> に特定される。P2.3.1 anabhihite の原理に基づき P2.3.18 kartṛkaraṇayos ṛtīyā による <具格接辞> は選択されない。そして <pakṛṭ> の後には viśeṣyasāmānādhikarāṇya (小川 [1984c] により <主格接辞> が導入される。

このような派生手続きの違いが同じ同格構文 {vīraḥ puruṣaḥ} {paktā devadattaḥ} の間にも見いだされるが、両文ともに文の意味として限定関係を表現しているという点では共通である。

限定関係には差異 (bheda) に基礎を置く関係によるものとそうでないものとの二種類があるが、ここでは <pakṛṭ> <devadatta> の両項目とも <主格接辞> という同一種の接辞 (samānavidhakti) に後続されることから、両項目の指示対象間には <不異性> に他ならない限定関係があることが理解される。したがってこの文から得られる認識内容は {pākakartrabhinno devadattaḥ} (Parīkṣā: 「料理の <行為主体> と不異なるデーヴァダッタ」) というパラフレーズによって表現される。Cf. Candrakalā on ibid.: viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ paraṁ dvidvidhaḥ. yatra bhedaḥ saṁsargatayā bhāṣate tatra tatsambandhāvachchinnaḥ samānavibhaktikanāmārthayor yatrānvayas tatretarasambandhānavachchinnaḥ. (「しかしながら、限定関係には二種類ある。<差異> が関係 (saṁsarge) として顕現する場合には、[限定関係は] その [差異] という関係 (sambandh) により局限される。同一種の接辞を後続する名詞語幹 (nāman) の意味の間に結合がある場合には、[限定関係は上の場合とは] 異なり関係により局限されない。)[<不異性> が関係 (saṁsarga=sambandha) であるとするならば、P2.3.50により <属格接辞> が生起する。\* {paktuḥ devadattaḥ} ]

このように名詞語幹 (「prātipadika」, nāman) における <同一種接辞後続性> (samānavibhaktikatva) を保障するものは二つの項目間の同一対象指示性であり、それらの対象間の不異性である。ナーゲーシャ・バッタはこの同一対象指示性と <同一種接辞後続性> との関連を次のように説明している。

「同一対象指示性とは二つ以上の語が単一の対象を被限定者として知らしめることである。もし「二つ以上の語が」異なれる〈直接的指示関係〉をもつならば、〈直接的指示関係〉の差異に基づき「それぞれの」対象も差異することになるから対象の同一性は破壊されるであろう。それゆえ、被限定者と不異なる限定者「を表示する語」は必ず被限定者「を表示する語」と同一の〈直接的指示関係〉をもつという必然性（niyama）が成立するから、「同一対象指示性がある場合には限定者を表示する語に」まさしく被限定者「を表示する語」との〈同一種接辞後続性〉がある。」（Uddyota on Mbh ad P2.3.1: *sāmānādhikarāṇyaṁ nāma anekasya padasya viśeṣyatayaikārthabodhakatvaṁ, yadi bhinnaśaktitvaṁ syāt tadā śaktibhedenārthasyāpi bhedād ekārthatvaṁ bhajyeta. tasmād viśeṣyasamānaśaktikatvaṁ tadabhinnaviśeṣāṇām iti niyamāt tatsamānavibhaktikatvam eva.*）

ところで〈同一種接辞後続性〉は指示対象間の不異性の認識に対する支配的決定要因ではない。すなわち、〈同一種接辞後続性〉がある時には指示対象間に不異性が認識されるが、指示対象間の不異性の認識は〈同一種接辞後続性〉が見いだされない場合にも生起し得るのである。

[*devadattaḥ pacati*] において定動詞接辞〈*ti*〉と〈*devadatta*〉の指示対象間の同一対象指示性は、次の〈人称接辞〉選択規則が前提するものである。

P1.4.105 *yuṣṁady upapade samānādhikarāṇe sthāniny api madhyamaḥ*

P1.4.107 *asmady uttamaḥ*

P1.4.108 *śeṣe [upapade samānādhikarāṇe sthāniny api] prathamaḥ*  
 「〔*yūṣmad*〕〈*asmad*〕以外の項目が共起項目（*upapada*）であり、それが〔L接辞と〕指示対象を同じくする時、たとえその共起項目は現実には運用されなくても（*sthāniny api*）、「*prathama*」接辞（P1.4.101）が導入される。」

この規則から明らかのように、L接辞（その代置要素〈*ti*〉）と〈*devadatta*〉の間には同一対象指示性があり、したがって両項目の指示対象間には不異性が認識されるのにもかかわらず—認識内容パラフレーズ： [*devadattābhinnaikakarṭṛko vartamāno vyāpāraḥ*]（*Darpaṇa*: 「デーヴァダッタと不異な

る単一の〈行為主体〉を有する現時の〈ハタラキ〉) —, 両項目間には〈同一種接辞後続性〉は見いだされない。

29) ① {somena yajeta} — このヴェーダの教令 (vidhi) は、ミーマーンサー学派パーッタ派の解釈によれば、複合体教令 (viśiṣṭavidhi) であり、〈soma〉という語に matvarthalakṣaṇā ( taddhita 接辞 matUP で終わる項目の意味に対する〈間接的指示関係〉) を想定することによって、ソーマを有する供儀 (somavad-yāga) が教令されていると解釈される。すなわち、同派の教令理論によれば同文は {somavatā yāgeneṣṭām bhāvayet} (「ソーマを有する供儀によって所期のものを生ぜしむべし」) とパラフレーズされる。したがってこの文からは〈soma〉という語の間接的指示対象である〈ソーマを有するもの〉 (somavat) と dhātu √yaj の意味である供儀 (yāga) の不異性が理解される。Cf. MNP6: yathā somena yajeta ityatra somayāgayor aprāptatvāt somaviśiṣṭayāgavidhānam somavatā yāgeneṣṭām bhāvayet iti. na cobhayavidhāne vākya-bhedaḥ, viśiṣṭasyaikatvāt. viśiṣṭavidhau ca matvarthalakṣaṇā. somapadena matvartho lakṣyate — somavateti.

② {stokaṁ pacati} — この文は文字どおりには「彼は少なく (stokam) 料理している」ということである。〈stoka〉という語の指示対象は、dhātu √pac の意味である〈結果〉としての〈軟化〉に対する限定者であり、その〈軟化〉に不異なるものとして結合する。したがってこのことによってこの文からは、少ない軟化あるいは軟化の程度が小さいことが知られる。Cf. Kāśikā: atra stokapadārthasya dhātvarthaphale 'bhedenānvayaḥ.

以上①と②はいずれも kriyāviśeṣaṇa (〈行為〉に対する限定者) である。これらにおいて〈同一種接辞後続性〉がないことは明白である。kriyāviśeṣaṇa についてその派生上の問題が小川 [1984c] に論じられている。

③ {rājapurusaḥ} — この例はニヤーヤ学派の立場から提示されている (Darpaṇa: naiyāyikamatena cedam)。複合語自体に自立した〈直接的指示関係〉を認めるパーニニ文法学派の立場では複合語の構成要素対象間の関係等は問題となり得ない (2-註27)。ニヤーヤ学派の立場では文 {rājñāḥ purusaḥ}

(rājan + Ņas puruṣa + sU)に等価な複合語〈rājapuruṣa〉(P2.2.8「tatpuruṣa」)の先行要素〈rājan〉は、王との関係項(rājasambandhin)を間接指示し、それが〈puruṣa〉の指示対象と不異なるものとして結合する。Cf.NSM on k.82ab: tatpuruṣe tu pūrvapade lakṣaṇā . . .tasmād rājapadādau rājasambandhini lakṣaṇā, tasya ca puruṣeṇa sahābhedānvayaḥ. よってこの複合語から得られる認識の内容は {rājasambandhyabhinnapuruṣaḥ} (Kiraṇāvalī: 「王との関係項と不異なる家臣」) というパラフレーズによって明示される。

この例では、名詞接辞そのものが実現形に存在しない。複合語においては各「pada」({rājñāḥ} {puruṣaḥ})の接辞(Ņas, sU)はP2.4.71によりゼロ位置される。

### [2.3.4.2]

30) クマーリラ・バッタは〈piṅgākṣī〉等の〈語源形〉(yaugika), 〈vaiśvadevī〉等の「taddhita」接辞で終わる項目の表示対象に関して、それらが〈実体〉を直接表示することを次のように述べている。

〈語源形〉に関して：TV ad JS3.1.12 (Aruṇādhikaraṇa) –  
 bahuvrīhisamāso 'yaṁ matubarthe vidhīyate /  
 so 'syāstīti ca sambandhe matvarthīyaḥ pravartate //

「この〔〈piṅgākṣī〉等の〕Bahuvrīhi 複合語は、matUP 接辞(P5.2.94)の意味で〔その派生が〕規定されている(P2.2.24)。そして〔matUP 接辞はP5.2.94において〕【x (ṣaḥ) と y (ḥa-sya) との間に関係 (ḥa-sya) がある時、その x を表示する項目の後に関係の意味で導入される】(so 'syāstīti) というように〔規定されている〕。〔したがってこの〕 matUP 接辞の意味をもつ〔Bahuvrīhi 複合語は〕関係(sambandha)の領域に生起する。」

このように〈piṅgākṣī〉等のBahuvrīhi 複合語が文法規則上関係を表示することを認めた上で、さらに次のようにそれが関係ではなく関係の基体としての〈実体〉を表示すべきことを主張する。

sarvatra yaugikaiḥ śabdair dravyam evābhidhīyate /  
 na hi sambandhavācyatvaṁ sambhavaty atigauravāt //

「どの場合にも語源上の意味を保持している語 (yaugika-śabda) はまさに〈実体〉を表示する。実に [それらが] 関係を表示することはあり得ない。過剰な重さがあるから。」

sāmbandhinaiva sāmbandhaḥ pratyetuṁ yadi śakyate /  
punas tasyābhidhāśaktiṁ kaḥ śruteḥ parikalpayet //

「もし関係項 (sāmbandhin) そのものによって関係が理解され得るならば、一体誰が明言 (śruti) にその [関係] に対する表示能力を改めて想定しよう。」

〈vaiśvadevi〉に関して：TV ad JS2.2.23 (Guṇādhikaraṇa) –  
naiva hi dravyamātrasya taddhitair devatocyate /  
asyaśabdābhidheyasya viśeṣasyaiva devatā //

「実に [aṅ (P4.2.24) 等の] 「taddhita」接辞 [で終わる項目] によっては〈実体〉一般と関係せる神格 (devatā) は決して表示されない。[[taddhita] 接辞で終わる項目によっては P4.2.24 中の] {asya} という語によって指示されるまさに特殊 [〈実体〉] と関係せる神格が [表示される]。」

āmikṣāṁ devatāyuktāṁ vadaty evaiṣa taddhitaḥ /  
āmikṣāpadasāṁnidhyāt tasyaiva viṣayārpaṇam //

「[[vaiśvadevy āmikṣā] (「ヴィシュヴァ・デーヴァ群神に献上される凝乳」) における] まさにこの [〈vaiśvadevi〉の] 「taddhita」接辞は [ヴィシュヴァ・デーヴァ群神という] 神格と結びついた凝乳 (āmikṣā) を指示する。〈āmikṣā〉という語の近接からまさにその [[taddhita] 接辞] の対象が供給される。」

śrutyaivopapadasyārthaḥ sarvanāmnābhidhiyate /  
tadarthas taddhitenaivaṁ trayāṇām ekavācātā //

「まさに [P4.2.24 中の] 「sarvanāman」 [ {asya} という] 明言によって共起項目の意味が表示される。[そして] 「taddhita」接辞はその [[sarvanāman] の] 意味を [表示する]。このように [共起項目・「sarvanāman」・「taddhita」接辞の] 三者は表示対象を同じくする。」

tena yavāmikṣā saiva devatāsāmbandhaṁ yāsyatīty evam uktā satī vaiśvadevīśabdenocyate.

「それゆえ、『凝乳であるもの、その同じものが神格との関係を引受るであろう』とこのように表現されるから〔凝乳であるもの（〈実体〉）、それが〕〈vaiśvadevī〉という語によって指示される。」

P2.2.24, P4.2.24 については次註に詳説。

31) ① 〈piṅgākṣī〉は, Bahuvrīhi 複合語 〈piṅga-akṣi〉に samāsānta 「taddhita」 ŚaC (P5.4.113)が添加された語形〈piṅgākṣa〉にさらに女性接辞 ŅiṢ (P4.1.41)が添加された語形である。

〈piṅgākṣī〉 = {piṅge akṣṇī yasyāḥ}

{{(piṅga + au akṣi + au) + ŚaC} + ŅiṢ} [sup-luk (P2.4.71); /i/-lopa (P6.4.148); /a - a/ → /ā/ (P6.1.101)]

Bahuvrīhi 複合語の派生は次の規則によって規定されている。

P2.2.24 anekam anyapadārthe 「〔構成要素〕以外の「pada」(P1.4.14)の意味が表示さるべき時, [意味的に結合している (P2.1.1)] 二つ以上の (P2.2.24) [名詞接辞 (sUP) で終わる項目 (「pada」, P2.1.4) は任意に (P2.1.11) 複合語を構成し (P2.1.3), そしてその複合語は bahuvrīhi と呼ばれる (P2.2.23)].」

この規則における anyapadārtha (構成要素以外の「pada」の意味) とは, 具体的には成分分析文において言及される構成要素である 〈主格接辞〉で終わる項目以外の, 例えば {yasya} {yasmin} といった 〈属格接辞〉 〈於格接辞〉で終わる項目の接辞 — 〈属格接辞〉 〈於格接辞〉 — の意味である (SK: aprathamāvibhaktyartha)。なぜなら, 名詞接辞で終わる項目「pada」においては語基の意味に対して接辞の意味が主要なものであるからである。Cf. LŚ on SK ad P2.2.24: anyatvaṁ copasthitasamasyamānaprathamāntāpeḥsam. tacca yasya yasminn ityādi . . . yady api padena prakṛtyarthopasarjanaḥ kriyākār-akabhāvādisambandharūpo vibhaktyarthaḥ prādhānyena abhidhīyate. . .

こうして当該の Bahuvrīhi 複合語 〈piṅgākṣa〉から得られる認識の内容は, この事例において 〈属格接辞〉は関係 (sambandha) を意味するから (P2.3.50), {piṅgākṣa-sambandhaḥ} (「赤い両目との関係」) — piṅgākṣa-viśiṣṭa-

sambandha (赤い両目に限定された関係) — というパラフレーズによって表現される。この複合語は関係を表示し、そしてこの関係はその表示対象において主要なるものすなわち被限定者の地位を占める。

② <vaiśvadevī> はヴィシュヴァ・デーヴァ群神を意味する <vaiśvadeva> (それ自身 Karmadhāraya 複合語 (P2.1.57)) に「taddhita」接辞 aṅ が添加された語形 <vaiśvadeva> にさらに女性接辞 ŅiP (P4.1.15) が添加された語形である。

<vaiśvadevī> = {viśve devā devatā asyāḥ}  
{vaiśvadevāḥ aṅ}

{(((viśva + Jas deva + Jas) + Jas) + aṅ) + ŅiP} [sup-luk (P2.4.71); //  
→ /ai/(P7.2.117); /a/-lopa (P6.4.148)]

この事例における「taddhita」接辞 aṅ の導入は次の規則によって規定されている。

P4.1.82 samarthānām prathamād vā

P4.2.24 sāsya devatā 「意味的に結合している神格 (devatā) を意味する項目 x ( {sā} ; <tad> Nom.sg.fem.) と y ( {asya} ; <idam> Gen.sg.) のうち規則中に最初に言及されている項目 x の後に、 {asya} の意味で、任意に aṅ (P4.1.83) が導入される。」

この「taddhita」接辞 aṅ の導入の条件である「 {asya} の意味」とは、それにおける {asya} は <属格接辞> で終わる項目であるから、接辞の意味の主要性に基づき、<属格接辞> の意味である関係を指す (Kāśikāvṛtti: asya ity ṣaṣṭhyarthe)。つまり「taddhita」接辞 aṅ はこの事例において関係を意味するのである。したがってこの「taddhita」接辞 aṅ で終わる語形 <vaiśvadeva> は、vaiśvadeva-viśiṣṭa-sambandha (ヴィシュヴァ・デーヴァ群神に限定された関係) を表示する。

32) マーダヴァは Aruṇādhikaraṇa (JS3.1.12) を次のようにまとめている。

krīṇāty aruṇayety etat saṁkīrṇaṁ vā krayaikabhāk /  
krayeṇānanvayāt kīrṇaḥ sarvadravyeṣu raktimā //  
dravyadvārā kraye yogāt tadbhāge cānvayaḥ punaḥ /  
sākṣāt kraye guṇasyārthād dravye saṁmihite tv asau // (JNM112)

〔対象文〕 [aruṇayā piṅākṣyaikahāyanyā somaṁ krīṇāti]。〔疑問〕 この〔文中の〈赤さ〉という〈徳〉は文脈から得られるすべての〈実体〉に〕ばらまかれるのかそれとも購買だけに与るのか。〔想定見解〕〈赤さ〉は購買〔行為〕に結びつきえないから、〔文脈から得られる〕すべての〈実体〉にばらまかれる。〔確定見解〕しかし〔〈赤さ〉は〕〈実体〉を通じて購買に結合するから、その〔購買〕の部分に結びつく。そしてこの〔〈赤さ〉という〕〈徳〉〔の結合〕は〔aruṇayā〕というように〈具格接辞〉で終わる語形によって表現されているから〕購買に対しては直接的であり、近在している〈実体〉に対しては〈想定〉に基づくものである (arthāt=arthāpattya)。

## 【文 (dhātu + tiṅ) の意味】

[2.4.0] [導入] [ $\sqrt{\text{pac}} \cdot \text{ti}$  といった] 形態素 (pada) の意味を以上のよ  
うに確定し, [バットージ・ディークシタは] 次に [それら形態素から構  
成される {pacati} といった] 文 (vākya) の意味を「〈結果〉に対して」  
(phale) 云々というように確定する。〈軟化〉等の〈結果〉に対して, と  
いうことである。

[2.4.1] tiṅ の [表示する] 意味は, 〈行為主体〉〈目的〉〈数〉 (sainkhyā)  
〈時間〉 (kāla) であり, このうち 〈行為主体〉と〈目的〉は [それぞれ  
dhātu の意味である] 〈ハタラキ〉と〈結果〉に対する限定者 (viśeṣaṇa)  
である<sup>33)</sup>。

[2.4.2.1] 〈数〉は [tiṅ が] 〈行為主体〉 [を標示する] 接辞 [と共表現  
される] 場合, 〈行為主体〉に対する [限定者] であり, [同じくそれが]  
〈目的〉 [を標示する] 接辞 [と共表現される] 場合は, 〈目的〉に対する  
[限定者] である<sup>34)</sup>。なぜなら, [〈数〉と〈行為主体〉〈目的〉は] 同一  
接辞から得られるもの (samānapratyayopātta) だからである<sup>35)</sup>。

そしてそのような場合, 定動詞接辞の意味である〈数〉を PRAKĀRA  
とする認識に対して, 定動詞接辞より生ずる 〈行為主体〉〈目的〉の想起  
(upasthiti) が原因である (ākhyātārthasainkhyāprakāarakabodhaṁ prati  
ākhyātajanyakartṛkarmopasthitir hetuḥ), という因果関係 (kāryakāraṇa-  
bhāva) が結果する<sup>36)</sup>。

[2.4.2.2] ニヤーヤ学徒等にとっては定動詞接辞の意味である〈数〉は  
まさに〈主格接辞〉で終わる項目の意味 (prathamāntārtha) に結合する  
から, [彼らは] 定動詞接辞の意味である〈数〉を PRAKĀRA とする認  
識に対して, 〈主格接辞〉で終わる「pada」から生ずる想起が原因である  
(ākhyātārthasainkhyāprakāarakabodhe prathamāntapadajanyopasthitir

hetuḥ), という因果関係を主張すべきである。[しかし] この [因果関係] も, {candra iva mukhaṁ dr̥śyate} (「月のごとき顔が見える」) {devadatto bhuktvā vrajati} (「デーヴァダッタは食べてから行く」) 等においては, [その後]に <主格接辞> が後続する] <candra> (「月」) ・Ktvā 接辞で終わる項目の意味は定動詞接辞の意味と結合しないから, <他に対する非限定者性> (itarāviśeṣaṇatva) を包含する。したがって [この因果関係には] 過剰な重さがある<sup>37)</sup>。この [ニヤーヤ学派の因果関係に指摘される重さ, そしてそれに比してのパーニニ文法学派の因果関係の軽さ (lāghava)] も <行為主体> と <目的> が定動詞接辞の意味であるということに対する根拠である。

このことは Vaiyākaraṇabhūṣaṇa に明らかである。

[2.4.3.1] 一方 <時間> は, <ハタラキ> に対する限定者である。すなわち, P3.2.123 vartamāne laṭ に支配規則 [P3.1.91 dhātoḥ] から {dhātoḥ} という [語] が得られる。そしてこの [{dhātoḥ} の <dhātu> という語] は [〈結果〉 と <ハタラキ〉 という] dhātu の意味を意図しており<sup>38)</sup>, さらに [それら <結果〉 と <ハタラキ〉 の両者のうち dhātu から生ずる認識においては <ハタラキ〉こそが] 主要なものであるから, <ハタラキ〉こそを把握せしめる。したがってその [〈時間〉] はその [〈ハタラキ〉] のみ結合する。

[2.4.3.2] [反論] <数> と同様, [〈時間〉] は まさに <行為主体> と <目的> に結合するのではないか。

[答え] このように疑ってはならない。なぜなら, すでにその <ハタラキ> (bhāvanā) が過去している [現在する] <行為主体> に関して, {pacati} (「彼は今料理している」 √pac 3.sg.pres.P.) という [表現] が結果して, [望ましい] {apākṣīti} (「彼は料理した」 √pac 3.sg.aor.P.) という [表現] が結果しないことになり, さらに料理 [〈行為〉] が開始されていないという条件下で [現に今] <行為主体> が存在する時, {pakṣyati} (「彼は

料理するであろう」(3.sg.fut.P.) という [表現] が結果しないことになるからである。

また〈結果〉にもその〔時間〕は結合しない。なぜなら、〈結果〉が生起していないという条件下で [現に今] 〈ハタラキ〉が存在する時に、[pacati] という [表現] が結果しないことになるからであり、さらに [pakṣyati] という [表現] が結果することになるからである<sup>39)</sup>。  
このように〔時間〕の限定対象については] 心すべきである。

[2.4.3.3] [反論] [もし〈時間〉が〈ハタラキ〉と結合するとするならば] 関節炎 (āmavāta) で体のいうことがきかない者に関して、[そのような] 体を起こすのに資する〈努力〉 (utthānānukūlayatna) が [現に今] 存在することに基づいて、[utthiṣṭhati] (「彼は今起きつつある/起きようとしている」) という言語運用 (prayoga) が結果することになろう。[しかし我々の見解では、〈時間〉は〈結果〉と結合するから、そのような言語運用は結果しない。その時〈結果〉は生起していないのであるから。]<sup>40)</sup>。

[答え] 否である。なぜなら他者の〈努力〉は [知覚によっては] 知られず、したがって [そのような] 言語運用は起こりえないからである。

さらに [推理に基づき彼の] 何等かの動作 (ceṣṭā) 等を通じて彼の [〈努力〉] が理解される場合には、「彼は今起きようとしているが、〈能力〉がないために〈結果〉がまったく生じていない」というように知るのが普通であり、したがって [彼に対するそのような言語運用は] 望ましいからである<sup>41)</sup>。

[2.4.4.1] 以上のように、[〈行為主体〉〈目的〉〈数〉〈時間〉といった] tiṅ の [表示する] 意味は限定者に他ならず、[それに対して] 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) [という dhātu の意味] こそが主要なるもの [すなわち被限定者] である<sup>42)</sup>。

[2.4.4.2] たとえ語基の意味と接辞の意味のうち、まさに接辞の意味の方に主要性があること (prakṛtipratyayārthayoḥ pratyayārthasyaiva prādhānyam) が他の [〈pakṛ〉 ( $\sqrt{\text{pac}} + \text{tr}C$ ) 等の] 事例において見られるとしても、\*「定動詞形とはそれにおいて〈行為〉が主要なものであり、名詞変化形とはそれにおいて〈もの〉が主要なものである」(bhāvapradhānam ākhyātaṁ sattvapradhānāni nāmāni) という Nirukta [1.1], および P1.3.1 (bhūvādisūtra) 等における〈行為〉の主要性を理解せしめる Bhāṣya [の権威] によって、dhātu の意味である〈ハタラク〉に主要性のあることが決定される<sup>43)</sup>。

[2.4.4.3] さらに定動詞接辞の意味に主要性があるとすれば、[〈devadattaḥ pacati〉等において] その[定動詞接辞の意味とみなされる〈行為主体〉]は、デーヴァダッタ等にそれと異なるものとして結合するから、〈主格接辞〉で終わる項目に主要性が結果することになる<sup>44)</sup>。そしてそのような場合、[paśya mṛga dhāvati] (「見よ! 鹿が走っている」) [という文]に Bhāṣya により確立されている〈単一文性〉(ekavākyatā) がないことになろう<sup>45)</sup>。なぜなら、〈主格接辞〉で終わる [〈mṛga〉が表示する] 鹿は走る〈行為〉(dhāvanakriyā) に対する被限定者となり、それが見るという〈行為〉に対して〈目的〉であるということになれば、[〈mṛga〉の後に]〈目的格接辞〉(dvitīyā) [の生起が] 結果することになるからである<sup>46)</sup>。

[反論] このよう [に 〈mṛga〉の後に 〈目的格接辞〉が生起可能] な場合、〈主格接辞〉で終わる項目以外との同一対象指示性に基づき [ $\sqrt{\text{sr}}$ の後に] 接辞 ŚatR [の生起] が帰謬する。[したがってその場合には] dhāvati という定動詞接辞で終わる項目が得られないことになるから、〈mṛga〉の後に〈目的格接辞〉が生起することはない。<sup>47)</sup>

[答え] 否である。たとえこのように [接辞 ŚatR の生起が帰謬するから、〈mṛga〉の後に〈目的格接辞〉が生起することはない] といったところで、[〈mṛga〉の後に]〈目的格接辞〉が生起することは回避し難く、し

たがって {paśya mṛgo [dhāvati]} という文そのものの [派生は] 不可能なことになるからである<sup>48)</sup>。

[反論] {paśya} (「見よ!」) に対して {tam} (「あれを」) というように [そのの] <目的> [を指示する項目] が補給さるべきである。

[答え] 否である。なぜなら [そのような場合には] <文分割> (vākyabheda) が帰謬するからからであり、さらに [ {paśya mṛgo dhāvati} によっては] 見る [〈行為〉] (darśana) に対して, [鹿ではなくそのの] \*非凡なる, ある特別の走る 〈行為〉 こそが 〈目的〉 として結合することが伝えようと意図されており, したがって補給がなされた場合には [そのような] 結合が得られないという結果になるからである<sup>49)</sup>。

[2.4.4.4] そして以上のような場合, 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) を PRAKĀRA とする認識に対して, 〈主格接辞〉で終わる名詞項目から生ずる〈想起〉が原因である (bhāvanāprakārabodhe prathamāntapadajanyopasthitih kāraṇam)<sup>50)</sup>, というニヤーヤ学徒の [発する] 雑音を気にとめる必要はない。

むしろそうではなくて, 定動詞接辞の意味である 〈行為主体〉を PRAKĀRA とする認識に対して, dhātu から生ずる 〈想起〉が, 〈ハタラキ性〉に局限されているものに [存する] 〈対象性〉 [の関係] で, 原因である (ākhyātārthakartṛprakārabodhe dhātujanyopasthitir bhāvanātvāvachhinnaṣayatayā kāraṇam), というように因果関係が理解さるべきである<sup>51)</sup>。

一方, 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) を PRAKĀRA とする認識に対しては, [〈pācaka〉 〈pakṛ〉 などの 「kṛt」接辞で終わる項目において] 「kṛt」接辞から生ずる 〈想起〉 [が原因であるの] と同じように, dhātu の意味である 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) の 〈想起〉もまた原因である。{paśya mṛgo dhāvati} {pacati bhavati} (「料理 〈行為〉 が存在する」) 等 [の表現] に随順して [このような因果関係も想定さるべきである], というのが一般的な議論の方向である<sup>52)</sup>。

[2.4.5.1] そして以上のように [定動詞接辞の意味である〈行為主体〉等が dhātu の意味に対する限定者であり、定動詞接辞の意味である〈数〉は、定動詞接辞の意味である〈行為主体〉等に対する限定者である] 場合、  
 {pacati} (「彼は料理している」) というこの [表現] においては、{ekāśrayikā pākānukūlā bhāvanā} (「単一なる基体に存する、料理 [= 軟化] をもたらず [現在に属する] 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) 」) という認識が得られ、  
 {pacyate} (「それが料理されている」) というこの [表現] においては、  
 {ekāśrayikā yā viklittis tadanukūlā bhāvanā} (「単一なる基体に存する軟化、それをもたらず [現在に属する] 〈ハタラキ〉 (bhāvanā) 」) という認識が得られる。そして [{devadattaḥ pacati} {taṇḍulaḥ pacyate} (「米が料理されている」) というように] 〈devadatta〉等の語が使用される場合には、定動詞接辞の意味である〈行為主体〉等とその [〈devadatta〉等の語の] 意味は不異なるものとして結合する<sup>53)</sup>。

[2.4.5.2] {ghaṭo naśyati} (「瓶が減しつつある」) というこの [表現] においても、{ghaṭābhinnāśrayako nāśānukūlo vyāpāraḥ} (「瓶と不異なる基体に存する、〈滅〉をもたらず 〈ハタラキ〉」) という認識が得られる。そしてこの 〈ハタラキ〉 は、pratiyogitva に限定された、〈滅〉をもたらず 〈原因集合〉 (nāśasāmagrī) の集結 (pratiyogitvaviśiṣṭanāśasāmagrī-samavadhāna) である<sup>54)</sup>。まさにこのゆえに、そのような [〈原因集合〉が] 現在する時、{naśyati} (「それは減しつつある」) という言語運用があり、それが過去している時には {naṣṭaḥ} (「滅した」) という言語運用があり<sup>55)</sup>、それが将来起こるものである場合には {nakṣyati} (「それは滅するであろう」) という言語運用がある。

[2.4.5.3] {devadatto jānāti} (「デーヴァダッタは認識している」)  
 {devadatto icchati} (「デーヴァダッタは欲求している」) 等の [表現] においては {devadattābhinnāśrayako jñānecchādyanukūlo varttamāno

vyāpāraḥ] (「デーヴァダッタと不異なる基体に存する、知識・欲求等をもたらす、現在に属する〈ハタラキ〉)」という認識が得られる。そしてその〔〈ハタラキ〉〕はつまるところ〈基体性〉に他ならない。このように推知すべきである<sup>56)</sup>。

### 【註解 5】

\* c, e, f, g=j, h, k, l: . . . niruktād bhūvādisūtrādistha . . . bhāṣyāc ca (g=j: niruktāt). b, i: . . . iti niruktabhūvādisūtrastha . . . bhāṣyābhyām.

\* c, e: utkaṭadhāvanakriyāviśayasyaiva. 他は . . . viśeṣasyaiva.

#### [2.4.1]

33) Cf. Darpaṇa: ādhārādheyabhāvasambandhena prakārāv ity arthaḥ. kartariprayoga (動詞接辞が〈行為主体〉を指示する表現, 「能動表現」) {pacati|} においては, その対象において karṭṛ-viśiṣṭa-vyāpāra (〈行為主体〉に限定された〈ハタラキ〉) という構造が見られ, 〈行為主体〉は〈ハタラキ〉に「所依性」(ādheyatā) の関係で関係する。一方 karmaniprayoga (動詞接辞が〈目的〉を指示する表現, 「受動表現」) {[odanaḥ] pacyate|} においては, その対象において karma-viśiṣṭa-phala (〈目的〉に限定された〈結果〉) という構造が見られ, 〈目的〉は〈ハタラキ〉に「所依性」(ādheyatā) の関係で関係する。

#### [2.4.2.1]

34) 次の規則を見よ。

P3.1.67 sārva dhātuke yak「〔〈行為〉(bhāva) と〈目的〉を表示する (P3.1.65)] 「sārva dhātuka」(P3.4.113) が後続する時 [[dhātu] の後に (P3.1.91)] yaK が導入される。」

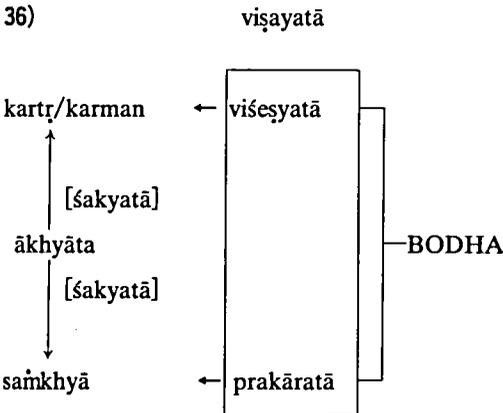
P3.1.68 kartari śap「〈行為主体〉を表示する [[sārva dhātuka] が後続する時 [dhātu] の後に] ŚaP が導入される。」

{pacyate|} の派生においては  $\sqrt{\text{pac}}$  の後への yaK 導入は, tiÑ <te> (← ta:P3.4.79) が〈目的〉あるいは〈行為〉(bhāva) を表示するということを前提し, {pacati|} の派生における  $\sqrt{\text{pac}}$  の後への ŚaP 導入は, tiÑ <ti> が〈行

為主体) を表示するというを前提する。vikaraṇa と呼ばれるこれら yaK・ŚaP 等の接辞は tiÑ の意味に対する標示者 (dyotaka) である。Cf. VM (VSK), k.3.

35) この samānapratyayopātta に基づく〈数〉と kāraka の限定関係の想定は、ミーマーンサー学派において祭式の構成要素間の主従関係を規定する「関係儀軌」(viniyogavidhi) の補助手段の一つとみなされる「同一能説明言」(samānābhidhānaśruti) の考えと同一である。Cf. MNP31: paśunā yajetety atraikatvapumstvayoḥ samānābhidhānaśrutyā kārakāṅgatvam. yajetety ākhyātābhīhitasamkhyāyā bhāvanāṅgatvaṁ samānābhidhānaśruteḥ. 同一項目の対象間の結合は異なる項目の対象間の結合に比して内的 (antaraṅga) である。Cf. VBh on k.2: kartṛkarmaṇoḥ samānapadopāttatvena antaraṅgatvena anvaye . . .

〈数〉が tiÑ の意味であることは、〈数接辞〉選択規則 P1.4.21 bahuṣu bahuvacanam 「複数性が表示さるべき時「bahuvacana」が導入される」、P1.4.22 dvyekayor dvivacanaikavacane 「双数性・単数性が表示さるべき時「divavacana」・「ekavacana」が導入される」より明らかである。



一般に文の意味の認識 (vākyārthabodha) である śābdabodha (言語的認識) に対する原因は、文を構成する項目の対象の認識・想起 (padārthopasthiti) である。そして文の意味の認識は文の意味に対して〈対象性〉 (viṣayatā) の関係で関係するが、文を構成する各項目の対象の一つに対しては〈被限定者性〉 (viśeṣyatā) という〈対象性〉の関係で、他のその対象を限定するもの (viśeṣaṇa) とみなされる対象に対しては PRAKĀRATĀ という〈対象性〉の関係で関係する。当該事例では、文の意味 — saṃkhyā-viśiṣṭa-kartṛ/karman (〈数〉) に限定された〈行為主体〉 / 〈目的〉 — の認識における〈被限定者〉 — 〈行為主体〉 / 〈目的〉 — と PRAKĀRA — 〈数〉 — を供給するものは、共に同じ定動詞接辞から生ずるその対象の認識・想起である。このような考えが同一項目の対象間に関して成立するのは、同一項目に複数の対象のそれぞれに対する〈直接的指示関係〉が想定されるからに他ならない。Cf. NSM, k. 81—

padajñānaṃ tu karaṇaṃ dvāraṃ tatra padārthadhīḥ /  
śābdabodhaḥ phalaṃ tatra śaktidhīḥ sahakāriṇī //

「ところで形態素 (語) の知が作具であり、形態素 (語) の意味の知はその [作具] にある〈ハラタキ〉であり、言語的認識は果である。その [形態素 (語) の意味の知に] 対しては〈直接的指示関係〉の知が協働因である。」

当該の因果関係 (kāryakāraṇabhāva) における、結果 (kārya) である「定動詞接辞の意味である〈数〉を PRAKĀRA とする認識」と原因 (kāraṇa) である「定動詞接辞より生ずる〈行為主体〉〈目的〉の想起 (upasthiti)」に関する〈結果性の局限者〉 (kāryatāvachedaka), 〈原因性の局限者〉 (kāraṇatāvachedaka) としての属性 (dharma) と関係 (sambandha) は以下のとおりである。

Kāśikā: ākhyātopasthitasāmkhyāprakārakakartṛbhūtārthaviśeṣyakabuddhitvaṃ, tattvaviśiṣṭakarmabhūtaviśeṣyakabuddhitvaṃ ca kāryatāvachedakam, ākhyātajanyakartrupasthitatvaṃ tatkarmopasthitatvaṃ kāraṇatāvachedakam, samavāyaḥ kāryatvakāraṇatvayor avachedakah sambandhaḥ.

因果関係は原因と結果が同一の場合 (samānādhikāraṇa) に存する場合に成立する。X という場合 (adhikāraṇa) に R<sup>1</sup> という関係で存する Y を原因として同

じそのXという場に $R^2$ という関係で存するZという結果が生ずるという時、 $R^1 R^2$ はそれぞれ *kāraṇatāvacchedakasambandha* (原因性を局限する関係), *kāryatāvacchedakasambandha* (結果性を局限する関係) と呼ばれる。当該事例において  $R^1 R^2$ は〈和合〉(samavāya)である。認識(bodha)も〈想起〉(upasthiti)もアートマンの〈徳〉としてアートマンに内在する。またY・Zを本質的に限定する属性(dharma) — Y-tva・Z-tva — は、それぞれ自己に〈原因性〉〈結果性〉を局限するものとして *kāraṇatāvacchedakadharmā* (原因性を局限する属性), *kāryatāvacchedakadharmā* (結果性を局限する属性) と呼ばれる。当該事例におけるそれらについては説明の要はないであろう。

#### [2.4.2.2]

37) ニヤーヤ学派の言語的認識 (śābdabodha) の理論の徴表は〈主格接辞〉で終わる項目の意味を認識内容の主被限定者 (mukhyaviśeṣya) とみなす点にある (prathamāntārthamukhyaviśeṣyakabodha)。ここで例示されている文の対象はそれぞれ次のように記述し得る。

{*candra* iva mukhaṁ dṛśyate} → darśana-viśiṣṭa-viśayatā-viśiṣṭam  
candra-viśiṣṭa-sādṛśya-viśiṣṭa-mukha (見るという行為の対象性を有する、月との類似性を有する顔)

{*devadatto bhuktvā vrajati*} → bhojana-uttarakālika-vrajana-viśiṣṭa-kṛti-viśiṣṭa-devadatta (飲食の後時に起こる行く行為をもたらず〈努力〉を有するデーヴァダッタ)

{*candra* iva mukhaṁ dṛśyate} においては {*candraḥ*} (*candra* + sU) {*mukham*} (*mukha* + sU; sU → am (P7.1.24)) というように二つの〈主格接辞〉で終わる項目が見いだされる。これらのうち {*dṛśyate*} における定動詞接辞〈te〉の意味する〈数〉(〈単数性〉)が結合するのは〈*mukha*〉の意味する顔であり〈*candra*〉の表示対象である月ではない(〈主格接辞〉の導入は P2.3.46 prātipadikārthamātre prathamā による)。

{*devadatto bhuktvā vrajati*} においては {*devadattaḥ*} (*devadatta* + sU) {*bhuktvā*} ( $\sqrt{\text{bhuj}}$  + Ktvā + sU →  $\sqrt{\text{bhuj}}$  + Ktvā +  $\phi$ ) という二つの〈主

格接辞) で終わる項目が見いだされる。

「kr̥t」接辞 Ktvā の導入は次の規則によって規定されている。

P3.4.21 samānakartṛkayoḥ pūrvakāle 「〈行為主体〉を同じくする二つの (「dhātu」の意味の) うち、前時にある [「dhātu」の意味を表示する「dhātu」の後に (P3.1.91) Ktvā (P3.4.18) が導入される]。』

Ktvā で終わる項目 (ktvānta) は、P1.1.40 ktvātosunkasunaḥ によって 「avyaya」(不変化詞) と呼ばれる (このように術語「avyaya」を得る「kr̥t」接辞は特に〈avyayakṛt〉と呼ばれる)。「avyaya」はその後に名詞接辞を後続し、その名詞接辞はゼロ置きされる (P2.4.82)。しかし名詞接辞はゼロ置きされても P1.1.62 により「avyaya」は名詞接辞で終わる項目 (subanta-pada) とみなされる。

ところで avyaya の後に生起するとみなされる名詞接辞は一体何であろうか。一般にはその名詞接辞は〈主格接辞〉の〈単数接辞〉であると言われる。Cf. Pradīpa on Mbh ad P1.1.38: prathamātikrame kāraṇābhāvāt prathamāyā evaikavacanam avyayebhya utpadyte. (「最初のを飛び越して [次のものに行くことには] 理由がないから、まさに〈主格接辞〉の〈単数接辞〉が「avyaya」の後に生起する。)]

こうして「avyaya」と呼ばれる Ktvā で終わる項目は、実現形としては〈主格接辞〉を後続していなくても、文法的には〈主格接辞〉で終わる項目とみなされるのである。(P2.3.46)

さらに Ktvā のような〈avyayakṛt〉は何等新規情報を提供しない、それが添加される語基の意味で導入される接辞 (svārthikapratyaya) であり、それで終わる項目の意味は「dhātu」の意味 - 〈行為〉(bhāva) - と異ならない (Mbh ad P3.4.9: avyayakṛto bhāve bhavanti)。

さて上記の文において {devadattaḥ} {bhuktvā} という二つの〈主格接辞〉で終わる項目のうち、{vrajati} の定動詞接辞が意味する〈単数性〉という〈数〉は {bhuktvā} の意味である飲食行為 (bhojana) には結合し得ない。なぜなら、〈行為〉は〈もの〉ならざるもの (asattvabhūta) であり、〈数〉を持ち得ないからである (2-註7参照)。

以上のように同じ〈主格接辞〉で終わる項目であっても定動詞接辞の意味する〈数〉と結合するものとそうでないものがある時、その〈数〉と結合しないものに対する因果関係の逸脱を回避するために、原因である「〈主格接辞〉で終わる「pada」から生ずる想起」(prathamāntapodajanyopasthiti)に限定が加えられるべきである。両文における〈主格接辞〉で終わる項目の対象を見ると、定動詞接辞の意味する〈数〉と結合しないものは、他の項目の対象に対する限定者となっている。〈candra〉の指示対象は〈iva〉の意味する類似性(sādṛṣya)に対する限定者であり、〈bhuktvā〉の指示対象である飲食行為は行く行為(vrajana)に対する限定者である。したがって同じ〈主格接辞〉で終わる項目の指示対象であっても、そのような定動詞接辞の意味する〈数〉と結合するものは他の項目の対象に対して限定者とならないもの(itaraviśeṣaṇa)に制限される。

当該の因果関係はこうして「定動詞接辞の意味である〈数〉を PRAKĀRA とする認識に対して、他の項目の対象に対する限定者とはならないものを対象とする〈主格接辞〉で終わる「pada」から生ずる想起が原因である」(ākhyātārthasamkhyāprakārakabodhe itaraviśeṣaṇātānāpanārthaviśayakapratamāntapadajanyopasthitir hetuḥ) というように言われなければならない。Cf. Darpaṇa: tathācetaraviśeṣaṇātānāpanārthaviśayakopasthitiḥ kāraṇam ity arthaḥ.

ニヤーヤ学派の因果関係には、まずパーニニ文法学派のそれが同一項目の対象間に成立するものであるのに較べて異なる項目の対象間に成立するものであるという点に一つの「重さ」(gaurava)があり、さらにその成立要件として〈他に対する非限定者性〉が必要とされるという点でもう一つの「重さ」が加わる。こうして同派の問題の因果関係には「過剰な重さ」(atigaurava)があることになる。

#### [2.4.3.1]

38) Cf. VBh on k.2: vastutaḥ vartamāne laḥ ityatra adhikārād dhātoḥ ity eva labhyate, tatra dhātor vartamānatvaṁ na tadānīm vivakṣitam iti tadarthasya

vācyam . . .

〈dhātu〉という語は、それが適用される特定の音連鎖項目のクラスの成員を指す文法学上の術語 (śabdasaṃjñā) である (小川 [1988a;1989])。しかし「dhātu」と呼ばれる  $\sqrt{bhū} \sqrt{pac}$  といった項目に関して〈時間〉を語ることは意味をなさないから、当該規則に支配規則 P3.1.91 から牽引される〈dhātu〉という語はその語の適用される  $\sqrt{bhū} \sqrt{pac}$  といった項目の意味、すなわち dhātu の意味である〈行為〉を意図している (〈dhātu〉の意味ではない)。Cf. Mbh ad P3.2.84 bhūte: dhātur vai śabdo na ca śabdasya bhūtabhaviṣyadvartamānatāyām saṃbhavo 'sti. śabde 'saṃbhavād arthe kāryam vijñāsyate. kaḥ punar dhātvarthaḥ, kriyā. kriyāyām bhūtāyām.

P3.2.123 の解釈に関しては 2 - 註17を見よ。

#### [2.4.3.2]

39) 直説法現在形 {pacati} (LAṬ) ・直説法アオリスト形 {apākṣīti} (LUṆ) ・直説法未来形 {pakṣyati} (LṚṬ) の派生における L 接辞選択規則はそれぞれ以下のとおりである。

P3.1.91 dhātoḥ

P3.2.123 vartamāne [dhātoḥ] laṭ

P3.2.110 [bhūte (P3.2.84) dhātoḥ] luṇ 「[過去 (bhūta) に属する事象を表示する「dhātu」の後に] LUṆが導入される。」

P3.3.13 [bhaviṣyati (P3.3.3) dhātoḥ] lṛṭ śeṣe ca 「[未来 (bhaviṣyat) に属する〈行為〉<sup>1</sup>を目的とする〈行為〉<sup>2</sup>を表示する「dhātu」が共起項目である時〈行為〉<sup>1</sup>を表示する「dhātu」の後に] LṚṬが導入される。残余の場合 [すなわちそのような共起項目がない場合未来に属する事象を表示する「dhātu」の後に] LṚṬが導入される。」

ここでカウンダ・バッタは、〈時間〉は dhātu の意味であって定動詞接辞はそれに対する標示者 (dyotaka) であるという見地ではなく、〈時間〉は定動詞接辞によって表示されるもの (vācyā) であるという見地に立脚している点に留意するべきである。

なお「現在」(vatartamāna)、「過去」(bhūta)、「未来」(bhaviṣyat)等の時間概念については Lakārārthanirṇaya にそれぞれ次のような定義が与えられている。

Def. (x = 現在) : x は開始されて未だ終結していない〈行為〉により性格づけられる (VBh on k.22: prārabdhāparisamāptikriyopalakṣitatvaṁ vartamānatvam)。

Def. (x は過去に属する) : x は現在時における滅の pratiyogin である (VBhS on k.23: vartamānadhvaṁsapratiyogitvaṁ bhūtatvam)。

Def. (x は未来に属する) : x は現在に属する未生無の pratiyogin である時間に生ずる (VBhS on k.22: tattvaṁ [bhaviṣyattvaṁ] ca vartamānaprāgabhāvapratiyogisamayotpattimattvam)。

「未生無」(prāgabhāva)・「滅」(dhvaṁsa) すなわち「已滅無」(pradhvaṁsābhāva) については宇野 [1980:104-111] 参照。またここでの〈pratiyogin〉とは「或るものに関連して非存在が知られるときその或るものがその非存在の pratiyogin である」(宇野 [1978:96-7]) と言われるところのものである。

### [2.4.3.3]

40) この反論はアッパヤ・ディークシタ (Appaya Dikṣita) が Siddhāntaleśa-saṁgraha においてなしているものである。Cf. VBh on k.2: etena dhātvarthe eva vartamānatvānvayaḥ, na tu vyāpāre, āmavātajajīkṛtakalevarasya utthān-ānukūlayatnasattvena utthiṣṭhati iti prayogāpatteḥ iti *siddhāntaleśoktam* apāstam.

関節炎で体のいうことがきかない者にも体を起こそうとする〈努力〉は存在する。〈努力〉もまた〈ハタラキ〉の一種である。しかしながら勿論彼はその〈努力〉の〈結果〉を実現することはできない。定義上〈行為〉が現在に属するということは、その〈行為〉が現在進行過程にあるということに他ならないから、〈ハタラキ〉は現在していてその〈結果〉は未だ実現されていないという構造が見いだされる場合に現在形の運用がある。彼に関しても、〈結果〉に対する実現可能性の問題は抜きにしても、現在時点で〈ハタラキ〉が存在してかつ〈結

果〉が存在しないという構造が見いだされる訳であるから、正常な者に関してと同様に [uttīṣṭhati] と表現されることは避けられない。

41) Cf. Darpaṇa: anumānaprayogaś caivam — devadattīyaceṣṭā prayatnā-janyā. ceṣṭātvāt. macceṣṭāvat. athavā ayam utthānānukūlayatnavān, vijātīyaceṣṭātvāt, aham iveti. ceṣṭāprayatnayoh kāryakāraṇabhāvaś ca prakṛte 'nukūlas tarkaḥ. Parīkṣā: ceṣṭā yadi yatnābhāve 'pi syāt, tadā yatnā-janyā na syād ity anukūlas tarkaḥ.

動作に対して、〈努力〉はその原因 (kāraṇa) であり〈能力〉はそれと共に働く共働因 (sahakārikāraṇa) である。Cf. Parīkṣā: evaṁ caikasya yatnākhyasya kāraṇasya sadbhāve 'pi śaktirūpasahakārikāraṇābhāvān na phalaṁ jāyata ityasyopapattiḥ.

#### [2. 4. 4. 1]

42) すでに明らかなように〈行為主体〉〈目的〉といった kāraṇa および〈時間〉は、〈ハタラキ〉に対する直接的な限定者であるのに対して、〈数〉は〈ハタラキ〉に対して、kāraṇa に対する限定者であることによって間接的に限定者となる。このように kāraṇa に対する〈数〉の限定関係と〈ハタラキ〉に対する kāraṇa のそれとが kāraṇa を結節点として統合される場合、〈ハタラキ〉は主要なる被限定者 (mukhyaviśeṣya) としての地位を占める。

#### [2. 4. 4. 2]

43) ① パーニニは P1.2.56 pradhānapratyayārthavacanam arthasyānyapramāṇatvāt によって、文法学は派生項目に関してその意味の表示様式を教示するものではない (aśiṣya), 意味の表示様式は実際の言語運用から決定されるべきものであるということを述べている [この規則は interpolation である可能性もある (Cardona [1976:158-60])]. Kāśikāvṛtti の作者によれば、この規則によってパーニニは彼の先師達 (pūrvācārya) により定式化されている派生項目の意味表示の様式に関する次のような解釈規則を彼の文法学の体系に導入す

ることを拒否している。

{pradhānopasarjane ca pradhānārtham saha brūtaḥ} (「[複合語において] 主要素と従属要素は共に主要素の意味を表示する」)

{prakṛtipratyayau sahārtham brūtaḥ} (「語基と接辞は共に [接辞の] 意味を表示する」) [Cf. Mbh ad vt.2 ad P3.1.67]

これらのうち後者の解釈規則が意図するものが「語基の意味と接辞の意味のうちまさに接辞の意味の方に主要性がある」ということなのである(バトージ・ディークシタは当該規則は後者の解釈規則だけに関わっていると解している - SK1298: *pratyayārthaḥ pradhānam ityevaṁ rūpaṁ vacanam apy aśiṣyam*)。例えば派生形 <pakṛ> ( $\sqrt{\text{pac}} + \text{ṛC} \leftarrow \text{P3.1.133}$ ) にこの解釈規則を適用すると、この語形は語基  $\sqrt{\text{pac}}$  の意味する料理に対して接辞  $\text{ṛC}$  が意味する〈行為主体〉を主要なるものとして表示するということになる。これは実際の言語運用の場での経験と矛盾しない。しかしながらこの解釈規則はあくまでも一般原則 (utsarga) であって定動詞形 (tiÑ で終わる項目) には妥当しない。このことをカウンダ・バッタはここで Nirukta・Bhāṣya の権威に基づいて立証しようとしているのである。

② Nirukta のこの言明は <ākhyāta> と <nāman> の定義を述べている。この定義をバタンジャリは部分的な変更を加えて次のように引用している。

Mbh on vt.2 ad P5.3.66: *kriyāpradhānam ākhyātām bhavati, ekā ca kriyā. dravyapradhānaṁ nāma. katham punar jñāyate kriyāpradhānam ākhyātām bhavati, dravyapradhānaṁ nāmeti.*

この修正引用によってパーニニ文法学派が Nirukta の言明をどのように理解しているかが知られる。バタンジャリにとって Nirukta の言明中の <bhāva> は <kriyā> に同義であり (2-註 7, 11), <sattva> は <dravya> に同義である (<sattva> = <dravya> の概念についても 2-註 7 参照)。一方被定義項である <ākhyāta> と <nāman> に関して、それがパーニニ文法学の体系におけるいかなる項目に該当するかは問題である。ナーゲーシャ・バッタは上記のバタンジャリの言明の説明 (Uddyota) において、バタンジャリの言明における

〈ākhyāta〉は定動詞接辞で終わる項目 (tiñanta) のことであり、〈nāman〉とは名詞接辞で終わる項目 (subanta) のことであると述べているが、このような〈ākhyāta〉〈nāman〉の語義の特定はまさにそれらが多義的であることによる。同じ Nirukta の言明に関するナーゲーシャ・バッタの次のような議論はそのことを示唆していて興味深い。

「[反論] 〈ハタラキ〉が ākhyāta の意味であるとするならば、{|kriyāpradhānam ākhyātam|} というヤースカ (Yāska) の言明と矛盾する。この [言明] 中の 〈ākhyāta〉という語は、『それにより一切のうちで最も主要なるものである事象が告げられる (ākhyāyate) もの』と語義分析されるから、dhātu なるものを意図しているからである。なぜなら、{|nāmākhyātopasarganipātāḥ|} (Nirukta I.1) という [上記の言明に先行する言明によって] まさに語基 (prakṛti) こそがその [Nirukta] では枚挙されているからである。さらにまた [ヤースカは] 同じくその [Nirukta] で後ほど {|nāmāny ākhyātajāni iti śākaṭāyano nairuktasamayaś ca|} (Nirukta I.12) ({|nāman} は ākhyāta より生ずる、とシャーカターヤナ (Śākaṭāyana) は考える。そしてこれは語源学者の一致して認める所である)』というように述べているからである。実に nāman が dhātu より生ずる (dhātuja) ことは考えられても、それが接辞としての ākhyāta (ākhyātapratyaya) より生ずることなど思いもよらない。

[答え] 否である。{|kriyāpradhānam ākhyātam|} 中の] 〈ākhyāta〉という語によってはまさに定動詞接辞で終わる項目 (tiñanta) こそが意図されているからである。」 (VSM (Dhātvarthanirūpaṇa): na ca vyāpārasya ākhyātārthatve kriyāpradhānam ākhyātam iti yāskavaco virodhaḥ. tatra hy ākhyātaśabdena ākhyāyate sarvapradhānībhūto 'rtho 'nena iti vyutpattya dhātūrūpam ucyate, nāmākhyātopasarganipātāḥ iti prakṛtīnām eva tatroddeśāt. agre 'pi tatra nāmāny ākhyātajāni iti śākaṭāyano nairuktasamayaś ca iti uktatvāt. na hi ākhyātapratyayajām nāma sambhāvyate kintu dhātujam iti vācyam. ākhyātaśabdena tiñantasyaiva grahaṇāt.)

[パタンジャリは Mbh ad P3.3.1 において上記の Nirukta I.12 に言及し

ているが、そこでは彼は 〈ākhyātaja〉 に代えて 〈dhātuja〉 という表現を用いている。]

このように 〈ākhyāta〉 という語は、それをパーニニ文法学に見いだされる術語に対応させるならば、接辞 (pratyaya) すなわち定動詞接辞 (tiñ) ・定動詞接辞で終わる項目 (tiñanta) ・さらには定動詞接辞が添加されることの語基すなわち「dhātu」のいずれにも対応し得るし、一方〈nāman〉も〈ākhyāta〉と同様一義的ではなく、名詞語幹すなわち「prātipadika」・名詞接辞で終わる項目 (subanta) のいずれをも指し得るのである (Nirukta I.12 におけるそれは前者である)。

〈ākhyāta〉 〈nāman〉 定義のパーニニ文法学派の立場での解釈は、ドゥルガ (Durga) がその注釈において次のように言及しているものに当たる。

「ākhyāta (定動詞接辞で終わる項目) は〈行為〉 (bhāva) ・〈時間〉 ・kāraka ・〈数〉 といったこれら四つのものを意味する。これらのうち〈行為〉 (bhāva) に主要性がある。したがって |bhāvapradhānam ākhyātam| と言われている。nāman (名詞接辞で終わる項目) も〈存在性〉 ・〈もの〉 (dravya) ・〈数〉 ・〈性〉 といったこれらのものを意味する。これらのうち〈もの〉が主要なるものであるから、 |sattvapradhānāni nāmāni| と言われている。

このようにある者達は考える。」 (Durga on Nirukta I.1: bhāvakā-lakārasaṁkhyāś catvāra ete 'rthā ākhyātasya. teṣāṁ bhāvapradhānatā bhavati. ato bhāvapradhānam ākhyātam ity uktam. nāmno 'pi sattā dravyaṁ saṁkhyā liṅgam ity ete 'rthāḥ. teṣāṁ dravyaṁ pradhānam ity ataḥ sattvapradhānāni nāmānity uktam evam eke manyante.)

③ 「P1.3.1 (bhūvādisūtra) 等における〈行為〉の主要性を理解せしめる Bhāṣya」とは、具体的には P1.3.1 あるいは P5.3.66 に関する Bhāṣya である。P5.3.66 に関する Bhāṣya はすでに上に挙げた。

バタンジャリは P1.3.1 に関する Bhāṣya で次のように述べている。

「それでは {bhavati pacati} {bhavati pakṣyati} {bhavaty apākṣīti} における [{bhavati} - {pacati}] ({pakṣyati} {apākṣīti}) という二つの] 言語項目間の関係は何か。ここにおける言語項目間の関係は次のような [パラフレーズによって表現される] ものである。

すなわち、「 $\sqrt{\text{pac}}$  等 [が表示する] 〈行為〉は  $\sqrt{\text{bhū}}$  [が表示する] 〈行為〉の 〈行為主体〉である。」 (Mbh ad P1.3.1: kā tarhi vācoyuktiḥ - bhavati pacati, bhavati pakṣyati, bhavaty apākṣīd iti, eṣaiṣā vācoyuktiḥ - pacādayaḥ kriyā bhavatikriyāyāḥ kartryo bhavantīti.)

これによってパタンジャリは、〈行為〉間に〈行為行為参加者〉関係 (kriyākārahābhāva) が成立するという考えを提示しているのであるが、ここにおける {bhavati pacati} 等に関する {pacādayaḥ kriyā bhavatikriyāyāḥ kartryo bhavanti} というパラフレーズは、彼が定動詞接辞で終わる項目に関して dhātu の意味に主要性があることを認めているということを示している。

文の意味 (vākyārtha) は限定関係 (viśeṣaṇaviśeṣyabhāva) である (2-註 26)。{bhavati pacati} は定動詞接辞で終わる二つの項目から構成される文である。パラフレーズに従えば文 {bhavati pacati} の表示対象は (x-viśiṣṭa-pāka) -viśiṣṭa-sattā (x=不特定の〈行為主体〉) であり、限定関係は〈行為行為参加者〉関係による。因にこの文から得られる認識内容は {ekakarṭṭkapacikriyāikakarṭṭkaṁ bhavanam} (Parīkṣā: 「誰かある一人の者を〈行為主体〉とする料理行為、それを一つの〈行為主体〉とする [現在に属する] 〈存在性〉」) というように表現される。Cf. Parīkṣā: etadbhāsyagranthād ekakarṭṭkapacikriyāikakarṭṭkaṁ bhavanam ityādikrameṇa śābdabodhas teṣu bhavātīti labhyate. Kāśikā: atra pakṣyati bhavātīty asya bhaviṣyantī pākakriyā sūkṣmarūpeṇa bhavātīty arthaḥ. etena bhaviṣyatpākakriyākartṭkavartamānabhavanasya bodhāt . . .

もし接辞の意味の主要性を教示する既述の解釈規則に従えば、 $\sqrt{\text{pac}}$  の意味である料理は、定動詞接辞に対する限定者となった時、自己の限定対象が得られたことによって自己の限定対象を求める期待 (ākāṅkṣā) が充足されるから、

さらなる項目の対象に限定者として結合することはなくなり、じたがって  $\sqrt{\text{bhū}}$  の意味である存在性 (sattā) に〈行為主体〉として結合するということは不可能なのである。

[2.4.4.3]

44) 例えば  $\{\text{devadattaḥ pacati}\}$  の認識内容は  $\text{pāka-viśiṣṭa-karṭṛ-abhinna-devadatta}$  (料理〈行為〉に限定された〈行為主体〉と異なるデーヴァダッタ) となる。ニヤーヤ学派によれば動詞接辞の意味は〈努力〉であるから「異なるものとしての結合」(abhedānvaya) はありえない。同派によればこの結合関係は〈基体性〉(āśrayatā) に他ならない。すなわち動詞接辞の意味である〈努力〉は、〈主格接辞〉で終わる項目  $\{\text{devadattaḥ}\}$  の意味であるデーヴァダッタに〈基体性〉という関係で結合する。Cf. Darpaṇa: naiyāyikamate tu kṛter ākhyātārathatayā tasyā āśrayatvenaiva prathamāntapadārthe 'nvayād . . .

45) 文  $\{\text{paśya mṛgo dhāvati}\}$  ( $\sqrt{\text{dṛś}} + \text{LOT}$   $\text{mṛga} + \text{sU}$   $\sqrt{\text{sṛ}} + \text{LAT}$ ) における  $\{\text{paśya}\}$  ( $\sqrt{\text{dṛś}}2.\text{sg.imper.P.}$ ),  $\{\text{dhāvati}\}$  ( $\sqrt{\text{sṛ}}3.\text{sg.pres.P.}$ ) の派生手続をおおまかに示せば次のとおりである。

$\sqrt{\text{dṛś}} + \text{LOT}$	P3.3.162 (LOT 選択)
siP	P1.4.107 · P1.4.22 「madhyama」 「ekavavacana」 選択
ŚaP	P3.1.68 ————— 2 - 註 6 参照
paśy	P7.3.78 (dṛś → paśy 代置)
hi	P3.4.87 (si → hi 代置)
ϕ	P6.4.105 (hi → ゼロ (LUK) 代置)

∴ paśya

$\sqrt{\text{sṛ}} + \text{LAT}$   
tiP  
ŚaP

dhau P7.3.78 (sr̥ → dhau 代置)

āv P6.1.78 (/au/ → /āv/代置)

∴ dhāvati (√dhāvU からの派生形である可能性もある)

パタンジャリは、2-註43でみたように〈行為〉間にも〈行為行為参与者関係〉を認めて、二つの定動詞接辞で終わる項目が単一の文 (ekavākya) を構成し得ることを明示しており (Mbh ad P1.3.1), また Mbh ad P1.4.32 では〈行為〉にも P1.4.47 で定義されているところの術語「karman」が適用できるということ、すなわち〈行為〉も〈目的〉として機能し得るということを述べている (evaṁ kriyāpi kṛtrimaṁ karma, 小川 [1984c])。カイヤタ (Kaiyaṭa) が紹介する次の言明は、〈行為〉もまた kāraka として機能し得るというこのようなパタンジャリの見解を剴切に言い表わしている。

「それに関して次のように言う者達がいる。{bhavati pacati} {paśya mr̥go dhāvati} という [表現に見られるように] 〈行為〉は〈行為主体〉〈目的〉として ākhyāta (dhātu) の表示対象である〈行為〉とまさに関係する。しかし〈作具〉等の [他の kāraka] としては [それと] 関係することはない。そのような言語運用は見られないから。」 (Pradīpa on Mbh ad P1.3.1: tatrāhuḥ – kartṛkarmabhāvena kriyā ākhyātavācyakriyayā sambadhyata eva bhavati pacati, paśya mr̥go dhāvati. karaṇādibhāvena tu na sambadhyate, tathā prayogādarśanāt.) Cf. VII, k.6.

{paśya mr̥go dhāvati} においては、君を〈行為主体〉とする見るという〈行為〉 (dṛśikriyā) に対して鹿を〈行為主体〉とする走る行為 (dhāvanakriyā) が〈目的〉となっている。しかしその〈目的〉として機能する走る行為を表示するものは dhātu √sr̥ であり、それは P1.2.45 により「prātipadika」ではないから √sr̥ の後に〈目的格接辞〉が生起することは許されない。

〈単一文性〉 (ekavākyatā) を Darpaṇa は、文が一つのものを主被限定者 (mukhyaviśeṣya) とする認識を生ぜしめることであると説明している

(ekamukhyaviśeṣyakabodhajanakatvarūpaikavākyatva)。〈単一文性〉には、形態素 (pada) あるいは「pada」(subanta, tiñanta) から構成される集合に関するもの (padaikavākyatā) と、そのような集合からさらに構成される集合に関するもの (vākyaikavākyatā) がある (Cf. Uddyota on P1.4.21)。しかし何れにしても、ある言語項目の集合が単一の文であるとみなされる時、その集合からそれを構成する項目の表示対象が単一の限定関係のもとに序列化されて理解される。ここでの〈単一文性〉は後者のもの (vākyaikavākyatā) である。この vākyaikavākyatā としての〈単一文性〉がどのように成立するかに関してはクマーリラ・バッタの次のような言明が参考になろう。

TV on JS1.4.24: svārthabodhe samāptānām aṅgāṅgitvādyapekṣayā /  
vākyānām ekavākyatvaṁ punaḥ saṁhatya jāyate //

「自己の意味を認識させることにおいて [その機能を] 果たしている複数の文は主従関係等に基づく期待によって再び一緒に単一文を構成する。」

文(A) {paśya mṛgo dhāvati} は文(B) {mṛgo dhāvati} (「鹿が走っている」) と定動詞接辞で終わる項目 {paśya} (「見よ!」) から構成されている。相関的に前者のように文を構成要素とする文(A)は「大文」(mahāvākya), 後者のような文内文(B)は「中間文」(avāntaravākya) と呼ばれる (小川 [1985])。この場合 {paśya} {mṛgaḥ} {dhāvati} の各項目も形態素の集合 (padasamūha) として一つの文であり、これらの集合としての {mṛgo dhāvati} {paśya mṛgo dhāvati} を相関的に「大文」, {paśya} 等の各項目を「中間文」とみなすことも可能であるし、また {paśya} は人称系列選択規則 P1.4.104 に基づき {tvaṁ paśya} (「君は見よ!」) に等価であるから、「pada」から構成される文であり、二つの「中間文」{paśya} {mṛgo dhāvati} が「大文」{paśya mṛgo dhāvati} を構成しているとみなすこともできる。

言語的認識の内容に関して dhātu の意味を主被限定者とみなすパーニニ文法学派の立場より文 {paśya mṛgo dhāvati} の認識内容をパラフレーズによって示せば次のとおりである (Śāṅkarī による)。

{paśya} → {yuṣmadarthābhinnaloḍarthakarṭṛṇiṣṭhaś cākṣuṣajñānānukūlo vidhi viśayo vyāpāraḥ} (「<yūṣmad> (「あなた」) の意味と不異なる LOT の意味である <行為主体> に存する、視覚知をもたらす、命令の対象である <ハタラキ>」)

命令 (vidhi) は LOT の意味、視覚知をもたらす <ハタラキ> は  $\sqrt{drś}$  の意味。

{mṛgo dhāvati} → {mṛgābhinnō yo laḍarthaḥ kartā tanniṣṭho deśaviśeṣasaṃyogānukūlo vegavattaro vyāpāraḥ} (鹿と不異なる LAT の意味である <行為主体>、それに存する特定の場所との <合>をもたらす非常に速い <ハタラキ>)

特定の場所との <合> をもたらす非常に速い <ハタラキ> は  $\sqrt{sr}$  の意味。

{paśya mṛgo dhāvati} → {mṛgābhinnalaḍarthakarṭṛṇiṣṭhottaradeśasaṃyogānukūlavegavattaravyāpārakarmakaḥ, yuṣmadarthābhinnaloḍarthakarṭṛkaś cākṣuṣajñānānukūlo vidhiviśayo vyāpāraḥ} (「鹿と不異なる LAT の意味である <行為主体> に存する次なる場所との <合> をもたらす非常に速い <ハタラキ> を <目的> とする、<yūṣmad> (「あなた」) の意味と不異なる LOT の意味を <行為主体> とする視覚知をもたらす、命令の対象である <ハタラキ>」)

{paśya} の認識内容における主被限定者は  $\sqrt{drś}$  の意味であり、これに同文中の他のすべての項目の意味が間接直接に限定者として係わっている、一方 {mṛgo dhāvati} における主被限定者は  $\sqrt{sr}$  の意味であり、これにも同文中の他のすべての項目の意味が間接直接に限定者として係わっている。そして両者が合して単一文 {paśya mṛgo dhāvati} を構成すると、 $\sqrt{sr}$  の意味が  $\sqrt{drś}$  の意味にその <目的> として関係することによって、その認識内容における主被限定者の地位は  $\sqrt{drś}$  の意味に与えられることになり、これに他の項目の意味は階層的な限定関係で関係する (dhāvanakriyā-viśiṣṭa-drśikriyā という限定関係を頂点とする限定関係の階層を想定せよ)。

ところで、<主格接辞> で終わる項目の表示対象が言語的認識の内容の主被限定者の地位を占めるとするならば、{paśya} においてはそれは {tvam paśya} に等価であるから、{tvam} (<yūṣmad> Nom. sg.; = <yūṣmad>) の指示する

対象が主被限定者であり (dṛśīkriyā-āśraya-abhinna-yuṣmadartha), {mṛgo dhāvati} においては鹿が主被限定者となる (dhāvanakriyā-āśraya-abhinna-mṛga)。<yuṣmad> の指示する対象と鹿とはどのような関係で限定関係をもつことができよう。ここではただ両文のそれぞれの限定関係が統合されることなく併存する。すなわち、この場合には {paśya mṛgo dhāvati} は単一文ではなく二つの独立した文に分割されるものと考えねばならない (vākyabheda)。

46) 文 {mṛgo dhāvati} の認識内容における主被限定者が〈主格接辞〉で終わる項目 {mṛgaḥ} (= <mṛga>) の表示する鹿であり (この場合同文の認識内容は dhāvanakriyā-āśraya-viśiṣṭa-mṛga), 見るという〈行為〉の〈目的〉が, √sṛ の意味する走る〈行為〉ではなく, 〈主格接辞〉で終わる {mṛgaḥ} の表示するそのような〈行為〉の基体である鹿であるとするならば, P2.3.2 により〈目的格接辞〉が <mṛga> の後に生起し, 「走るという〈行為〉の基体である鹿を〈目的〉とする見るという〈行為〉の基体である君」(Śāṅkarī: dhāvanāśrayamṛgakarmakadarśanāśrayas tvam) という意味で\* {paśya mṛgam dhāvati} という文が派生されることになる。したがってこの場合にはパタンジャリによりその派生が正当化されている文 {paśya mṛgo dhāvati} は成立しないことになる。

この\* {paśya mṛgam dhāvati} という文の派生には, ANTAR-ĀṄGA-BAHIRAṄGA の観点から <mṛga> の後に生起する名詞接辞の選択に関して問題があるが, ここではそれには触れない。詳細は Śāṅkarī を見よ。

47) ŚatṚ は L 接辞 LAṬ の代置要素である。

P3.2.124 laṭaḥ śatṛśānacāv aprathamāsamānādhiakarṇe 「LAṬ が〈主格接辞〉以外の名詞接辞で終わる項目と指示対象を同じくする場合, LAṬ に ŚatṚ ŚānaC が代置される。」

この規則は L 接辞に関する tiṆ 代置規則 P3.4.78 に対する例外規定 (apavāda) である。

{paśya mṛga-am √sṛ + LAṬ} → {paśya mṛgam dhāvantam} (「走って

いる鹿を見よ！』)

この文において鹿は見るという〈行為〉の〈目的〉であり、P2.3.2によって鹿を表示する〈mr̥ga〉の後に〈目的格接辞〉が導入される。LAT̥は√sr̥の意味する走るという〈行為〉に対する〈行為主体〉を表示する。そしてこの見るという〈行為〉の〈目的〉である鹿が、走るという〈行為〉に対する〈行為主体〉である場合、すなわち〈目的格接辞〉で終わる項目 {mr̥gam} と LAT̥ に同一対象指示性がある場合、この規則によって LAT̥ に ŚatR̥ が代置される。(√sr̥ の後には P1.3.78 により「parasmaipada」が生起する。ŚatR̥ は P1.4.99 により「parasmaipada」。

$\sqrt{sr̥} + LAT̥ \rightarrow \sqrt{sr̥} + ŚatR̥ \rightarrow \sqrt{sr̥} + ŚaP + ŚatR̥ \rightarrow dhau + a + at \rightarrow dhāvat$  (P6.1.78, P6.1.97)

ŚatR̥ は P3.1.56 により「kr̥t」接辞であるから P1.2.46 によって〈dhāvat〉は「pr̥atipadika」であり、その後名詞接辞の生起を許す。当該事例の〈目的格接辞〉導入は〈viśeṣyasāmānādhikarānya〉による(小川 [1984c])。

48) 〈目的格接辞〉指定規則 P2.3.2 の適用においては P2.3.1 anabhihite により〈目的〉を表示する項目が自己(〈目的格接辞〉)以外にないことが前提される。すなわち、〈目的〉が他の項目によって表示されることがない場合に〈目的格接辞〉が生起するのである。連鎖 {paśya mr̥ga-sUP √sr̥ + LAT̥} においては〈目的〉を表示する項目が他に見当たらないから、〈mr̥ga〉の後に〈目的格接辞〉が生起することは避けられない。こうして {paśya mr̥gam dhāvantam} の派生を妨げるものは何もない。{mr̥go dhāvati} において〈mr̥ga〉の意味に被限定者の地位を与える限り、文法的には決して {paśya mr̥go dhāvati} の派生は説明されないのである。

49) 〈tad〉(「それ」)に〈目的格接辞〉を添加した語形 {tam} を {paśya} に関して補給すれば、{taṁ paśya mr̥go dhāvati} = {tvam taṁ paśya mr̥go dhāvati} (「あれを見よ！鹿が走っている」)という連鎖が得られる。この連鎖には {tvam} と {mr̥gaḥ} という二つの〈主格接辞〉で終わる項目があり、{tam}

は見るという〈行為〉に対する限定者を供給するだけであるから (tat-karmaka-dr̥śikriyā), 2-註45でみたように〈主格接辞〉で終わる項目の意味に主被限定者性を認めれば, この連鎖は {tañ paśya} {mṛgo dhāvati} という互いに独立した二文に分割され, 相互期待に基づいて単一の限定関係の下に統合されることはない。

{tañ paśya} と言われれば {kañ paśya} (「何を見よ?」) というように〈tad〉の指示する対象の特定化の期待が生ずる。このことから {tañ paśya} {mṛgo dhāvati} は単一文を構成し得るのではないかとも考えられる (Śāṅkari: yo mṛgo dhāvati tañ paśya)。Cf. JS2.1.46 (Ekavākyatvalakṣaṇādhikaraṇa): arthaikyād ekañ vākyāñ sākāñkṣāñ ced vibhāge syāt.

しかし, その場合には {paśya mṛgo dhāvati} という表現の真意 (tātparyārtha) が伝わらないというのである。この文が言わんとしているのは「見よ! 鹿のなんてすばらしい走りなんだ」ということなのである。

#### [2.4.4.4]

50) Kāśikā によれば, 〈結果性〉〈原因性〉を局限する関係 (kāryatāvached-akasambandha, kāraṇatā°) は〈被限定者性〉 (viśeṣyatā) という関係である。ここでは〈結果性〉〈原因性〉を局限する関係が〈和合〉ではなく, 〈被限定者性〉という〈対象性〉 (viśayatā) に求められている。勿論ここでも〈和合〉はそのような局限する関係たり得る (2-註36)。〈対象性〉については宇野 [1978] 参照。〈被限定者性〉は〈対象性〉の一種である。

51) パーニニ文法学派の見解では dhātu は〈結果〉と〈ハタラキ〉の両者を意味する。したがって dhātu から生ずる〈想起〉は〈対象性〉の関係で〈結果〉と〈ハタラキ〉の両者に存し得る。したがって結果である「定動詞接辞の意味である〈行為主体〉を PRAKĀRA とする認識」に対して, 原因である〈想起〉の対象を両者のうちの〈ハタラキ〉に制限するために, 〈原因性〉を局限する関係である〈対象性〉に「〈ハタラキ性〉に局限されているものに [存する]」という限定が加えられているのである。当該の因果関係において結果である「定

動詞接辞の意味である〈行為主体〉を PRAKĀRA とする認識は dhātu が意味する〈ハタラキ〉に〈被限定者性〉(viśeṣyatā) という関係で存し、原因である〈想起〉は同じその〈ハタラキ〉に〈対象性〉の関係で存する。

カウンダ・バッタは dhātu から生ずる〈想起〉が〈対象性〉の関係で「〈ハタラキ性〉に局限されているもの」(bhāvanātvāvacchinna) に存すると述べている。これが意図するところのものは、〈ghaṭa〉という語が「瓶として」捉えられる事象に関して適用されるのと同様、dhātu は「〈ハタラキ〉として」捉えられる事象に関して適用されるということである。Cf. Kāśikā: bhāvanātvāvacchinneti. idaṁ dhātunā bhāvanātvaprakārabodha ity abhyupetya. カウンダ・バッタが、dhātu の持つ〈結果〉〈ハタラキ〉に対する〈直接的指示関係〉の在り方に関して、pṛthaksakti 論者であることを想起されたい(2-註2)。

52) 〈pācaka〉(√pac + ṆUL)においては、「kṛt」接辞 ṆUL の意味である〈行為主体〉は√pac の意味する料理〈行為〉に対して主要なるものである(pāka-viśiṣṭa-kartṛ)。したがってこの項目からは〈ハタラキ〉を PRAKĀRA として〈行為主体〉を被限定者とする認識が得られる。この場合この認識と形態素の意味の〈想起〉(padārthopasthiti) の間の因果関係は、「〈ハタラキ〉(bhāvanā) を PRAKĀRA とする認識に対しては、「kṛt」接辞から生ずる〈想起〉が原因である」というように言うことができる。この認識は「kṛt」接辞が意味する〈行為主体〉に〈被限定者性〉という関係で存し、一方〈想起〉はその〈行為主体〉に〈対象性〉の関係で存する。

{paśya mṛgo dhāvati} {pacati bhavati} 等の表現の場合、dhātu の意味する〈行為〉間に限定関係があることはすでに見たとおりである。{pacati bhavati} については2-註43を見よ。

#### [2.4.5.1]

53) 2-註3で述べたように、カウンダ・バッタは dhātu のその対象に対する〈指示様式〉については pṛthaksakti 論者である。彼は {pacati} といった

kartariprayoga (「能動表現」) においてと同様, {pacyate} といった karmaniprayoga (「受動表現」) においても 〈ハタラキ〉 に主被限定者の地位を与える。これに対して viśiṣṭaśakti 論者であるナーゲーシャ・バッタによれば, karmaniprayoga においては 〈結果〉 が主被限定者となる。

カウンダ・バッタは Vaiyākaraṇabhūṣaṇa (on k.2) で, A. (kartariprayoga) {taṇḍulaṁ pacati caitraḥ} (「チャイトラは米を料理している」), B. (karmaniprayoga) {taṇḍulaḥ pacyate caitreṇa} (「米がチャイトラによって料理されている」) を例示して, その認識内容を次のようなパラフレーズによって表現している。

A. {ekataṇḍulāśrayikā yā viklittis tadanukūlaikacaitrābhinnāśrayikā var-tamānakālikī bhāvanā} (「単一の米を基体とする軟化, それをもたらず, 単一のチャイトラと不異なる基体に存する, 現在時に属する, 〈ハタラキ〉 (bhāvanā)」)

B. {ekacaitrāśrayikā ekataṇḍulābhinnāśrayikā yā viklittis tadanukūlā sāmpratīki bhāvanā} (「単一のチャイトラを基体とする, 単一の米と不異なる基体に存する軟化, それをもたらず現在時に属する 〈ハタラキ〉 (bhāvanā)」)

〈行為主体〉 〈目的〉 とはそれぞれ 〈行為〉 の基体 (āśraya), 〈結果〉 の基体であり, ひいては基体そのものであるから, チャイトラ・米が不異なるものとして結合するのは基体である (本文 [2.3.0] 参照)。

#### [2.4.5.2]

54) √nās (「減する」) は所謂「自動詞」(akarmaka) であり, 其の表示する 〈行為〉 は 〈目的〉 をもたない。しかし「自動詞」の場合も dhātu は 〈結果〉 と 〈ハタラキ〉 の両者を意味する。「他動詞」(sakarmaka) との違いは, 〈結果〉 と 〈ハタラキ〉 の基体が前者のばあいには同一であるのに対して, 後者の場合にはそれが異なるという点にある。「他動詞」「自動詞」は次のように定義される。

Def. (x = 「他動詞」) : x は 〈ハタラキ〉 と基体を同じくする 〈結果〉 を表示する。

Def. (x = 「自動詞」): x は 〈ハタラキ〉 と基体を同じくする 〈結果〉 を表示する。(VSM (Dhātvarthanīṇaya): sakarmakatvaṁ ca vyāpāravayadhikaraṇaphalavācakatvam, tatsamānādhikaraṇaphalavācakatvaṁ cākarmakatvam.)

カウンダ・バッタによれば、 $\sqrt{\text{nāś}}$  における 〈結果〉 は 〈滅〉 (nāśa) であり、〈ハタラキ〉 は pratiyogitva-viśiṣṭa-nāśa-sāmagri-samavadhāna である。

瓶は 〈滅〉 (nāśa = dhvaṁsa) の pratiyogin である (2 - 註39)。そして pratiyogin である瓶に属性 pratiyogitva が「自性関係」で存在する。この瓶には棒等による打撃 (daṇḍādyaabhighāta) という 〈滅〉 の 〈原因集合〉 (nāśasāmagri) も 〈合〉 (samyoga) という関係で存在する (Prabhā)。したがって pratiyogitva は、同一基体性 (sāmānādhikaraṇya) の関係で 〈滅〉 の 〈原因集合〉 に関係する (限定関係 vaiśiṣṭya は同一基体性である)。このような pratiyogitva と共存する (基体を同じくする) 〈滅〉 の 〈原因集合〉 の瓶における集結 (samavadhāna) が瓶の 〈滅〉 をもたらす 〈ハタラキ〉 である。あるいはまたそのような滅の 〈原因集合〉 そのものが 〈滅〉 をもたらす 〈ハタラキ〉 である。Cf. VBh: sa ca pratiyogitāsahitanāśasāmagri; VSLM574: sa ca dhvaṁsasāmagrīrūpo vyavadhānādyanukūlavypārārūpaś ca.

〈結果〉 である 〈滅〉 は pratiyogitva の関係で瓶に存するから (Prabhā: nāśaś ca pratiyogitāsambandhena tatraiva), 〈ハタラキ〉 との同一基体性に基つき、 $\sqrt{\text{nāś}}$  は「自動詞」であると言うことができる。

なお、〈結果〉 としての 〈滅〉 はナーゲーシャ・バッタによれば知覚されないこと (adarśana) である。Ibid.: naśyater adarśanānukūlavypāropāro 'rthaḥ.

55)  $\sqrt{\text{nāś}}$  + Kta → naśta (/ś/ → /s/ P8.2.36; /t/ → /t/ P8.4.41)

例えば {ghaṭo naśtaḥ} (「瓶が滅した」) という連鎖において、「kṛt」接辞 Kta は P3.2.102 により過去 (bhūta) を表し、P3.4.72 に基つき 〈行為主体〉 を意味する (P3.4.72 は「自動詞」の後に導入される Kta は 〈行為主体〉 を意味することを述べている)。

[2.4.5.3]

56) 知識 (jñāna) ・ 欲求 (icchā) ・ 〈努力〉 (yatna) は saviṣayakapadārtha (対象をもつ事象) であり, アートマンの〈徳〉として〈和合〉 (samavāya) の関係でアートマンに内在する。

[jñānāti| icchatī| yatate| (「努力している」) において知識・欲求・〈努力〉が〈結果〉とみなされる場合, それをもたらす〈ハタラキ〉はアートマンと内官の〈合〉 (ātmanaḥsaṁyoga) である。[ghaṭam jñānāti| (「彼は瓶を認識している」) を例にとるならば, 〈結果〉である知識は〈対象性〉の関係で〈目的〉である瓶に存在し, アートマンと内官の〈合〉という〈ハタラキ〉はアートマンに〈和合〉の関係で存在する。Cf. Kāśikā: antata āśrayataiveti. vastuta ātmamaṇṣaṁyogo 'pi jñānānukūlaḥ sambhavatīti bhāvaḥ. atra phalātāvachedakaḥ sambandho viṣayatā tena ghaṭādeḥ karmatvam iti bodhyam. jñānam eva phalaṁ, tad eva tadanukūlo vyāpāraḥ, phalātāvachedakaḥ sambandho viṣayatā, vyāpāratāvachedakas tu samavāya iti matāntaraṁ bodhyam.

〈目的〉にも〈対象性〉の関係で〈結果〉である知識が存在し得るということは, それによって〈結果〉の基体と〈ハタラキ〉の基体の別異性 (vaiyadhikarāṇya) が成立するということであり, この限りで  $\sqrt{jñā}$  は「他動詞」であるということを示している。

ところで, 例えば [devadatto jñānāti| の認識内容は, [devadattaniṣṭhā jñāna-nirūpita-āśrayatā| (デーヴァダッタに存する, 知識に制約された〈基体性〉) というパラフレーズによっても表現され得る。すなわち, 知識はアートマンの〈徳〉であるから, 〈和合〉の関係でアートマンに存在する (〈対象性〉の関係では知識は〈目的〉に存在する)。アートマンは知識の基体である。そして〈基体性〉は「自性関係」で基体であるアートマンに存在する。このように認識の構造を分析する時, 知識に制約された〈基体性〉は  $\sqrt{jñā}$  の意味であり, したがって知識を〈結果〉, 〈基体性〉を〈ハタラキ〉とみなすことができるのである [〈制約者性〉 (nirūpakatā) は関係 (saṁsarga) である]。

知識に関する言語表現の分析には, 各学派あるいは各思想家の認識論が如実に反映される。〈基体性〉等といった行為概念から遠く離れているように思わ

れるものであっても、パーニニ文法学派にとっては dhātu が意味するもの、それが〈行為〉なのである。

## 参 考 文 献

Abhyankar, K. V. and Shukla, J. M.

- [1977] *A Dictionary of Sanskrit Grammar*. Gaekwad's Oriental Series 134. 2nd rev. ed. Baroda: Oriental Institute, 1977. (1st ed., 1961.)

Bandini, Glovanni.

- [1980] *Die Erörterung der Wirksamkeit: Bhartr̥haris Kriyāsamuddeśa und Helārājas Prakāśal zum ersten Male aus dem Sanskrit übersetzt, mit einer Einführung und einem Glossar versehen*. Beiträge zur Südasienforschung; Bd.61. Wiesbaden: Steiner.

Cardona, G.

- [1967-68] "Anvaya and vyatireka in Indian Grammar." Festschrift V. Raghavan.
- [1974] "Pāṇini's Kāraḥ: Agency, Animation and Identity." *Journal of Indian Philosophy* 2.
- [1975] "Paraphrase and Sentence Analysis: Some Indian Views." *Journal of Indian Philosophy* 3.
- [1976] *Pāṇini: A Survey of Research*. The Hague: Mouton. Indian reprint, Delhi: Motilal Banarsidass, 1980.

Dasgupta, S.

- [1922] *A History of Indian Philosophy*. 5 Vols. 1st Indian ed., Delhi: Motilal Banarsidass, 1975. (1st ed. Cambridge: Cambridge University Press, 1922.)

Gode, P. K.

- [1953-56] *Studies in Indian Literary History*. 3 Vols. [1: Singhi Jain Series 37 = Shri Bahadur Singh Singhi Memoirs 4 (Bombay: Bhāratiya Vidyā Bhavan, 1953), 2: Singhi Jain Series 38 = Shri Bahadur Singh Singhi Memoirs 5 (Bombay: Bhāratiya Vidyā Bhavan, 1954), 3: (Poona: Prof. P. K. Gode Collected Works Publication Commit-

tee, 1956).]

Guha, D. C.

[1979] *Navya Nyāya System of Logic: Basic Theories & Techniques*. 2d rev. ed. Delhi: Motilal Banarsidass.

Hacker, P.

[1953] *Vivarta; Studien zur Geschichte der illusionistischen Kosmologie und Erkenntnistheorie der Inder*. Abhandlung der Akademie der Wissenschaften und der Literatur 1953.5. Mainz: Verlag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur in Mainz.

Iyer, K. A. Subramania

[1950-51] "The Conception of Action among the Vaiyākaraṇas." *Journal of the Gangānātha Jha Research Institute* 8.

[1969] *Bhartr̥hari: A Study of the Vākyapadīya in the light of the Ancient Commentaries*. Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 68. Poona: Deccan College.

金沢 篤

[1982] 「ananyalabhya-śabdārtha に就て」(『印度学仏教学研究』第30巻第2号)

黒田泰司

[1979] 「Kumārila の bhāvanā 説について (1)」(『印度学仏教学研究』第28巻第1号)

[1980] 「Kumārila の bhāvanā 説について (2)」(『印度学仏教学研究』第29巻第1号)

Kane, P. V.

[1975] *History of Dharmaśāstra: Ancient and Medieval Religious and Civil Law*. Vol.1, partII. Rev. and enl. Government Oriental Series-B 6. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1975.

Matilal, B. K.

[1968] *The Navya-Nyāya Doctrine of Negation: The Semantics and Ontol-*

*ogy of Negative Statements in Navya-nyāya Philosophy*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Mazumdar, Pradip Kumar

[1977] *The Philosophy of Language: In the Light of Pāṇinian and the Mīmāṃsaka Schools of Indian Philosophy*. Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.

小川英世

- [1984a] 「インド土着文法における分析と総合」(『哲学』(広島哲学会)第36集)
- [1984b] 「Kaṇḍabhaṭṭa の否定詞論」(『広島大学文学部紀要』第44巻)
- [1984c] 「kriyāviśeṣaṇa について」(『印度学仏教学研究』第33巻第1号)
- [1985] 「意味制限と接辞制限 — 文法学派における「制限」(niyama) の概念」(『哲学』(広島哲学会)第37集)
- [1986a] 「Kaṇḍabhaṭṭa の bhāvapratyaya 論」(『広島大学文学部紀要』第45巻)
- [1986b] 「文法家ミーマーンサカ」(『哲学』(広島哲学会)第38集)
- [1987a] 「Kaṇḍabhaṭṭa の abhedaikatvasaṁkhyā 論」(『広島大学文学部紀要』第46巻)
- [1987b] “The Use of the Particle *eva* in the Aṣṭādhyāyī” (『印度学仏教学研究』第35巻第2号)
- [1988a] 「Mahābhāṣya ad P1.3.1 研究 (1)」(『広島大学文学部紀要』第47巻)
- [1988b] 「BHĀVAPRADHĀNA-NIRDEŚA について」(『印度学仏教学研究』第37巻第1号)
- [1989] 「Mahābhāṣya ad P1.3.1 研究 (2)」(『広島大学文学部紀要』第48巻)

Pandeya, R. C.

[1963] *The Problem of Meaning in Indian Philosophy*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Rocher, Rosane

[1969] “The Concept of Verbal Root in Indian Grammar (A Propos of Pāṇini 1.3.1).” *Foundation of Language* 5.

Subha Rao, Veluri

[1969] *The Philosophy of a sentence and its parts (Śabda-bodha-dhātunāma-pratyayādy-artha-bodha-viṣayakaḥ prabandhaḥ)*. New Delhi: Munshi Ram Manohar Lal.

宇野 惇

[1977] 「新正理学の術語 (1)」(『広島大学文学部紀要』第37巻)

[1978] 「新正理学の術語 (2)」(『広島大学文学部紀要』第38巻)

[1979] 「新正理学の術語 (3)」(『広島大学文学部紀要』第39巻)

[1980] 「正理・勝論学説研究」(『広島大学文学部紀要』第40巻特輯号1)

[梵語文献・略語表]

BC: *Bhāṭṭacintāmaṇi (Tarkapāda)* of Viśveśvarasudhī (alias Gāgābhṭṭa).

Ed. Pt. Śrīsūryānārāyaṇaśukla. Chowkhamba Sanskrit Series 25,27. Benares: Chowkhamba, 1933.

BM: *Bālamānoraṃā* of Vāsudeva Dīkṣita. See SK.

JNM: *Jaiminiyanyāyamālā* of Mādhava. Ānandāśrama Sanskrit Series 24. Poona: Ānandāśrama, 1916.

Kāśikāvṛtti: Vāmana and Jayāditya's *Kāśikā-vṛtti*. (a) Ed. by Aryendra Sharma and Khanderao Deshpande. 2 vol. Hyderabad, 1969-1970. (b) Ed. with Jinendrabuddhi's *Kāśikā-vivaraṇa-pañjikā (Nyāsa)* and Haradatta's *Padamañjarī* by D.D. Shastri and K.P. Shukla. 6 vol. Varanasi, 1965-1967.

LŚ: *Laghuśabdenduśekhara* of Nāgoji (Nāgeśa) Bhṭṭa. Ed. with the commentary *Candrakalā* of Bhairava Mīśra by Narahari Śāstri Pendse. Re-ed. Gopāla Śāstri Nene. 2 vol. Kāshi Sanskrit Series 5. 2nd ed. Varanasi: Chaukhambha, 1987.

- Mbh: Patañjali's *Vyākaraṇa-mahābhāṣya*. (a) Ed. by F. Kielhorn, rev. by K.V. Abhyankar. 3 vol. Poona, 1962, 1965, 1972. (b) Ed. with the *Pradīpa* and *Uddyota* by Vedavrata. 5 vol. Gurukul Jhajjar, 1962-1963. c) Ed. Bal Shastri, with Bhattoji Deekshita's '*SHABDA-KAUSTUBH*', Nagojibhatta's '*UDDYOTA*' & Kaiyata's '*PRADIPA*'; with the Commentary '*AVINAVARAJLAKSHMI*' by Pt. Guru Prasad Shastri. 7 vol. 2d ed. Varanasi: Bāṇīvilāsa Prakāśana, 1988.
- MNP: Āpadeva's *Mīmāṃsānyāyaparakāśa*. Ed. with Cinnasvāmīśāstrī's *Sāra-vivecinī* by Pandit A.M. Ramanatha Dikshita. Kashi Sanskrit Series 25. 2d ed. Benares: Chowkhamba, 1949.
- Nirukta: *The Nirukta of Yāska (With Nighaṇṭu)*. Ed. with Durga's Commentary by H. M. Bhadkamkar, assisted by R. G. Bhadkamkar. Vol. I. Bombay Sanskrit and Prakrit Series LXXIII. Reprint ed. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1985.
- NSM: *Nyāyasiddhāntamuktāvalī* of Śrī Viśvanātha Pañcānan. Ed. with the commentary *Kiraṇāvalī* of Pt. Śrī Kṛṣṇavallabhācārya by Śrī Nārāyaṇa-carāṇa Śāstrī and Śrī Swetavaikuntha Śāstrī. Kashi Sanskrit Series 212. 3d ed. Varanasi: Chaukhambha, 1983.
- Pradīpa: Kaiyata's *Pradīpa*. See Mbh (b).
- ŚK: (a) *The Śabdakaustubha by Śrī Bhattoji Dikshita, vol. I, fas. I to IV, first pāda of the first adhyāya complete*. Ed. Gopāla Shastri Nene and Mukunda Śāstrī Puṅtamkar. Benares: Chowkhamba, 1933.  
*The Śabdakaustubha by Pandit Bhattoji Dikshita, Vol. II-fas. 5 to 10, from the second pāda of the 1st adhyāya to second pāda of 3rd adhyāya; and Sphoṭacandrikā by Pandit Srikrishna Mauni*. Ed. Gopāla Shastri Nene. Benares: Chowkhamba, 1929. (b) See Mbh (c).
- SK: Bhattoji Dikshita's *Siddhānta-kaumudī*. Ed. with the *Bālamānoramā* and the *Tattvabodhinī* by Giridhar Śarmā Caturveda and P.A. Śarmā. 4 vol. Varanasi, 1958-1961.

- Sphoṭavāda. *Sphoṭavāda of Nāgeśabhaṭṭa*. Ed. V. Krishnamacharya with his own commentary *Subodhinī*. The Adyar Library Series 55. Reprint ed. Madras: The Adyar Library, 1977.
- TV: *Tantravārttika* of Kumārila Bhaṭṭa. *Mīmāṃsādarśana*. Ānandāśrama Sanskrit Series 97. Poona: Ānandāśrama, 1929.
- Uddyota: Nāgeśa's *Uddyota*. See Mbh (b).
- VBh: Kauṇḍabhaṭṭa's *Vaiyākaraṇabhūṣaṇa*.
- VBhS: Kauṇḍabhaṭṭa's *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra*.
- VM (VSK): Bhaṭṭoji Dikṣita's *Vaiyākaraṇamattonmajjana (Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā)*.
- VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. (a) Ed. by Wilhelm Rau.(Abhandlung für die Kunde des Morgenlandes, Bd.42,4). Wiesbaden, 1977. (b) *Vākyapadīyam [Part III, Vol.II]: [Bhūyodravya-Guṇa-Dik-Sādhana-Kriyā-Kāla-Puruṣa-Sankhyā-Upagraha and Liṅga Samuddeśa]*. With the Commentary 'Prakāśa' by HELĀRĀJA and 'AMBĀKARTRĪ' by Pt. Raghunātha Śarmā. Sarasvatī Bhavana Granthamālā 91. Varanasi: Sampurnananda, 1979.
- VSM: *Vaiyākaraṇasiddhāntamañjūṣā* of Nāgeśa Bhaṭṭa. (a) Ed. Śukla, Kālikā Prasāda. M.M.Śivakumāraśāstri-Granthamālā Vol.3. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya, 1977. (b) Ed. Shastri, Kapil Dev. Kurukshetra: Vishal Publications, 1985.
- VSLM: *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā* of Nāgeśa Bhaṭṭa. Ed. Bhāṇḍāri, Mādhava Śāstri, with two commentaries, i.e., *Kuñjikā* of Durbalāchārya and *Kalā* of Bālam Bhaṭṭa. Chowkhamba Sanskrit Series 44. Varanasi: Chowkhamba, 1913-26.
- Vyutpattivāda. Gadādhara Bhaṭṭa's *Vyutpattivāda (Śabdakhaṇḍagrantha)*. Ed. with Śivadattamiśra's *Dīpikā* by Śrī Jvālāprasādagaudha. Varanasi: Bhāratīya Vidyā Prakāśana, 1973.

# Action and Language

– A Study of Sanskrit Semantics: the Meanings of Verbal Roots –

Hideyo OGAWA

This paper consists of an annotated translation into Japanese of Kauṇḍabhaṭṭa's *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* on the first two verses (*kārikā*) of the *Vaiyākaraṇamatonmajjana* or *Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā* by Bhaṭṭoji Dīkṣita.

Verses run as follows.

k.1. *phaṇibhāṣita bhāsyābdheḥ śabdakaustubha uddhṛtaḥ /*

*tatra nirṇīta evārthaḥ saṁkṣepena kathyate //*

k.2. *phalavyāpārayor dhātur āśraye tu tīnaḥ smṛtāḥ /*

*phale pradhānaṁ vyāpāras tīnarthas tu viśeṣaṇam //*

The first verse states, in terms of a *maṅgala* of a benedictory type, that thoughts represented in the work are endorsed by Patañjali's *Mahābhāṣya*. The second verse, with which the present paper is chiefly concerned, reveals Bhaṭṭoji Dīkṣita's own view regarding the meanings of verbal roots (*dhātu*). In this verse it is stated (1) that in a verbal form such as *pacati* 'He is cooking' verbal root (*pac* 'cook') denotes an action (*vyāpāra*) and its result (*phala*) separately, and affix ('*ti*') denotes substratum (*āśraya*) of the action—in an utterance such as *pacyate* '[Something] is being cooked' affix ('*te*') denotes one of the action's result, and (2) that among the meanings of a verbal form including two other meanings, viz. a number (*saṁkhyā*) and a time (*kāla*) reference, action becomes most prominent (*pradhāna*) and others are qualifiers (*viśeṣaṇa*) with respect to it. Here is expressed the idea that in a verbal cognition (*śābdabodha*) an action conveyed by a verbal root appears as the chief qualificand (*dhātvarthavyāpāramukhyaviśeṣyakabodha*).

In his *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* on this verse, Kaundabhaṭṭa is involved mainly in criticizing the views of the Nyāya and the Mīmāṃsā Bhāṭṭa schools. Naiyāyikas maintain that in an utterance such as *pacati* the verbal affix denotes '(internal, conscious) effort' (*kr̥ti*) which is nothing but an action according to the grammarians and is to be related to the significand of a nominative form as its qualifier (*prathamāntārthamukhyaviśesyakabodha*). Bhāṭṭa Mīmāṃsakas, on the other hand, hold that an action (*bhāvanā*) which is denoted by a verbal affix (*ākhyāta*) appears as the principal qualificand in a verbal cognition (*ākhyātārthabhāvanāmukhyaviśesyakabodha*).

The following is a synopsis of the *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* on k.2.

2.0. Introduction

2.k. (kārikā)

2.1. Syntactical agreement between *dhātuḥ* and *smṛtāḥ*

2.2.1. What is 'result' (*phala*) ?

2.2.2.1. Definition of 'action' (*vyāpāra*)

2.2.2.2. Definition of the state of being to be accomplished (*sādhyatva*)

2.2.2.3. *śakyatāvachedaka* for a verbal root: homonymy

2.3.0. *śakyatāvachedaka* for a verbal affix: Substratum-hood (*āśrayatā*)

2.3.1. Means of grasping the denotative relation (*śakti*) of a verbal affix to a substratum — P3.4.69

2.3.2. Nyāya interpretation of P3.4.69

2.3.3.1. Bhāṭṭa Mīmāṃsakas' interpretation of P3.4.69

2.3.3.2. Means of grasping the denotative relation of a verbal affix to an action — 'paraphrase' (*vivaraṇa*)

2.3.4.1. Denotata of a verbal affix and a nominative form related by *abheda* (non-difference)

2.3.4.2. Bhāṭṭa Mīmāṃsakas' justification of coreferentiality of a verbal affix and a nominative form

- 2.3.5. No denotative relation of L-affixes to substratum
- 2.4.0. The meaning of a complex (a verbal form): the qualificand-qualifier relation (*viśeṣaṇaviśeṣyabhāva*)
- 2.4.1. The agent (*kartr*) and object (*karman*) qualify an action and its result respectively
- 2.4.2.1. Number (*sainkhyā*) qualifies an agent and an object
- 2.4.2.2. Theory of *prathamāntārthamukhyaviśeṣyakabodha* criticized
- 2.4.3.1. Time (*kāla*) qualifies an action
- 2.4.3.2. Demonstrations of it
- 2.4.3.3. The view that time qualifies action's result proposed and criticized
- 2.4.4.1. The qualificand-qualifier relation summed up
- 2.4.4.2. *dhātvarthavyāpāramukhyaviśeṣyabodha* authorized by the *Nirukta* and the *Mahābhāṣya*
- 2.4.4.3. Grammarians' view supported by the usage *paśya mrgo dhāvati* ('Look! The deer is running')
- 2.4.4.4. Causal relation between qualificative cognition whose qualifier is an action and recollection of the denotatum of a word (*padārthopasthiti*) proposed
- 2.4.5.1. *pacati* ('He is cooking') and *pacyate* ('[Something] is being cooked' — verbal cognitions explained
- 2.4.5.2. *ghaṭo naśyati* ('A pot is perishing') — verbal cognition explained
- 2.4.5.3. *devadatto jānāti* ('Devadatta cognizes [something]') and *devdatto icchatī* ('Devadatta desires [something]') — verbal cognitions explained

In this translation, the author has given copious annotations in order to facilitate the reader to understand what Kauṇḍabhaṭṭa means in his laconic statements.

平成 2 年 3 月 30 日 印刷 (非売品)  
平成 2 年 3 月 31 日 発行

編集兼発行者 広島大学文学部  
広島市中区東千田町

印刷者 株式会社ニシキプリント  
広島市西区商工センター  
7丁目5-33